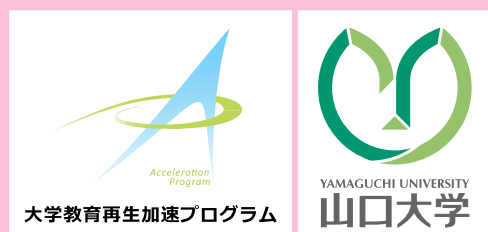


山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）

アニュアルレポート2017



YU-APアニュアルレポート2017

目次

I. はじめに

巻頭言	1
-----------	---

II. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業実績概要

1. 中間評価の実施	3
2. ALベストティーチャー表彰制度に基づくFD・SDワークショップの実施	5
3. ルーブリックを活用した学修評価ワークショップの実施	7
4. 教育改善FD研修会の展開	8
5. 修学指導調査の実施	9
6. ラーニング・アドバイザー養成講座の実施	10
7. 学生参画型FDの取組実績	11
8. 高大接続関連取組と他機関訪問調査の受入	12

III. テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）の実績

1. ALポイント認定制度の全学的展開	15
2. ALベストティーチャー表彰制度	16
3. Teaching & Learning Catalog	17
4. 正課外教育プログラムの開発と実践	18

IV. テーマⅡ（学修成果の可視化）の実績

1. 学修到達度調査及び学修行動調査の実施状況	21
2. 直接評価指標と間接評価指標の考え方	21
3. 代表的な直接評価指標と間接評価指標からみる学生の状況	22
4. 直接評価指標と間接評価指標の相関	25
5. 直接評価（成績）の規定要因分析	26
6. 間接評価（資質・能力、コンピテンシー）の規定要因分析	28
7. 直接評価・間接評価の試行的分析による教育改善への示唆	32
8. スタディ・スキルに関するルーブリック開発	33
9. YU CoB CuSの有効性の検証に関する調査について	35
【参考】学修行動調査質問紙	38

V. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業関連イベント報告

1. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）『アクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰記念FD・SDワークショップ』～第1回ALベストティーチャーによる模擬授業～	43
2. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）&医学教育センター共同企画FD・SDワークショップ『ルーブリックを活用した学修評価ワークショップ』～ルーブリックの観点と記述に着目して～	47

3. 大学マネジメントセミナー2017 in やまぐち「今、改めて考える"教職協働"」～地方大学の魅力発信と大学間連携～	51
4. 2017ラーニング・アドバイザー養成講座（第1～3回）	55
5. 山口大学 共有ワークショップ2018「みんなで教育（共有）について語ろう！～大学と高等学校による授業協奏曲～」	57
6. 【記録】学生FDサミット2017春「学生FD第一世代トーク」記録	62

VI. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業成果報告

1. 高知大学主催 平成29年度 大学教育再生加速プログラム（AP）事業シンポジウム「卒業時における質保証の取組の強化」ポスターセッション	81
2. 大学教育学会2017年度課題研究集会ポスターセッション	82
3. 宇都宮大学・AP事業中間シンポジウム基調講演	83
4. 宇部工業高等専門学校・徳山工業高等専門学校AP事業合同シンポジウム基調講演	92

VII. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）アドバイスメETING

1. 第10回アドバイスメETING	99
2. 第11回アドバイスメETING	100
3. 第12回アドバイスメETING（AAC&U参加報告を含む）	101

VIII. 各種セミナー等参加報告

1. SPODフォーラム2017	103
2. 山形大学・大正大学共催シンポジウム「直接評価の第一歩 基盤力テストの実施と活用に向けた取組」、大正大学・山形大学共催「第11回EMIR勉強会」	106
3. 高知大学主催 平成29年度 大学教育再生加速プログラム（AP）事業シンポジウム「卒業時における質保証の取組の強化」	110
4. 大学教育学会2017年度課題研究集会	113
5. 東洋大学IRシンポジウム	117
6. 第2回大学教育イノベーションフォーラム「大学教育開発の専門性を探る」	120
7. 東京大学高大接続研究開発センター主催シンポジウム「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」	123
8. 大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅡ・テーマⅤ共催シンポジウム「高等教育に求められる質保証を考える」	126
9. 平成29年度大学教育再生加速プログラム（AP）全テーマ合同報告会	129

IX. 活動日誌・編集後記

1. 活動日誌	133
2. 編集後記	137

I. はじめに



巻頭言

福田 隆眞（理事・副学長（教育学生担当））

山口大学は 2015 年に創基 200 周年を迎え、新学部の設置や全学的な組織再編を鋭意進めています。なかでも文部科学省大学教育再生加速プログラムの採択（2014 年度）を受けて、積極的に大学教育改革に取り組んでいます。山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」、テーマⅡ「学修成果の可視化」の取り組みを通して、①多様な学生すべてに対する能力育成を最大限支援する、②本学の教育システムを学生および社会に質保証できる、③本事業成果を積極的に情報発信し、我が国の高等教育全体の発展に貢献すること、を目指しており着実に成果を挙げています。

2015 年度より導入された AL ポイント認定制度では、当該授業でどの程度アクティブ・ラーニングの活動をしているのか、シラバスに明示されることとなりました。今年度（2017 年度）には、アクティブ・ラーニング型授業の割合が学士課程教育全体で 70%を超えるまでに広がりを見せています。

AL ポイントや学生の授業満足度をもとにアクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰制度も 2 年目を迎え、今年度は 5 科目・14 名を選定し表彰を行いました。また、今年度は、昨年度に AL ベストティーチャー表彰を受けた教員による模擬授業を通した FD・SD ワークショップを開催し、大好評となりました。AL ベストティーチャーによる授業実践を広く共有することで、全学的な教育改善の議論や組織文化の醸成に資することを目指しています。

さらに、YU CoB CuS、学修到達度調査、学修行動調査といった複数の直接評価・間接評価統合型の学修成果可視化モデルの構築に取り組んでいます。そのモデルの一部はすでに修学支援システムに取り入れられており、学生や教員が一目で今の到達度状況を把握できるような仕組みになっています。今年度からは、学生に対する修学指導を強化するため、事務職員を対象としたラーニング・アドバイザー養成講座の実施にも取り組み、学生の成長を支援する体制を一層充実していきたいと思っています。

今後とも着実に山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）を進めていくことで、組織的なアクティブ・ラーニングの推進と学修成果の可視化を通した適切な学修支援を実施し、大学教育改革をより一層加速・推進して参りますので、ご理解ご支援を賜れば幸いです。

Ⅱ． 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 事業実績概要

Ⅱ-1. 中間評価の実施

AP 事業では、正課教育と正課外教育の共創により、アクティブ・ラーニング（AL）を共通教育から学部専門教育に拡充しながら組織的に推進し、次の時代を切り拓く人材として必要な力「山口大学生に期待される汎用的能力」の育成を保证するため、先導的な学修成果可視化モデルの構築を行い、学生の「学びの好循環」の創出を目指している。「学びの好循環」とは、学習者中心の観点に立ち、学生の学びに焦点を当て、アクティブ・ラーニングの効果により、授業外学修時間の増加や学修成果の可視化を図り、学修履歴を集積するポートフォリオに基づき、適切なラーニングアドバイス、キャリアカウンセリングなどの学修支援を受けられるよう措置し、学生のさらなる成長を保证することである。

本学が掲げる事業目標を達成するため、本事業を円滑に実施できるよう、学長や副学長（教育学生担当）を中心とした実施体制を構築し、YU-AP 事業推進委員会、テーマ別タスクフォース及び自己点検・評価タスクフォースを定期的で開催し、事業ロードマップに基づいた課題整理及び実施検討を行ってきた。また、プログラムコーディネータ（特任助教）、事務補佐員、学生スタッフが相互連携しながら事業運営を行うことで、本事業専用のホームページの運用やニュースレター等の発刊による情報発信を積極的に行ってきた。学生の声を反映させながら、学生の主体的な学びを促進するための方向性を明確化してきた。

本事業の具体的取組として、テーマ別タスクフォース及び自己点検・評価タスクフォースの役割分担により、AL ポイント認定制度の運用と課題の明確化及び AL ポイントと学生授業評価アンケート指標との分析、学修到達度調査及び学修行動調査の実施と教員及び学生へのフィードバックを行ってきた。また、AL 推進及び教学マネジメント強化のための FD・SD ワークショップのほか、各学部主催「教育改善 FD 研修会」において AP 事業に関する意見交換を行ってきた。

AP 事業の成果発信として、『YU-AP ニュースレター』のほか、教員による優れた授業実践や学生による主体的な学修実践を集めたアクティブ・ラーニング実践集『Teaching & Learning Catalog』、年度報告書『YU-AP アニュアルレポート』などを発刊してきた。また、毎年度末には事業成果発表シンポジウムを開催しており、2016 年度には、学生リーダーによる学びの祭典「学生 FD サミット 2017 春」（258 名参加）、及び日本と米国の教育改革を比較検証した「国際シンポジウム 2017」（60 名参加）を開催し、新たな成果を得ることができた。これらの実績を基礎に、AP 事業目標達成に向けた取組を着実に進める。

【指標の公表】

AP 事業における必須指標及び本学の独自指標について、2014～2016 年度の実績、さらには、2016～2019 年度の目標値は下表のとおりである。アクティブ・ラーニング科目の導入や受講に関する実績値が順調に増加しており、これに伴う学生 1 人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間（1 週間当たり）が 2014 年度と比較して、2016 年度には「9.10 時間」と大幅に増加している。また、アクティブ・ラーニングを行う専任教員数も 2016 年度には「76.2%」まで増加し、より多くの専任教員がアクティブ・ラーニングに関わるようになっていくことが分かる。そのほか、各種 FD・SD 研修実施回数・参加者、ルーブリックの導入実績数など、順調に増加傾向にある。本事業が目指しているアクティ

ブ・ラーニングの組織的推進、それに伴う学生の授業外学修時間の増加、さらには、学修成果可視化や教職員が一体となった資質向上の取組が順調に進んでいると言える。

年度	2014	2015	2016		2017	2018	2019
	実績	実績	目標	実績	目標	目標	目標
【テーマⅠ】◆学生の主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニングの実施							
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合【必須指標】	13.6%	52.1%	60.0%	65.1%	65.0%	68.0%	70.0%
アクティブ・ラーニング科目のうち、必修科目の割合【必須指標】	93.2%	79.3%	60.0%	71.3%	62.0%	63.0%	65.0%
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合【必須指標】	45.3%	81.9%	100%	100%	100%	100%	100%
学生1人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数【必須指標】	2.4 科目	10.8 科目	11 科目	13.5 科目	12 科目	12 科目	13 科目
学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間（1週間当たり）【必須指標】	1.69 時間	7.19 時間	5.00 時間	9.10 時間	5.00 時間	6.00 時間	6.00 時間
アクティブ・ラーニング型の正課外教育プログラムの実施数（全学部生対象に限る）【独自指標】	17 プログラム	18 プログラム	15 プログラム	25 プログラム	20 プログラム	23 プログラム	25 プログラム
【テーマⅠ】◆アクティブ・ラーニング推進のための専門集団の形成							
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数【必須指標】	35.8%	73.1%	51.3%	76.2%	67.2%	67.8%	68.4%
アクティブ・ラーニングに関するFD・SD研修実施数、参加者数【独自指標】	15 回 464 人	25 回 968 人	15 回 500 人	22 回 950 人	18 回 550 人	20 回 600 人	20 回 600 人
アクティブ・ラーニング推進のためのAL推進チームの形成（FDコーディネータ養成）【独自指標】	3 人	10 人	10 人	21 人	21 人	21 人	21 人
【テーマⅡ】◆学修成果可視化モデル構築のための多角的取組の実施							
授業満足度アンケートを実施している学生の割合【必須指標】	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
上記アンケートにおける授業満足率【必須指標】	4.21	4.25	4.2	4.26	4.3	4.3	4.3

年度	2014	2015	2016		2017	2018	2019
	実績	実績	目標	実績	目標	目標	目標
学修行動調査の実施率【必須指標】	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
学修到達度調査の実施率【必須指標】	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
成績評価基準の平準化を目的としたルーブリック評価の導入実績数【独自指標】	9 件	12 件	15 件	17 件	25 件	30 件	30 件
学生の授業外学修時間（1 週間当たり）【必須指標】	13.04 時間	13.58 時間	6.50 時間	13.71 時間	6.50 時間	7.00 時間	7.00 時間
学生の主な就職先への調査【必須指標】	有	有	有	有	有	有	有
【テーマⅡ】◆学修成果測定を支える教学マネジメントの強化							
退学率【必須指標】	1.3%	1.1%	2.0%	1.3%	2.0%	2.0%	2.0%
プレースメントテストの実施率【必須指標】	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
教学マネジメント強化のためのFD・SD研修実施数、参加者数【独自指標】	18 回 1,046 人	11 回 693 人	5 回 300 人	10 回 652 人	8 回 400 人	10 回 500 人	10 回 500 人
ラーニングアドバイザー及び高度専門職（UEA：University Education Administrator）の配置【独自指標】	3 人	3 人	3 人	3 人	4 人	5 人	5 人

Ⅱ-2. AL ベストティーチャー表彰制度に基づく FD・SD ワークショップの実施

2016 年度から、共通教育におけるアクティブ・ラーニングの授業実践に顕著な成果を上げた教員を表彰する「AL ベストティーチャー表彰制度」が新たに策定された。この表彰制度は本学教員の、教育へのさらなる意欲向上と、アクティブ・ラーニングの推進を目的に創設されたものである。AL ベストティーチャーの選定には、前年度（2016 年度）の授業実践の AL ポイントや、学生の授業評価アンケートにおける授業満足度・理解度・達成度、授業外学修時間、成績評価分布などの指標が用いられ、審査が行われた。その結果、第 2 回目の受賞者として 5 科目 14 名が選定された。

YU-AP 事業では表彰にとどまらず、AL ベストティーチャーの授業実践をアクティブ・ラーニングのグッドプラクティスとして蓄積することを進めている。それらを教員が手に取りやすい冊子（Teaching & Learning Catalog）にまとめて配布することで、教員のアクティブ・ラーニングの実践に向けたヒントになるとともに、学生の主体的な学びについて改めて議論するきっかけになることを目指している。また、Moodle などを活用することによ

り、目的に合ったアクティブ・ラーニングの実践情報をタグで検索することができるような、他の教員のニーズに実質的に応えることができるようなシステムを構築することを目指している。

そのため、AL ベストティーチャーの授業実践に関する情報収集は、単なる事例集にならないよう、あらかじめ設定した軸によって分類・整理できるように行っている。当該実践において特定のアクティブ・ラーニングがどのような目的で取り入れられたのか、実施するにあたり留意すべき点は何か、その評価はどのようにすべきか、結果として学生はどのような学びをしたのかなどの観点から、その実践の詳細を明らかにし、より多くの教員に授業実践に活かしていく工夫を施している。その一つの方策として、AL ベストティーチャーによる模擬授業型ワークショップを新たに開発した。

2017 年 9 月 26 日（火）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）『アクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰記念 FD・SD ワークショップ ～第 1 回 AL ベストティーチャーによる模擬授業～』が、学内外から合計 52 名の参加者を集めて、本学吉田キャンパス共通教育棟 15 番教室（アクティブ・ラーニング教室）にて開催された。

模擬授業 Part1 では、上田 真寿美 山口大学国際総合科学部教授より、「深い学びにつなげるアクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』」と題して、アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』初回の模擬授業を行っていただいた。授業のオリエンテーション時における学生との関係づくりを大切にし、受講生全員の名前を読み上げて出席を確認した後、グループメンバー同士の自己紹介やチームづくりのポイントを説明された。このほか、授業の到達目標に関連して『山口と世界』コモンルーブリックの観点の説明や、グループごとの活動記録に対するフィードバック、さらには、中間発表や最終発表の評価のあり方などについて紹介があった。



模擬授業 Part2 では、尊田 望 山口大学非常勤講師より、「「英語が嫌い」から「英語が楽しい」に変えるアクティブ・ラーニング」と題して、アクティブ・ラーニング型授業『English Speaking』導入部分の模擬授業を行っていただいた。自己紹介演習、語彙ゲーム、Q&A 演習、コミュニケーションゲームと、タイマーによる制限時間内のワークを小刻みに行いながら、教材を通して知っている単語を増やししながら、実際に英語を使って分かるようになる楽しさを実感させる授業を参加者一同が体感し、教室全体が活気ある雰囲気包まれた。



後半の質疑応答では、参加者から積極的に質問があり、実践に役立てたい、実践での課題解消に結び付けたいという熱い思いが伝わってくるワークショップとなった。



参加者による記念写真

Ⅱ-3. ルーブリックを活用した学修評価ワークショップの実施

2016 年度に実施した「新しい共通教育の検証に関するアンケート」において、ルーブリックの利用頻度に関して設問したところ、15.1%（有効回答 449 名中 68 名）の教員が成績評価にルーブリックを活用している実態が明らかとなった。具体的には、共通教育科目「山口と世界」のほか、医学部、工学部、国際総合科学部などでの活用実践であり、本学の医学教育センターなどとの情報交換を進めてきた。

2016 年度文部科学省・フォローアップ報告書の課題の指摘を踏まえながら、ルーブリックを活用している教員による実践報告などを交えた研修会（ワークショップ）を 2017 年度中に企画実施し、ルーブリック活用による学修成果可視化のあり方に関して協議しながら、ルーブリック活用に関するメタ評価やルーブリックの改善・充実に向けた方策について検討していくこととした。

2017 年度の検討を踏まえて、2017 年 11 月 10 日（金）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）&医学教育センター共同企画 FD・SD ワークショップ「ルーブリックを活用した学修評価ワークショップ～ルーブリックの観点と記述に着目して～」を開催する運びとなった。当日は、学内外から合計 41 名の参加者を集めて、本学吉田キャンパス 共通教育棟 26 番教室（アクティブ・ラーニング教室）にて開催された。本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の一環としての実施であるとともに、医学教育センターとの初めての共同企画での実施となった。

導入レクチャーでは、俣野 秀典 高知大学地域協働学部講師より、「ルーブリックによる学修評価を知る、活かす」と題して、ルーブリックに関する基礎知識を学んだ。

事例紹介では、藤宮 龍也 山口大学大学院医学系研究科教授より、「医学科チュートリアル教育におけるルーブリック活用実践」と題して、2017 年 3 月の医学教育モデルコア・カリキュラムの改訂に伴う医学教育改革などを紹介しながら、医学科チュートリアル教育においてルーブリックを活用した成績評価を行っている複数科目の実践事例が紹介された。

後半のワークショップ「ループリックの観点や記述を考える」では、俣野 秀典 高知大学地域協働学部講師のファシリテーションにより、ループリックに関する詳細や作成上の注意点に関する説明があり、その後、いくつかの参考事例を紹介しながら、レポートを評価する際の観点やレベル毎の評価基準の記入を行うワークに取り組んだ。

このほか、当該 FD・SD ワークショップでは、ループリックの作成だけでなく、作成後のループリックの調整などについて知識を深めた。



Ⅱ-4. 教育改善 FD 研修会の展開

本学では、全学展開の教育改善 FD 研修会などを実施している。本年度の研修会では、各学部で 3 つのポリシー改訂に伴うカリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャート改訂を依頼する説明や意見交換が行われた。

まず、本学では従来からポリシーに基づく内部質保証システムを確保してきたが、政府の高等教育政策の動向を追っていくと、2005 年 1 月の中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像』を契機として、3 つのポリシーの策定による学習成果基盤型教育が推奨されるようになり、2013 年度末には、ほとんどすべての国立大学で 3 つのポリシーが策定された状況が説明された。2014 年 12 月の中央教育審議会答申（高大接続答申）において、改めて、3 つのポリシーの一体的な策定が求められるようになり、2015 年度には中央教育審議会大学分科会大学教育部会での検討を経て、2016 年 3 月末に、学校教育法施行規則の一部改正による 3 つのポリシーの公表義務化、さらには、『卒業認定・学位授与の方針』（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン』が提示された。これに対応して、学内では、ディプロマ・ポリシー等検討ワーキンググループを設置して、当該ガイドラインに基づき、3 つのポリシーの改訂を行った旨の説明があった。特に、ディプロマ・



ポリシー（DP）とカリキュラム・ポリシー（CP）の一貫性の確保が重要であるとの言及があった。

次に、カリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートの意義や構成内容について説明があり、今回の3つのポリシーの改訂に伴い、改めて、既存のカリキュラム・マップおよびカリキュラム・フローチャートの改訂を依頼する趣旨を説明した。

その後、カリキュラム・マップの「○付け作業体験」と題して、配布されたカリキュラム・マップ様式に従い、参加教員各人が担当授業科目の到達目標と所属学科のDPを確認しながら、DP達成のための寄与（貢献）度について「◎、○、△」を記入するワークを行った。このことにより、参加教員一同、所属学科のカリキュラムにおける担当授業科目の位置づけやDPとの関係性について理解を深めた。



Ⅱ-5. 修学指導調査の実施

YU-AP 事業では「学びの好循環」をキーコンセプトに、学生の主体的な学びを起点として学修成果を可視化するとともに、可視化された学修成果に基づく修学指導により、学生自らがさらに成長していくことを目指している。既に、AL ポイント認定制度の導入、新修学支援システム（eYUSDL）の構築などを進めてきたが、これらの学修環境の整備を基礎に、学生自らの振り返りとさらなる成長を促す修学指導の改善充実を次の課題として掲げている。2017 年度前半期に開催された大学教育再生加速プログラム事業推進委員会（YU - AP 委員会）において、各学部における修学指導調査の実施を提案し、その結果をとりまとめた（結果の概要は以下のとおりである）。各学部の学科（またはコース・選修）における定期的な修学指導について、学年ごとの修学指導の時期、担当者、方法を具体的に把握することを通して、可視化された学修成果に基づく修学指導の充実や、ラーニング・アドバイザー制度の導入などの参考資料として活かすこととしている。

【調査項目ごとの結果概要】

（１）貴学部の各学科（またはコース・選修）における定期的な修学指導について、学年ごとの修学指導の時期、担当者、方法を具体的にご記入ください。

[（注）：「修学指導」とは、修学相談、教育課程、履修方法など修学上の各種指導を指す。]

☞ 1 年次・・・ほとんどの学部・学科等で定期的な修学指導を実施。

人文学部など、ポートフォリオを参考にした面談を実施。

経済学部は学務係員による修学指導に留まる。ただし、修学不良者には指導教員等が対応。

ただし、工学部では、機械工学科が定期的な修学指導を行っていないとい

う回答となっており、そのほかの学科も入学オリエンテーション等に留まる。担当者も教務委員のケースが多い。

- ☞ 2 年次・・・全学部・学科等で定期的な修学指導を実施。
- ☞ 3 年次・・・1 年次または 2 年次の定期的な修学指導状況を踏襲。
研究指導教員が担当する学部・学科等が多くなる。
- ☞ 4 年次・・・概ね、研究指導教員が定期的な修学指導を担当。

(2) (1) で記載した定期的な修学指導以外に、個別に修学指導する機会があれば、どのように対応しているか、具体的にご記入ください。

- ☞ 主に、成績不振者、出席不良者の対応

(3) 修学指導において留意している点があれば、ご記入ください。

- ☞ 単位取得状況、出席状況、健康状態、課外活動、学生生活全般
- ☞ 早期対応

(4) 修学指導において、ポートフォリオをどのように活用されていますか。具体的にご記入ください。

- ☞ 成績情報以外の情報源、振り返りとしての活用

(5) その他、修学指導において抱えている課題があれば、自由にご記入ください。

- ☞ 連絡の取れない学生の対応、障がいのある学生の対応

Ⅱ-6. ラーニング・アドバイザー養成講座の実施

大学における学生の「自主的な学び」「積極的な学習行動」の支援者は教員だけではない。現に、教育支援・学生支援・就職支援・図書館といった部署では、その役割の一部を担っている。学生の多様化が進んできたこともあり、これまで以上に事務職員による学修支援体制の充実が求められてきている。

そこで、AP 事業の一環として、「学生の学びの好循環」に資することのできる事務職員に活躍してもらうため、「ラーニング・アドバイザー制度」を創設した。この制度は、大学教育機構が主催する「ラーニング・アドバイザー養成講座（全 3 回）」を受講・修了することにより、ラーニング・アドバイザー認定証が授与されるというものである。

講座の内容は、事務職員一人ひとりがこれまでのキャリアを振り返りつつ、大学人として身に付けておくべき学内の各種情報や制度、学生のニーズなどをしっかり把握・理解したうえで、学生の学びに関する疑問・悩みに応える事務職員になることを目指したものとした。

初回の講座は、2017 年 11 月から 2018 年 1 月にかけて開催した。計 23 名から受講申込があり、このうち 8 名の事務職員の方々が全 3 回の講座を受講・修了し、大学教育機構長から「ラーニング・アドバイザー認定証」が授与された。



Ⅱ-7. 学生参画型 FD の取組実績

山口大学では、本学の取組が文部科学省大学教育再生加速プログラムの採択を受ける以前から、学生参画型 FD（学生の参画を得ながら大学教育のよりよい発展を目指す活動）に取り組んでおり、2016 年度には、一つの到達点として、全国イベントである『学生 FD サミット 2017 春 山口大学「Borderless Campus～学びのフィールドはどこにある？～」』（学内外から総勢 258 名の学生・教職員が参加）を成功することができた。テーマとして、学びの多様性に焦点を当て、「発見し・はぐくみ・かたちにする」という活動を通して、参加者それぞれが自身の学びを見つめなおして学びのフィールドを探索するとともに、その大学オリジナルな学生 FD を考えることを目指したものであった。YU-AP 事業で進めてきた教職学協働の結晶として達成できたイベントとなった。



2 日間のイベントの 1 日目には、奥田 真也（経済学部 4 年生（当時）・学生 FD サミット 2017 春 実行委員会代表）より開会宣言が行われた。次に、岡 正朗 学長及び学生 FD の第一人者である元立命館大学教授 木野 茂 氏より開会挨拶があった。その後、学生 FD 第一

世代トーク「とどけ、熱き心!」、午後には分科会セッション「山大 春の陣」と題して、下関市立大学・岡山理科大学・山口大学 3 大学の学生グループによる分科会が行われ、その後、体育館に移動して、「教室内学習」派と「教室外学習」派に分かれて、参加者一同で綱



引きを行った。2 日目には、グループワークセッション「学生 FD サミットのビジョンをデザインしよう!」と題して、どんな学生 FD サミットに参加したいのか、作り上げていくのか、そのビジョンをデザインするというグループワークが行った。クロージングセッションでは、各グループが考えたビジョンをもとに、学生 FD サミットのエンブレム（右図）を披露するというサプライズ演出が

あり、今後の学生 FD サミットにつながる貴重な機会となった。

2017 年度の学生参画型 FD 活動は、『学生 FD サミット 2017 春』でテーマに掲げた「Borderless Campus」を実現すべく、学生メンバーが地域活動を通して自分のアイデアをカタチにする活動を新たに展開した。具体手には、山口市内で開催された「アートふるやまぐち」でのスタンプラリー企画と当日運営（来場者



200 名以上)、山口市と山口大学がコラボしたクリスマスイルミネーション企画など、教職員・地域が協働して学習者の学びの充実を図る Learning Development の取組を着手した。



この他、2016 年度から取り組み始めた、アクティブ・ラーナーである 4 年生を取材し、先輩学生の学びのプロセスを Learning Catalog としてまとめる活動を行った。学生による学生のための取材・カタログ作成は、インタビューする後輩学生、インタビューを受ける先輩学生の双方にとって、貴重な学び合いの機会となっている。

Ⅱ-8. 高大接続関連取組と他機関訪問調査の受入

YU-AP 事業では、学内の教育改革だけでなく、AP 事業採択校間の情報交流、さらには、我が国の高等教育全体における質保証、高大接続改革に貢献すべく、積極的な情報発信に努めることを重要な使命と考えている。本学の取組に関心を示し、訪問調査を受ける機会も多く、2014 年度以降、国立大学 2 機関、公立大学 2 機関、私立大学 7 機関、さらには日本私立学校振興・共済事業団からの訪問調査を受けてい



国内外や学校種を超えて、YU-AP 事業の取組の成果発信と情報交流を益々進めていき



平塚工業高等専門学校：平成27年度情報メディアM専攻専攻教育プログラム（チャンプイヤー）
 横浜工業高等専門学校：平成28年度情報メディアM専攻時代における新保証の取組の強化

大学教育再生加速プログラム (AP)

Acceleration Program for University Education Rebuilding

合同シンポジウム

平成29年 **12月25日（日）** 18:00~19:00

VC studio 1 島田駅 山崎通山口（小栗町交差点）
 新山口駅 新南口西ビル1F

**事前申込制
参加費無料**

17:00~18:00
18:30~19:30

18:00~18:30

19:30~20:00
20:30~21:00
21:30~22:00
22:30~23:00

18:30~19:00

開会挨拶 平塚工業高等専門学校 理事 三田浩一
特別挨拶 1 専修大学 学長 山崎正太郎
 2 山崎大学 大学教育推進カレッジセンター 学長 林 達也
基調講演 1 産官学連携による産生に対する企業家の期待
 平塚市キャリアアドバイザー 山崎正太郎氏
発表 1 専修大学より山崎浩一氏
 2 山崎大学より山崎正太郎氏
 3 山崎大学より山崎正太郎氏
閉会挨拶 山崎工業高等専門学校 理事 三田浩一



〒250-0292 平塚市南町1-1-1 島田駅 山崎通山口（小栗町交差点）
 〒410-0031 新南口西ビル1F 新山口駅

TEL 055-251-0104
 TEL 055-251-0111

E-mail ap@shizuoka.ac.jp
 E-mail info@yokohama.ac.jp

【主催】平塚工業高等専門学校、山崎工業高等専門学校、専修大学キャリアアドバイザー、山崎大学キャリアセンター、山崎大学キャリアセンター

【協力】山崎工業専門学校、アカデミー

〒410-0031 新南口西ビル1F 新山口駅

Ⅲ. テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）の実績

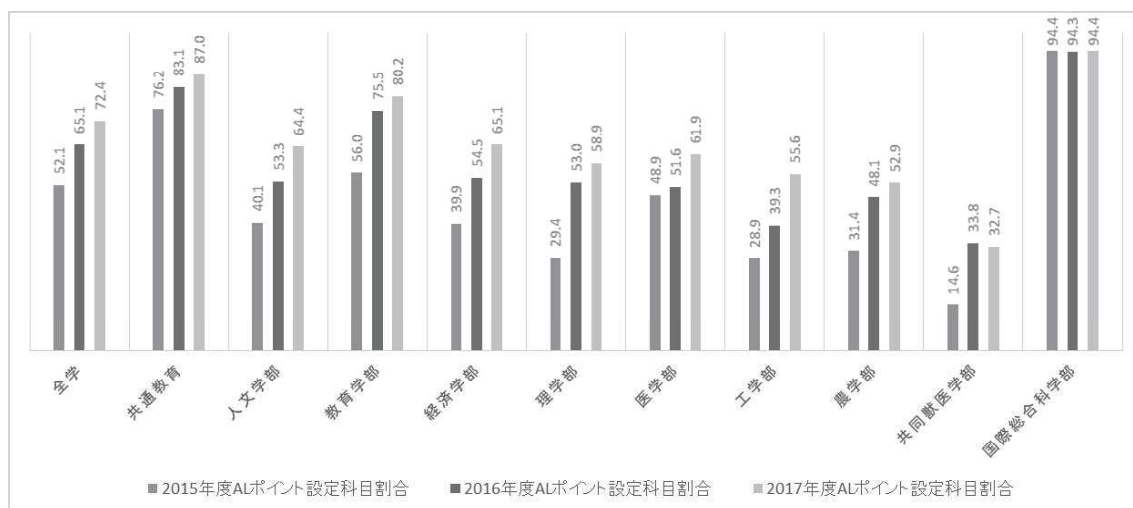
Ⅲ-1. AL ポイント認定制度の全学的展開

正課及び正課外教育プログラムにおける各科目のアクティブ・ラーニングの度合いを認定する仕組「AL（アクティブ・ラーニング）ポイント認定制度」が導入されて3年目となった。AL ポイントとは、担当教員がシラバス入力時にアクティブ・ラーニングの6つの形態「グループワーク」「ディスカッション・ディベート」「フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）」「プレゼンテーション」「振り返り」「宿題」に関して、当該科目の授業各回についてそれぞれどの程度行うのか、「多（3点）」「中（2点）」「少（1点）」（ただし「振り返り」「宿題」に関しては「ある」場合に1点）から選択することでポイント化されるものである。なお、授業各回のポイントの総和を授業回数で除すことによって、授業回数に依存しない指標（最大が14点）となっている。なお、AL ポイントは学生にも確認可能なようにシラバスに明示される。これにより、教員に対しては授業のアクティブ・ラーニング化を促すとともに、学生に対しては履修の参考にすることで、アクティブ・ラーニングを通した主体的な学びを促すことを趣旨としている。

これまで3年間の「AL ポイント設定科目の割合」の経年変化を授業開講部門別に見てみると（図表Ⅲ-1）、初年度と比べて約2倍となった理学部や工学部をはじめ、国際総合科学部・共通教育・教育学部のように80%を超える部門があるなど、全学的に増加傾向にあることがグラフから見てとれる。

また、「AL ポイント設定科目における平均 AL ポイント」の経年変化を授業開講部門別に見てみると（図表Ⅲ-2）、当初2年間はさほど変化がなかったものの、3年目の2017年度に大きく伸びた部門が多く、全学では4.78という値になった。

以上のように、本学におけるALの定義が少しずつ浸透し、AL型授業が着実に増加していることがうかがえる。



図表Ⅲ-1「AL ポイント設定科目の割合」の経年変化



図表Ⅲ－2「AL ポイント設定科目における平均 AL ポイント」の経年変化

Ⅲ－2. AL ベストティーチャー表彰制度

共通教育におけるアクティブ・ラーニングの授業実践に顕著な成果をあげた教員を表彰する「AL ベストティーチャー」の第2回受賞者14名が選出された。AL ベストティーチャー表彰制度は、本学が2014年度に採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）の一環として2016年度に制定された制度で、シラバスのAL ポイント、学生授業評価、成績評価分布などを指標に審査し、受賞者を決定している。その第2回受賞者の表彰式が12月5日（火）の部局長会議の冒頭で行われた。

表彰式では、岡 正朗学長より、「AL に先生方が積極的に取り組み、成果を出していただいたことを大変嬉しく思う。これからも山口大学の教育力向上のため、ご協力いただきたい。」との言葉が贈られ、出席した10名の教員に1人ずつ表彰状が手渡された。

なお、表彰式に先立ち、岡学長と表彰者との間で懇談会が開催された。懇談では、近年の学生の授業を受ける態度の変化や実験科目における授業時の工夫、外国人留学生の成長の様子、学生の表彰方法の改善提案など、教育活動の改善に向け様々な視点から意見交換がなされた。



2017年度 AL ベストティーチャー表彰の様子



懇談の様子

区 分	授業科目名	所属・職名	氏 名
基礎セミナー	基礎セミナー	創成科学研究科（農学）・准教授 創成科学研究科（農学）・准教授	井内 良仁 藤井 克彦
山口と世界	山口と世界	大学教育機構・講師	辻 多聞
情報リテラシー演習	情報リテラシー演習	創成科学研究科（理学）・教授	川俣 純
語 学	日本語ⅣB	国際総合科学部・助教	仁平 千香子
演習・実験・実習	生物学実験	大学研究推進機構・教授 創成科学研究科（農学）・教授 創成科学研究科（農学）・教授 創成科学研究科（農学）・教授 創成科学研究科（農学）・教授 創成科学研究科（農学）・教授 創成科学研究科（農学）・助教 創成科学研究科（農学）・助教 創成科学研究科（農学）・助教	真野 純一 横山 和平 松井 健二 阿座上 弘行 内海 俊彦 宮田 浩文 高坂 智之 肥塚 崇男 片岡 尚也

図表Ⅲ－3 2017年度 AL ベストティーチャー受賞者一覧

Ⅲ－3. Teaching & Learning Catalog

昨年度に引き続き、「Teaching & Learning Catalog」の第2号を制作した。「Teaching Part」は、2017年度のAL ベストティーチャー賞を受賞した5科目・6名に対する半構造化インタビューをまとめたものである。具体的な質問は、到達目標との関係におけるアクティブ・ラーニング導入の目的、受賞者が担当している講義形式とアクティブ・ラーニング型授業の違い、授業におけるアクティブ・ラーニングの技法や使用教材、アクティブ・ラーニングの推進にあたり心がけていること、学生の深い学び（ディープ・ラーニング）

を促すために心がけていることといった項目を中心に、授業見学時に気づいた点や授業中における学生の様子等も踏まえて用意した。

インタビューを通じて、学生の主体的な学びを促すためにどのような視点を持って授業に臨んでいるかを質問したところ、教員の専門分野によらず次の 6 点の共通した意見を得ることができた。

- ・基本的には答えを教えない
- ・教える内容を詰め込みすぎない（ある程度割り切って「捨てる」ことも大事）
- ・身近な物事を通じて、学生の興味・関心を引き出す努力をする
- ・学生と一緒に考える／学ぶ
- ・楽しく学ぶ／教える
- ・学生にフィードバックする

以上のような視点で授業として教える内容を組み立て、手法としてのアクティブ・ラーニングを適切に組み合わせることで、学生の主体的な学びに繋がるよう工夫しているということであった。加えて、感覚的な意見ではあるが、学生同士でのディスカッション・ディベート、プレゼンテーションは、学生の深い学び（ディープ・アクティブ・ラーニング）に寄与していると思う、というコメントも複数得ることができた。

また、「Learning Part」では、アクティブ・ラーナーである 3 人の学生が、これまでどのような学びの歴史を経てきたのか、学生スタッフがインタビューしている。

「Teaching & Learning Catalog」の発刊により、アクティブ・ラーニングは手法であって目的ではないことを改めて認識しながら、アクティブ・ラーニングの実践に向けたヒントとして活用されるとともに、学生の主体的な学びについて改めて議論するきっかけとなることが期待される。



Teaching & Learning Catalog vol.2 の抜粋

Ⅲ-4. 正課外教育プログラムの開発と実践

YU-AP 事業では、学生参画による事業推進を行っており、『共育ワークショップ』等の企画・運営を行っている。それは学生と教職員の連携を強化するとともに、学生自身の学びの機会となっている。

また、学生の参画を得て新しい正課外教育プログラムであるスチューデント・リーダー・プログラム (SLP) も開発と実践が進んでいる。AL を前提として 2014 年度から始まった SLP は、【ラーニング・スキル開発】【キャリア開発】【学生企画】の 3 つの大きな区分を設け、これまで計 20 回以上開催されてきた。2017 年度は【ラーニング・スキル開発】計 4 回、【キャリア開発】計 1 回開催 (図表Ⅲ-4 参照) され、全体で 150 名近くの学生が参加し、満足度の高い評価を得た。また、SLP のシラバスの例を図表Ⅲ-5 に示す。

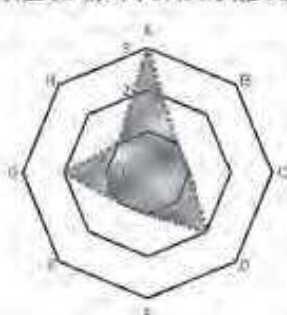
2017 年度は、【ラーニング・スキル開発】では、学生が主体的かつ能動的に学ぶための学びの手法を習得することを目的に、ライティングやプレゼンテーションに関する基礎スキルをレクチャーし、ミニワークを行った。特に、ライティング・スキル養成講座は、2016 年度に実施した「初年次学生の学習意識調査」の結果において、学生から要望が強かったことを踏まえ企画した。

【キャリア開発】では、学生のキャリア意識を醸成することを目的として、大学職員の仕事の魅力について、山口大学出身の職員が話題提供した。このメニューは毎年好評で、今や定番となっている。

開催時期	分類	メインテーマ	参加者数
2017 年 5 月	第 2 回 SLP 【キャリア開発】	『ぶち教えちやる！大学職員の仕事—大学職員の先輩に聞いてみよう—』	43
2017 年 7 月	第 5・6 回 SLP 【ラーニング・スキル開発】	『ライティング入門講座 ～レポートの書き方の基本的な作法とコツをつかめ！～』	70
2017 年 11 月	第 7・8 回 SLP 【ラーニング・スキル開発】	『プレゼンテーション入門講座 ～プレゼンテーションの基本的な作法とコツをつかめ！～』	25

図表Ⅲ-4 スチューデント・リーダー・プログラム (SLP) 開催時期等一覧

正課外教育プログラム実施概要（シラバス）

プログラム名	第5回・第6回 スチューデント・リーダー・プログラム (SLP) 【ラーニングスキル開発】			
実施日	2017 年 7 月 5 日 (水) 6 日 (木)			
実施場所と定員	総合図書館アカデミック・フォレスト (17/5) 共通教育館26番教室 (17/6) (定員) 各20名程度			
担当	(教員) 池田 幸子 准教授 (兼任) 大野 真由美 准教授 (兼任) 宇木 暢 准教授 (兼任) 佐々木 直 准教授 (兼任)			
プログラム概要	2016年度に実施した「初年度学生の学びの調査」の結果を踏まえ、学生から要望が高かったライティングスキル養成に関する講座を新たに夜間開講することになりました。 初年度に向けて、定期試験や課題でレポートを書く機会が増えてくることで、レポートの基本的な作法やポイントのコツをつかえば、あなたもレポートの作成はグーンと良くなるでしょう。 さあ、ライティング入門講座に気軽に参加してみよう！			
到達目標に関する 各項目の重要度 ◎ 非常に重要 ○ 重要 □ 検討、考慮する (丸印は計4つまで)	【A】書きを大切に、「自ら」が考え・判断・表現・行動・発言する能力		◎	
	【B】あらたな言語や困難にチャレンジし、解決する力			
	【C】個性を大切に、心身ともに豊かな人間性と＜笑＞を発見するところ			
	【D】専門家としての知識や能力を身につけ、自分を活かす力		○	
	【E】出会いと交流の中で、夢と目標を磨き上げ、真実を追求し続けることを願い、地域社会と国際社会への責任感や使命感			
	【F】専門性を活かし、さらに分野を超えて、人々の幸せや社会・環境全体のあるべき姿について、考え行動する力			
	【G】夢を描き続け、自らが生涯を通じての＜知の探求者＞になる「礎」を築く		○	
	【H】国を超えた多くの人々と出会い、世界にはばたいて活躍する力			
	ALポイント 認定制度 【30ポイント】	グループワーク		少
		ディスカッション・ディベート		少
		フィールドワーク (実験・実習、演習を含む)		
		プレゼンテーション		
		振り返り 宿題		有
プログラム詳細 (スケジュール等)	第5回：7月5日 (水) 16:30～17:30 第6回：7月6日 (木) 12:00～12:40			
	内容：(※第5回・第6回ともに内容は同じです) ①レポートの書き方の基本的な作法 ②レポートの書き方のコツの伝授 ③実際のレポートの事例を通じた演習			
到達目標(汎用的能力)		このプログラムのALの特徴		
		このプログラムは、大学生として必ず知っておいてほしいスタディスキルである、アカデミック・ライティングの基礎を学ぶことを狙いとしています。このため、講師によるレポートの書き方の基本的な作法やコツに関する説明を受けるほか、実際のレポートの事例を参照しながら、レポートの書き方の実践力を養っていきます。今回のプログラムでは、講師の説明をしっかりと聴いて、理解することが中心ですが、ALとしては、ミニワークを取り入れています。アカデミック・ライティングの基礎を習得して、「書きを大切に、「自ら」が考え・判断・表現・行動・発言する能力」の基礎を鍛えることを重要視しています。		

図表Ⅲ-5 スチューデント・リーダー・プログラム (SLP) シラバス例

IV. テーマⅡ(学修成果の可視化)の実績

Ⅳ－1. 学修到達度調査及び学修行動調査の実施状況

2015・2016年度の2年間にわたり、学部1年生と学部3年生の一部を対象として、学修到達度調査（PROGテスト）と学習行動調査アンケート（JSAAP）を行ってきた。

2017年度については、調査対象者に変更はないが、調査の構成を見直した。学修到達度調査（PROGテスト）は継続して実施することとしたが、参加機関が少なくベンチマークが不十分であること、また、回答に必要な項目数が多く、学生の負担が大きく、かつ回答時間の確保が困難であるといった理由から、学習行動調査アンケート（JSAAP）の実施を見送り、新たに山口大学オリジナルの学修行動調査を実施することとなった。

なお、2017年度の学修到達度調査（PROGテスト）と学修行動調査実施状況は図表Ⅳ－1のとおりである。

1年生	学生数	学修到達度調査（PROGテスト）		学修行動調査	
		回答者数	回答率	回答者数	回答率
人文学部	199	198	99.5%	190	95.5%
教育学部	191	0	0.0%	1	0.5%
経済学部	353	346	98.0%	324	91.8%
理学部	234	215	91.9%	214	91.5%
医学部	231	225	97.4%	223	96.5%
工学部	549	467	85.1%	466	84.9%
農学部	109	108	99.1%	107	98.2%
共同獣医学部	33	33	100.0%	33	100.0%
国際総合科学部	105	105	100.0%	104	99.0%
合計	2,004	1,697	84.7%	1,662	82.9%

3年生	学生数	学修到達度調査（PROGテスト）		学修行動調査	
		回答者数	回答率	回答者数	回答率
人文学部	200	197	98.5%	183	91.5%
教育学部	180	9	5.0%	9	5.0%
経済学部	360	360	100.0%	338	93.9%
理学部	267	203	76.0%	183	68.5%
医学部（保健学科のみ）	122	118	96.7%	117	95.9%
工学部	739	499	67.5%	499	67.5%
農学部	107	101	94.4%	102	95.3%
共同獣医学部	30	28	93.3%	28	93.3%
国際総合科学部	102	99	97.1%	99	97.1%
合計	2,107	1,614	76.6%	1,558	73.9%

図表Ⅳ－1 2017年度 学修到達度調査（PROGテスト）・学修行動調査 実施状況

※教育学部については、1年生向けの共通教育科目「知の広場」及び3年生向けの共通教育科目「キャリア教育」を学部独自に開講している関係で、回答数が少ない。

Ⅳ－2. 直接評価指標と間接評価指標の考え方

本学のAP事業では、「直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの発信」をテー

マIIの目標として掲げている。しかし、昨年度までの3年間はほぼデータの収集にとどまっていた関係もあり、今年度が本格的な分析の初年度となった。

分析に際しては、2016年度のアニュアルレポートでも指摘されていたように、ALポイントを使った分析を行う場合、本学が定義している6つのアクティブ・ラーニングの定義（グループワーク、ディスカッション・ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り、宿題）に基づく「ALポイント」が合成変数であるという問題や、学修到達度調査（PROG）の結果を直接評価指標として用いることが適切かどうかといった点について課題を考慮する必要があった。そのため、今年度は、直接評価指標を「成績に関連するデータ」と「学修到達度調査（PROG）のリテラシーテスト結果」、間接評価指標は「学修行動調査」と「学修到達度調査（PROG）のコンピテンシーテスト結果」と捉え直したうえで、事務部門から成績データを新たに入手し、「成績に関連するデータ」・「学修到達度調査（PROG）」・「学修行動調査」の結果を紐付けることができる「2015年度入学者で2017年度の3年生」のデータを抽出して分析することとした。なお、「学修到達度調査（PROG）」・「学修行動調査」については、「2015年度入学者で2017年度の3年生」における結果であるが、「成績に関連するデータ」については、「2015年度入学者かつ2017年度の3年生の2016年度（2年生）までのデータ」となる。

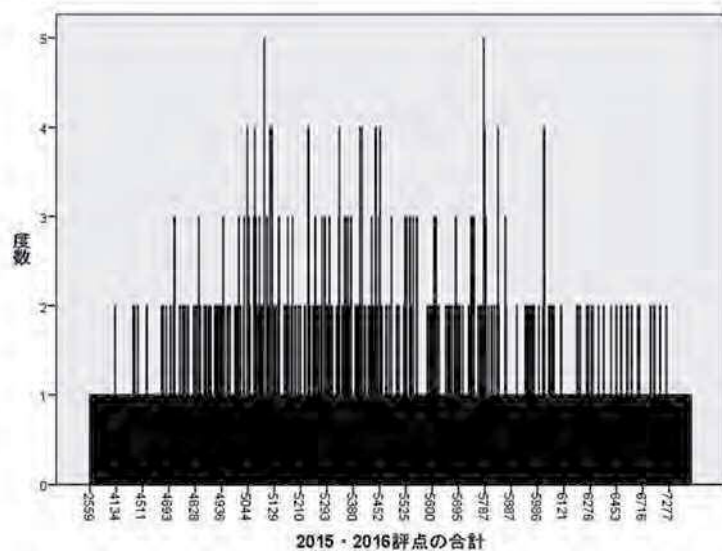
Ⅳ-3. 代表的な直接評価指標と間接評価指標からみる学生の状況

まず、直接評価と間接評価の代表的な指標から、学生の学修到達度や学習習慣の状況を確認する。

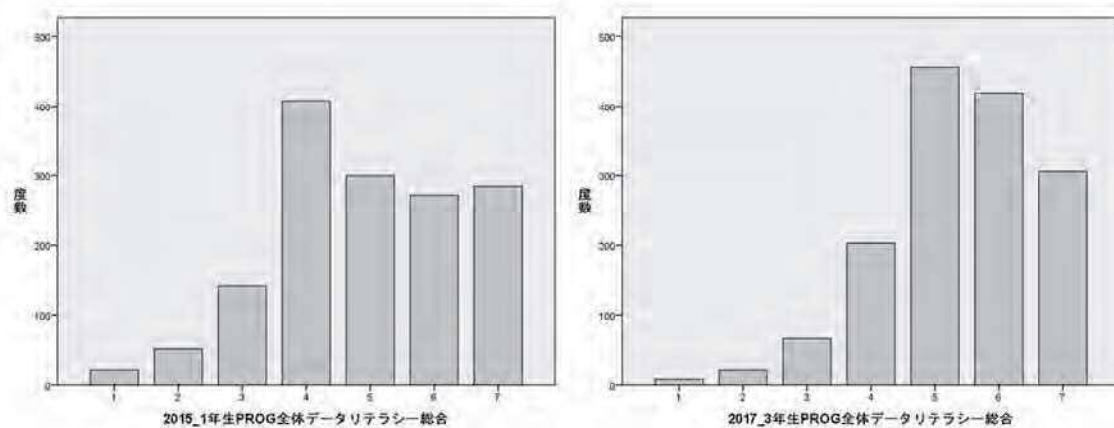
「成績(2015・2016年度の評点の合計)」「2015年度と2017年度の学修到達度調査（PROG）のリテラシー総合評価」を直接評価指標、「学修行動調査のQ8（大学での学習習慣に関する質問、12項目、6件法、Q8_2は逆転項目）」の合計値、「学修行動調査のQ9（身についている資質・能力に関する質問、22項目、6件法）」の合計値、「2015年度と2017年度の学修到達度調査（PROG）のコンピテンシー総合評価」を間接評価指標とし、それぞれの分布と基本統計量は次のとおりである。

		2015・2016 評点の合計	2015_1年生 PROG全体 データリテ ラシー総合	2017_3年生 PROG全体 データリテ ラシー総合	2015_1年生 PROG全体 データコン ピテンシー 総合	2017_3年生 PROG全体 データコン ピテンシー 総合	大学学習習 慣計（Q8_2 逆転）	資質・能力 計（Q9）
度数	有効数	1479	1479	1479	1479	1479	1384	1364
	欠損値	0	0	0	0	0	95	115
平均値		5506.19	4.94	5.41	3.10	3.29	48.74	87.87
中央値		5446.00	5.00	5.00	3.00	3.00	48.00	87.50
最頻値		5096・5782	4	5	3	3	47	88
標準偏差		786.102	1.466	1.215	1.588	1.617	8.498	14.439
分散		617955.962	2.150	1.477	2.520	2.613	72.214	208.474
最小値		2559	1	1	1	1	12	22
最大値		8505	7	7	7	7	72	132

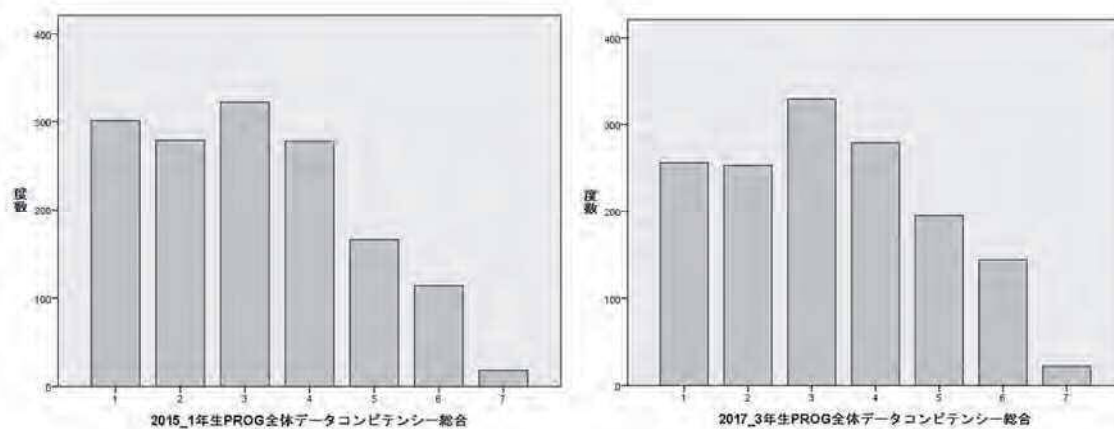
図表Ⅳ-2 直接評価指標・間接評価指標の基本統計量



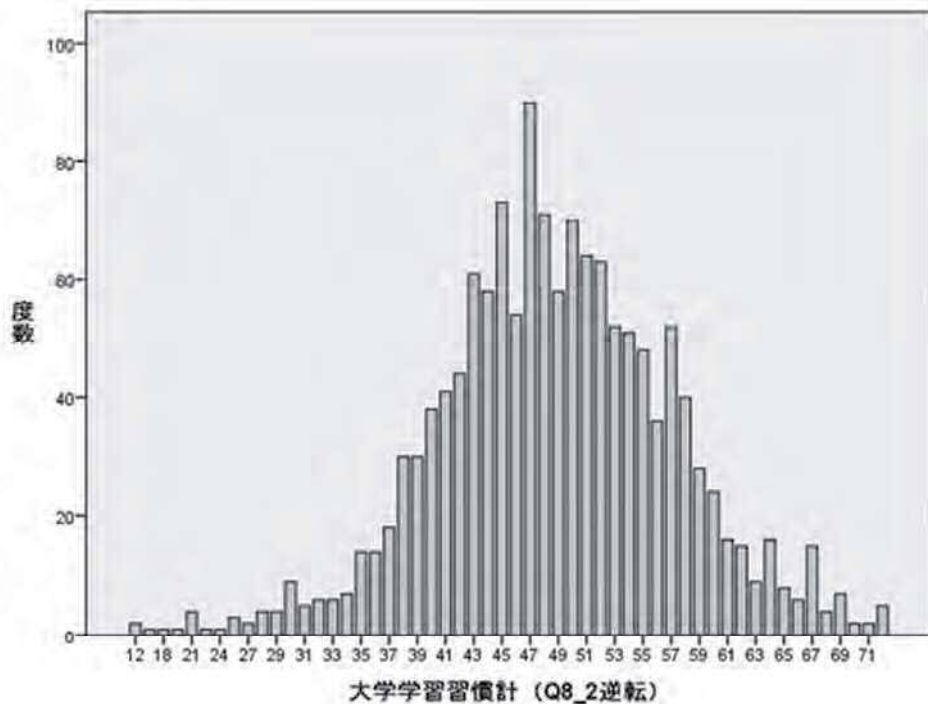
図表Ⅳ－3 2015・2016 評点の合計の分布



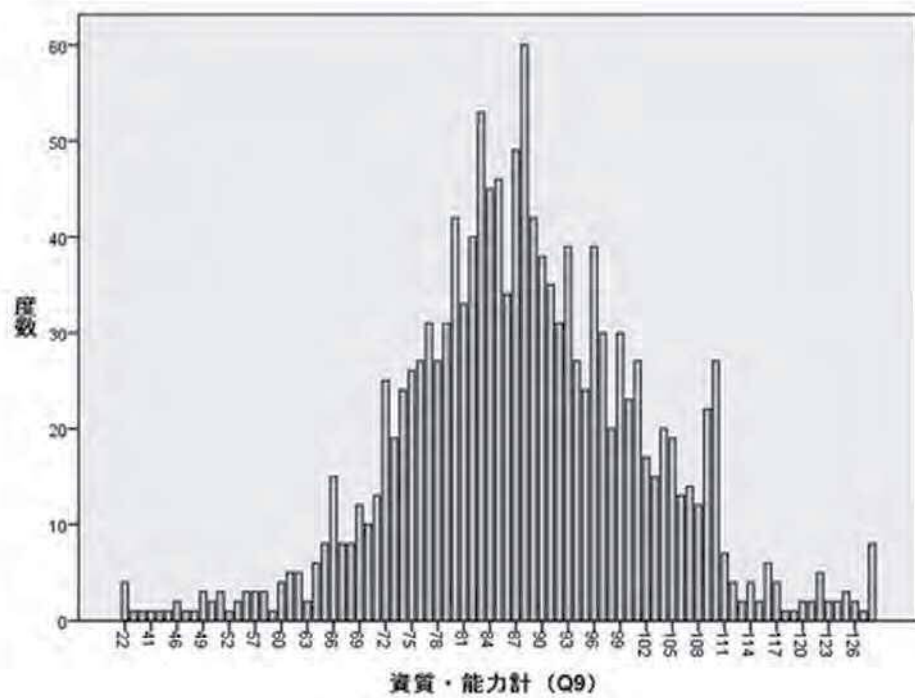
図表Ⅳ－4 学修到達度調査（PROG）のリテラシー総合評価



図表Ⅳ－5 学修到達度調査（PROG）のコンピテンシー総合評価



図表Ⅳ－6 学修行動調査（Q8・大学学習習慣）の合計値



図表Ⅳ－7 学修行動調査（Q9・身についている資質・能力）の合計値

学修行動調査の Q8（大学での学習習慣に関する回答の合計、Q8_2 は逆転項目として集計）の合計値平均は 48.74、中央値は 48、最頻値は 47 となっている。質問項目が 12 あるため、1 項目の平均値としては 4.06 である。この質問項目は 6 件法（6＝かなりあてはまる～1＝全くあてはまらない）となっているため、4.06 という平均値は、「少しあてはまる」という選択肢と概ね同等ということになる。

次に、「学修行動調査の Q9（現在獲得している資質・能力に関する回答の合計）」の全体的な分布傾向や平均値、中央値はどのようになっているだろうか。「学修行動調査の Q9（現在獲得している資質・能力に関する回答の合計）」も Q8 と同様に 6 件法（6＝かなりあてはまる～1＝全くあてはまらない）で尋ねており、合計値平均は 87.87、中央値は 87.5（87 と 88 の境）、最頻値は 88 となっている。質問項目が 22 あるため、1 項目の平均値としては 3.99 であり、平均値は概ね「少しあてはまる」という選択肢と同等ということになる。

Ⅳ－4. 直接評価指標と間接評価指標の相関

直接評価指標を「成績に関連するデータ」と「学修到達度調査（PROG）のリテラシーテスト結果」、間接評価指標は「学修行動調査」と「学修到達度調査（PROG）のコンピテンシーテスト結果」と捉え直したのは前節で述べたとおりであるが、まずは双方の代表的な変数の関係性を確認する。

「成績に関連するデータ」については、「授業科目毎に担当教員が評価した評点の合計」を用いることとした。その理由は、GPA は成績評価の結果算出されるものではあるが、その基となる GP は結果として相対評価であること、また、絶対評価（と考えてよい）指標である評点のほうが、正課活動の学修成果をより色濃く反映したものと考えられるのではないかと判断した結果である。もちろん修得単位数や単位修得率といった指標も検討したが、評点であれば、不合格科目分の学修についても何らかの評価が残されている場合に累積が可能である点を考慮した結果である。

そのうえで、まずは直接評価指標としての「2015・2016 評点の合計」「2017_3 年生 PROG 全体データリテラシー総合」と、間接評価指標としての「2017_3 年生 PROG 全体データコンピテンシー総合」「学修行動調査の Q8（大学での学習習慣に関する回答の合計、Q8_2 は逆転項目）」「学修行動調査の Q9（現在獲得している資質・能力に関する回答の合計）」の相関を確認することとする（図表Ⅳ－8）。

この結果から、PROG（コンピテンシー）、大学での学習習慣、獲得している資質・能力の間については、それぞれ中程度の相関が認められる（網掛け部分）。また、成績（評点合計）と大学での学習習慣の間には弱い相関が認められるが、成績（評点合計）と PROG（リテラシー）はほぼ無相関であった。

	2015・2016 評点の合計	2017_3年生 PROG全体 データリテ ラシー総合	2017_3年生 PROG全体 データコン ピテンシー 総合	大学学習習 慣計（Q8_2 逆転）	資質・能力 計（Q9）
2015・2016評点の合計	1				
2017_3年生PROG全体データリテラシー総合	.076**	1			
2017_3年生PROG全体データコンピテンシー総合	.060*	-.065*	1		
大学学習習慣計（Q8_2逆転）	.241**	.039	.477**	1	
資質・能力計（Q9）	.083**	-.063*	.570**	.636**	1

**、相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

*、相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。

図表Ⅳ－8 直接評価指標と間接評価指標の相関

Ⅳ－5. 直接評価（成績）の規定要因分析

Ⅳ－3 で示したように、「成績」と「PROG（リテラシー）」の間に相関関係がないことが明らかになった。このことから、当然といえば当然ではあるが、授業科目としての評価である成績と、端的に言えば言語能力・非言語能力を測定している「PROG（リテラシー）」とでは、それぞれ別のものを測定していると捉えるのが妥当であろう。この結果から、直接評価指標を「成績データ（評点合計）」とし、高校までの学習習慣や大学における生活習慣等を説明変数、「成績データ（評点合計）」を従属変数とした重回帰分析を行い、成績の規定要因を探索する（図表Ⅳ－9）。

- ・性別ダミー（男性＝1）
- ・大学志望度（間接評価：学修行動調査 Q2 逆転）
- ・希望最終学歴（間接評価：学修行動調査 Q3 逆転）
- ・高校の成績（間接評価：学修行動調査 Q4 逆転）
- ・高校での活動熱心度（間接評価：学修行動調査 Q5_1～Q5_7）
- ・高校までの学習習慣（間接評価：学修行動調査 Q6_1～Q6_4・Q6_11・Q6_12）
- ・大学での活動熱心度（間接評価：学修行動調査 Q7_1～Q7_6）
- ・大学での学習習慣（間接評価：学修行動調査 Q8（Q8_2 は逆転）合計）

統計的に有意な変数（5%水準のみ）に着目してみると、博士前期（修士）課程や博士後期課程への進学を希望している、専門分野について深く学びたい、大学における学習習慣が身についていると考えている学生は評点の合計にプラスの影響を与えている。一方、男子学生、大学入学時の志望度が高かった、大学で課外活動に力を入れたいと考えている学生は評点の合計にマイナスの影響を与えていることが分かる。専門分野の学びへの興味・関心が高ければしっかり学習するということだろうし、学習習慣がしっかり身についていれば成績が良くなるというのは至極当然の結果だろう。

評点の規定要因	B	β
(定数)	4689.568	***
男性ダミー	-464.540	-0.292 ***
大学志望度(逆転)	-63.045	-0.077 ***
希望最終学歴(逆転)	121.077	0.076 ***
高校成績(逆転)	10.321	0.012
高校活動熱心度－学校行事	-28.459	-0.033
高校活動熱心度－委員会活動	19.902	0.024
高校活動熱心度－体育会系	-7.409	-0.012
高校活動熱心度－文化系	7.534	0.011
高校活動熱心度－ボランティア	11.744	0.013
高校活動熱心度－国際交流	-18.021	-0.019
高校活動熱心度－研究	-8.357	-0.009
高校生活習慣－大学入試対策	-14.829	-0.015
高校生活習慣－授業の予復習	55.581	0.063 *
高校生活習慣－授業でわからないところを調べる	1.772	0.002
高校生活習慣－授業以外の興味を勉強する	-43.501	-0.053 *
高校生活習慣－新聞を読む	-18.651	-0.020 *
高校生活習慣－読書をする	-16.144	-0.021
大学生生活習慣－専門分野の学び	128.257	0.123 ***
大学生生活習慣－幅広い知識・教養	44.904	0.044
大学生生活習慣－就職につながる学習・活動	-15.837	-0.015
大学生生活習慣－課外活動	-67.572	-0.086 ***
大学生生活習慣－仕事に役立つ能力・スキル獲得	28.816	0.024
大学生生活習慣－将来の方向性を見つける	-29.947	-0.024
大学学習習慣計(Q8.2逆転)	17.330	0.189 ***
調整済みR2乗		0.171
F値		11.845 ***
従属変数 2015・2016評点の合計	***P<0.01 **P<0.05 *P<0.1	

図表Ⅳ－9 成績（評点）の規定要因分析

では、大学での学び習慣としての「大学学習習慣計（Q8_2 逆転）」の規定要因はどのようなになっているだろうか。従属変数を「大学での学習習慣（間接評価：学修行動調査 Q8（Q8_2 は逆転）合計）」とした重回帰分析を試みる。ここでは、大学入学後の AL が何らかの形で大学における学び習慣の構築に寄与していると仮定し、前述の説明変数に加えることとする（図表Ⅳ－10）。

- ・性別ダミー（男性＝1）
- ・大学志望度（間接評価：学修行動調査 Q2 逆転）
- ・希望最終学歴（間接評価：学修行動調査 Q3 逆転）
- ・高校の成績（間接評価：学修行動調査 Q4 逆転）
- ・高校での活動熱心度（間接評価：学修行動調査 Q5_1～Q5_7）
- ・高校までの学習習慣（間接評価：学修行動調査 Q6_1～Q6_4・Q6_11・Q6_12）
- ・大学での活動熱心度（間接評価：学修行動調査 Q7_1～Q7_6）
- ・AL ポイント（グループワーク、ディスカッション・ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り、宿題）

統計的に有意な変数（5%水準のみ）に着目してみると、男子学生は女子学生に比べて入学後の学習によって学習習慣を身につける伸びしろが大きく、授業以外に興味のあること

を自分で勉強する、授業でわからないところを自分で調べる、読書という高校までの学習習慣が身につけていることが重要であることが分かる。加えて、専門分野について深く学びたい、幅広い知識・教養を身につけたい、将来の仕事に役立つような能力・スキルを身につけたいとする、大学における学習意欲が学習習慣にもプラスの影響を与えていることが判明した。アクティブ・ラーニング（AL ポイント）については、「宿題」は有効であるが、「フィールドワーク」はわずかではあるがマイナスの影響を与えているという結果となった。「宿題」を課すことは授業外学習時間を担保し、エビデンスの検討等も行うことになるという点において、学習習慣がより身につくと考えられる。「フィールドワーク」がわずかとはいえマイナスの影響を与えてしまっている事実をどう解釈すべきかについては検討の余地があろう。

大学学習習慣計(Q8.2逆転)の規定要因	B	β
(定数)	10.511	***
男性ダミー	1.128	0.065 **
大学志望度(逆転)	-0.057	-0.006
希望最終学歴(逆転)	0.715	0.041
高校成績(逆転)	0.793	0.088 ***
高校活動熱心度－学校行事	0.940	0.099 ***
高校活動熱心度－委員会活動	0.169	0.019
高校活動熱心度－体育会系	0.190	0.029
高校活動熱心度－文化系	-0.048	-0.006
高校活動熱心度－ボランティア	-0.002	0.000
高校活動熱心度－国際交流	0.605	0.057 *
高校活動熱心度－研究	0.367	0.035
高校生活習慣－大学入試対策	-0.031	-0.003
高校生活習慣－授業の予復習	-0.034	-0.004
高校生活習慣－授業でわからないところを調べる	1.054	0.107 ***
高校生活習慣－授業以外の興味を勉強する	1.314	0.146 ***
高校生活習慣－新聞を読む	0.215	0.021
高校生活習慣－読書をする	0.728	0.088 ***
大学生生活習慣－専門分野の学び	2.397	0.212 ***
大学生生活習慣－幅広い知識・教養	1.301	0.116 ***
大学生生活習慣－就職につながる学習・活動	0.761	0.068 **
大学生生活習慣－課外活動	-0.031	-0.004
大学生生活習慣－仕事に役立つ能力・スキル獲得	1.271	0.095 ***
大学生生活習慣－将来の方向性を見つける	0.556	0.041
2015-2016ALポイント累計_グループワークの合計	0.004	0.032
2015-2016ALポイント累計_ディスカッション・ディベートポイントの合計	0.002	0.020
2015-2016ALポイント累計_フィールドワークポイントの合計	-0.006	-0.066 **
2015-2016ALポイント累計_プレゼンテーションポイントの合計	-0.002	-0.012
2015-2016ALポイント累計_振り返りポイントの合計	-0.006	-0.042
2015-2016ALポイント累計_宿題ポイントの合計	0.019	0.096 ***
調整済みR2乗		0.334
F値		22.757 ***
従属変数 大学学習習慣計(Q8.2逆転)		***P<0.01 **P<0.05 *P<0.1

図表Ⅳ－10 大学における学習習慣の規定要因分析

Ⅳ－6. 間接評価（資質・能力、コンピテンシー）の規定要因分析

Ⅳ－3 で示したように、PROG（コンピテンシー）、大学での学習習慣、獲得している資

質・能力の間については、それぞれ中程度の相関が認められた。そこで、本節では、前節と同様の変数を説明変数とし、学生の自己評価である「学修行動調査の Q9（獲得している資質・能力）」と「PROG（コンピテンシー）」を従属変数とした重回帰分析を行い、いわゆるコンピテンシーレベルを規定している要因分析を行う。2 つの重回帰分析を行うのは、「学修行動調査」と「PROG（コンピテンシー）」では、「成績」と「リテラシー」の関係性と同様、測定しているものが異なる可能性が排除できないと考えたためである。換言すれば、測定ツールが異なっても、学士力や社会人基礎力といった言葉に代表される、大卒者に求められるコンピテンシーレベルの規定要因が同じような傾向、あるいは異なる傾向を見せるのかを確認することは、今後の学生調査の在り方や考え方に対しての示唆を得ることができる可能性があるということでもある。

IV-6-A

まずは、従属変数を「身につけている資質・能力（間接評価：学修行動調査 Q9 の合計値）」とし、以下の説明変数を投入する重回帰分析を行う（図表IV-11）。

- ・ 性別ダミー（男性＝1）
- ・ 大学志望度（間接評価：学修行動調査 Q2 逆転）
- ・ 希望最終学歴（間接評価：学修行動調査 Q3 逆転）
- ・ 高校の成績（間接評価：学修行動調査 Q4 逆転）
- ・ 高校での活動熱心度（間接評価：学修行動調査 Q5_1～Q5_8）
- ・ 高校までの学習習慣（間接評価：学修行動調査 Q6_1～Q6_4・Q6_11・Q6_12）
- ・ 高校までの生活習慣（間接評価：学修行動調査 Q6_5～Q6_10・Q6_13）
- ・ 大学での活動熱心度（間接評価：学修行動調査 Q7_1～Q7_7）

これらを投入したものがモデル 1、モデル 1 に AL ポイント（グループワーク、ディスカッション・ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り、宿題）を加えた分析がモデル 2、さらにモデル 2 に「学修行動調査 Q8 計（大学での学習習慣計）」を加えた分析がモデル 3 である。

モデル 3 における結果のうち、統計的に有意な変数（5%水準のみ）に着目してみると、高校での「学校行事熱心度」や「国際交流活動」、「大学入試対策」、「目標達成努力」、「知らない誰かとのコミュニケーション」、「趣味に打ち込む」といった経験がプラスの影響を、「授業でわからないことを自分で調べる」、「テレビを見る」はマイナスの影響を与えている。また、大学における生活習慣においては、「就職につながる学習・活動」、「課外活動熱心度」、「将来の仕事に役立つ能力・スキルの獲得努力」がプラスの影響を与えている。大学における AL 度については、「フィールドワーク」が唯一プラスに作用していることが判明した。「大学入試対策」をしっかりとしているというのは、ある意味大学入学という「目標達成努力」経験であろうし、留学等の「国際交流活動」がその後の学生の人生に大きなインパクトを与えるだろうことも想像を超えた結果ではない。一方、大学では、「就職につながる学習・活動」や「将来の仕事に役立つ能力・スキルの獲得努力」といった就職と直結したものと、「課

外活動熱心度」がプラスの作用があるということも想像の範囲内の結果である。

ここで最も注目すべきは、「大学での学習習慣（学習行動調査 Q8 の計）」の標準化係数（ β ）の値の高さと、この変数を投入したことによる決定係数の変化であろう。この変数を投入することにより、決定係数が 0.165 も押し上げられたのは驚きであった。つまり、大学における学習習慣の積み重ねは、学生の資質・能力、コンピテンシー形成に大きな影響を与えているということである。

資質・能力計(Q9)の規定要因	モデル1		モデル2		モデル3	
	B	β	B	β	B	β
(定数)	25.988	***	26.206	***	13.028	***
男性ダミー	2.052	0.069 **	1.648	0.055 **	0.589	0.020
大学志望度(逆転)	-0.650	-0.042 *	-0.600	-0.039	-0.648	-0.042 **
希望最終学歴(逆転)	0.197	0.007	-0.373	-0.012	-0.973	-0.032
高校成績(逆転)	0.999	0.064 ***	1.071	0.069 ***	0.425	0.027
高校活動熱心度－学校行事	2.142	0.131 ***	2.120	0.130 ***	1.138	0.070 ***
高校活動熱心度－委員会活動	-0.091	-0.006	-0.100	-0.006	-0.306	-0.020
高校活動熱心度－体育会系	0.503	0.045	0.487	0.043	0.417	0.037
高校活動熱心度－文化系	-0.376	-0.030	-0.393	-0.031	-0.342	-0.027
高校活動熱心度－ボランティア	0.323	0.018	0.297	0.017	0.422	0.024
高校活動熱心度－国際交流	2.020	0.111 ***	2.058	0.113 ***	1.631	0.090 ***
高校活動熱心度－研究	0.316	0.017	0.343	0.019	0.043	0.002
高校活動熱心度－アルバイト	0.688	0.027	0.681	0.026	0.958	0.037 *
高校生活習慣－大学入試対策	1.117	0.062 **	1.190	0.066 **	1.273	0.071 ***
高校生活習慣－授業の予復習	-0.534	-0.032	-0.579	-0.035	-0.315	-0.019
高校生活習慣－授業でわからないところを調べる	-0.691	-0.041	-0.619	-0.037	-1.411	-0.084 ***
高校生活習慣－授業以外の興味を勉強する	1.641	0.106 ***	1.580	0.102 ***	0.658	0.043 *
高校生活習慣－規則正しい生活	0.183	0.012	0.187	0.012	0.389	0.025
高校生活習慣－目標達成努力	3.834	0.224 ***	3.794	0.222 ***	2.726	0.160 ***
高校生活習慣－知人とのコミュニケーション	0.502	0.033	0.559	0.037	0.653	0.043 *
高校生活習慣－知らない誰かとのコミュニケーション	1.389	0.086 ***	1.388	0.086 ***	1.161	0.072 ***
高校生活習慣－Webサイト閲覧	-0.203	-0.014	-0.196	-0.013	-0.042	-0.003
高校生活習慣－テレビを見る	-1.664	-0.106 ***	-1.697	-0.108 ***	-0.768	-0.049 **
高校生活習慣－新聞を読む	0.574	0.033	0.699	0.040	0.282	0.016
高校生活習慣－読書をする	0.149	0.011	0.164	0.012	-0.385	-0.027
高校生活習慣－趣味に打ち込む	1.653	0.104 ***	1.626	0.103 ***	1.221	0.077 ***
大学生生活習慣－専門分野の学び	2.063	0.105 ***	2.136	0.109 ***	0.077	0.004
大学生生活習慣－幅広い知識・教養	0.957	0.050 *	0.961	0.050 **	-0.048	-0.002
大学生生活習慣－就職につながる学習・活動	1.991	0.102 ***	1.881	0.097 ***	1.119	0.057 **
大学生生活習慣－課外活動	0.868	0.059 **	0.919	0.062 **	0.779	0.053 **
大学生生活習慣－仕事に役立つ能力・スキル獲得	2.141	0.093 ***	2.168	0.094 ***	1.179	0.051 **
大学生生活習慣－将来の方向性を見つける	0.612	0.026	0.607	0.026	-0.153	-0.007
大学生生活習慣－卒業までの自由時間満喫	-0.388	-0.020	-0.383	-0.019	0.623	0.031
2015-2016ALポイント累計_グループワークポイントの合計			-0.005	-0.026	-0.009	-0.045
2015-2016ALポイント累計_ディスカッション・ディベートポイントの合計			0.010	0.057	0.008	0.046
2015-2016ALポイント累計_フィールドワークポイントの合計			0.008	0.046	0.014	0.084 ***
2015-2016ALポイント累計_プレゼンテーションポイントの合計			-0.017	-0.075 *	-0.016	-0.070 *
2015-2016ALポイント累計_振り返りポイントの合計			-0.007	-0.029	-0.001	-0.004
2015-2016ALポイント累計_宿題ポイントの合計			0.015	0.044	-0.002	-0.005
大学学習習慣計(Q8.2逆転)					0.881	0.513 ***
調整済みR2乗		0.355		0.358		0.523
F値		22.182 ***		19.034 ***		35.223 ***
従属変数 資質・能力計(Q9)	***P<0.01 **P<0.05 *P<0.1					

図表Ⅳ－11 学修行動調査における資質・能力（Q9）の規定要因分析

Ⅳ－6－B

次に、従属変数を「PROG（コンピテンシー総合）」とし、以下の説明変数を投入する重回帰分析である（図表Ⅳ－12）。

- ・性別ダミー（男性＝1）
- ・大学志望度（間接評価：学修行動調査 Q2 逆転）
- ・希望最終学歴（間接評価：学修行動調査 Q3 逆転）
- ・高校の成績（間接評価：学修行動調査 Q4 逆転）
- ・高校での活動熱心度（間接評価：学修行動調査 Q5_1～Q5_7）
- ・高校までの学習習慣（間接評価：学修行動調査 Q6_1～Q6_4・Q6_11・Q6_12）
- ・高校までの生活習慣（間接評価：学修行動調査 Q6_5～Q6_10・Q6_13）

- ・大学での活動熱心度（間接評価：学修行動調査 Q7_1～Q7_7）

これらを投入したものがモデル1、モデル1にALポイント（グループワーク、ディスカッション・ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り、宿題）を加えた分析がモデル2、モデル2に「学修行動調査 Q8 計（大学での学習習慣計）」を加えた分析がモデル3である。

2017.3年生PROG全体データコンピテンシー総合の規定要因	モデル1		モデル2		モデル3	
	B	β	B	β	B	β
(定数)	0.187		0.019		-1.112	**
男性ダミー	0.125	0.038	0.164	0.050	0.082	0.025
大学志望度(逆転)	-0.091	-0.053 **	-0.083	-0.048 *	-0.090	-0.053 **
希望最終学歴(逆転)	0.152	0.046 *	0.167	0.051 *	0.102	0.031
高校成績(逆転)	0.085	0.049 *	0.081	0.047 *	0.021	0.012
高校活動熱心度－学校行事	0.255	0.141 ***	0.249	0.138 ***	0.162	0.089 ***
高校活動熱心度－委員会活動	0.012	0.007	0.015	0.009	0.001	0.001
高校活動熱心度－体育会系	0.040	0.032	0.033	0.026	0.026	0.021
高校活動熱心度－文化系	-0.071	-0.050	-0.075	-0.053 *	-0.073	-0.052 *
高校活動熱心度－ボランティア	0.085	0.044	0.084	0.044	0.092	0.048
高校活動熱心度－国際交流	0.241	0.121 ***	0.227	0.114 ***	0.185	0.092 ***
高校活動熱心度－研究	0.038	0.019	0.046	0.023	0.020	0.010
高校活動熱心度－アルバイト	-0.092	-0.033	-0.088	-0.032	-0.074	-0.026
高校生活習慣－大学入試対策	-0.008	-0.004	-0.002	-0.001	0.019	0.010
高校生活習慣－授業の予復習	-0.160	-0.088 **	-0.149	-0.082 **	-0.132	-0.073 **
高校生活習慣－授業でわからないところを調べる	-0.045	-0.024	-0.054	-0.029	-0.127	-0.068 **
高校生活習慣－授業以外の興味を勉強する	0.201	0.118 ***	0.188	0.110 ***	0.110	0.065 **
高校生活習慣－規則正しい生活	-0.142	-0.084 ***	-0.138	-0.081 ***	-0.121	-0.071 **
高校生活習慣－目標達成努力	0.373	0.198 ***	0.370	0.197 ***	0.266	0.141 ***
高校生活習慣－知人とのコミュニケーション	0.140	0.084 **	0.141	0.085 ***	0.154	0.093 ***
高校生活習慣－知らない誰かとのコミュニケーション	0.017	0.010	0.016	0.009	-0.002	-0.001
高校生活習慣－Webサイト閲覧	-0.116	-0.070 **	-0.107	-0.065 **	-0.108	-0.065 **
高校生活習慣－テレビを見る	-0.210	-0.122 ***	-0.207	-0.120 ***	-0.125	-0.072 ***
高校生活習慣－新聞を読む	0.139	0.072 **	0.142	0.074 **	0.111	0.057 **
高校生活習慣－読書をする	-0.049	-0.031	-0.052	-0.034	-0.100	-0.064 **
高校生活習慣－趣味に打ち込む	0.085	0.049 *	0.092	0.053 *	0.067	0.038
大学生生活習慣－専門分野の学び	0.012	0.005	0.005	0.002	-0.160	-0.074 ***
大学生生活習慣－幅広い知識・教養	0.177	0.083 ***	0.171	0.080 ***	0.077	0.036
大学生生活習慣－就職につながる学習・活動	0.005	0.002	-0.002	-0.001	-0.058	-0.027
大学生生活習慣－課外活動	0.129	0.079 ***	0.129	0.079 ***	0.114	0.070 ***
大学生生活習慣－仕事に役立つ能力・スキル獲得	0.177	0.070 **	0.176	0.070 **	0.083	0.033
大学生生活習慣－将来の方向性を見つける	0.000	0.000	0.003	0.001	-0.055	-0.022
大学生生活習慣－卒業までの自由時間満喫	-0.170	-0.077 ***	-0.171	-0.078 ***	-0.082	-0.037
2015-2016ALポイント累積 グループワークポイントの合計			0.002	0.074	0.002	0.068
2015-2016ALポイント累積 ディスカッション・ディベートポイントの合計			0.001	0.074	0.001	0.067
2015-2016ALポイント累積 フィールドワークポイントの合計			0.000	0.001	0.001	0.027
2015-2016ALポイント累積 プレゼンテーションポイントの合計			-0.002	-0.081 *	-0.002	-0.083 *
2015-2016ALポイント累積 振り返りポイントの合計			0.000	-0.006	0.000	0.011
2015-2016ALポイント累積 宿題ポイントの合計			0.000	-0.012	-0.002	-0.051
大学学習習慣計(Q8.2逆転)					0.077	0.404 ***
調整済みR2乗		0.203		0.205		0.305
F値		11.148 ***		9.623 ***		15.079 ***

従属変数 2017.3年生PROG全体データコンピテンシー総合

***P<0.01 **P<0.05 *P<0.1

図表Ⅳ－12 学修到達度調査（PROG）におけるコンピテンシー総合の規定要因分析

モデル3における結果を統計的に有意な変数（5%水準のみ）に着目してみると、高校での「学校行事熱心度」や「国際交流活動」、「授業以外に興味のあることを自分で勉強した」、「目標達成努力」、「知人とのコミュニケーション」、「新聞を読む」といった経験がプラスの影響を、「授業の予習・復習をしっかりとやる」、「授業でわからないことを自分で調べる」、「規則正しい生活」、「Web サイト閲覧」、「テレビを見る」、「読書」はマイナスの影響を与えている。また、大学における生活習慣においては、「課外活動熱心度」、「学習習慣計」がプラスの影響を、「専門分野の学び」がマイナスの影響を与えている。大学におけるAL度については、寄与していないという結果となった。高校時代の授業に関する学び習慣や規則正しい生活、大学における専門分野の学びがマイナスの影響を与えているという点は解釈に困るところだが、「国際交流活動」、「授業以外に興味のあることを自分で勉強した」といった経験は、大学での学びに通じているところがあるだろうし、大学における「課外活動熱心度」が与えているプラスの影響も感覚的にはよくわかるところである。

また、「PROG (コンピテンシー総合)」を従属変数とした分析でも、大学での学習習慣 (学習行動調査 Q8 の計) による標準化係数 (β) の値の高さと決定係数の変化が目立った。前述と同様、大学における学習習慣の積み重ねは、学生の資質・能力、コンピテンシー形成に大きな影響を与えている。

Ⅳ-7. 直接評価・間接評価の試行的分析による教育改善への示唆

大学での学びは、授業を中心とした「正課活動」と「正課外活動」がパッケージであることが最大の特徴である。4 つの重回帰分析の結果からも、「正課活動」と「正課外活動」が相互に影響し合っていることが判明した。「大学での成績」は、「大学における学習習慣」と「専門分野の学習熱心度」が大きく影響しており、「大学における学習習慣」は、高校までの学習習慣を土台としていること、また、「資質・能力」、「コンピテンシースキルレベル」は、「正課外活動」のみならず「大学での学習習慣」が大きく影響していることがこのことを物語っている。

ただ、本稿では、これまでの AP 事業で蓄積されたデータを用い、あくまでも山口大学の全体的な学生像を確認するための試行的分析を最優先事項としたため、総合的な評価値のみを分析上の従属変数として使用した点に問題が残ることも認めなければならない。そのうえで分析結果を概括すると、「高校までの学習習慣」の重要性は先行研究で明らかになっているが、本学の学生データにおいてもあてはまる結果となった。加えて、大学入学後に様々な学習習慣を身につけることが成績や資質・能力の獲得に大きな影響を与えていたことは、大学教育の重要性を示すものであった。しかし、2 年生以上における専門教育の内容に違いがあることを考慮すれば、学部・学科や文系・理系といった区分別の分析も必要だろう。例えば、「専門分野について深く学びたい」という変数がプラスにもマイナスにも有意な影響を与えていたという事実が、今回の試行的分析の限界を示しているとも考えられることから、この点については今後の課題としたい。

最後に、AP 事業のみならず、山口大学としての直接評価・間接評価の統合モデルを検討していくにあたっての課題を指摘しておきたい。

まず、そもそも大学として直接評価指標の在り方について議論をしていないという問題がある。また、「大学教育での学修成果の伸び」を考えるためには、今回の分析対象者では、1 年と 2 年での差分の要因分析が妥当と考えられるが、「何の差分」を変数として扱うかという議論ができていない。そのため、大学として、直接評価 (成績データ) の「伸び」の定義をしっかりと議論して決めることも必要である。あわせて、何をすると何が伸びることが想定されているのかといった、大学としての学修成果のストーリー構築も必要であろう。

AL ポイントの関係では、「成績」に対して「宿題」がプラスの影響を与えていることが判明したが、AL ポイント自体が成績やコンピテンシーに直接的に寄与するというよりは、学修時間や学習習慣の獲得に影響を与えていると考えるのが妥当であろう。今年度新たに導入した山口大学オリジナルの「学修行動調査」には、いわゆる「授業時間外学習時間」が質問項目にないため、現行のデータでは、学生個人の「授業時間外学習時間」が分からない。大学として「授業時間外学習時間」のデータがあるのは、授業科目毎に実施している授業評

価アンケートとしての回答であるが、この授業評価アンケートは無記名方式で実施されていることから、学籍番号との紐付けができないものとなっている。AL ポイントと実際の学生の学びの関係においては、「授業時間外学習時間」にキーがあると想定されることから、「学修行動調査」の質問項目の見直しも必要である。

いずれの課題も、大学での学びは、生涯学び続ける人となるための基盤となるものであり、大学卒業後の就職という狭義の社会的レリバンスのみを目指したものではないという点をしっかり認識して検討することが必要であろう。

IV-8 スタディ・スキルに関するルーブリック開発

第Ⅲ章で記載したとおり、2017 年度 SLP【ラーニング・スキル開発】において、ライティング入門講座プレゼンテーション入門講座を新たに開設した。受講生の到達目標や将来の学修目標の明確化を図るため、ライティング・スキルとプレゼンテーション・スキルに関するルーブリックを以下のとおり開発した。

ライティング・スキルに関するルーブリック ver.1

規 準	観 点	レベル 4	レベル 3	レベル 2	レベル 1
テーマ設定	●テーマは何か。 何を書くべきか。	設定したテーマに独 創性がある。	課題に適合したテー マ設定ができ、仮説 やあらすじを立てる ことができている。	課題に適合したテー マ設定はできている が、テーマ自体があ いまいである。	課題に適合したテー マ設定ができていな い。
情報収集・分析	●情報・データを集め る。資料・データを分析 する。	テーマに関して幅広 く収集した情報を分 析した上で活用して いる。	テーマに関する情報 を十分に探索し、幅 広く情報収集してい る。	テーマの概要を把握 し、関連する情報を 一定程度、収集して いる。	適切な資料や情報を 活用していない。
論理構成・主張	●レポートの型（アウ トライン）の構築。 自分の主張。	課題に適合した「答 え」に対する自分の 意見を主張できている。	課題に適合した「答 え」を導き出す論拠 を示している。	レポートの論理構成 ができている。	レポートの論理構成 ができていない。
言葉遣い	●レポートにふさわし い文体、語句	読み手が理解しやす く、誤解することの ない言葉遣いをして いる。	しっかりと推敲を行 った上で、文章表現 している。	誤字・脱字・変換ミス なく、文体や用語が 統一されている。	誤字・脱字・変換ミス が見られ、文体や用 語の不統一が見られ る。
引用	●引用と参考文献リス トの作法	論証するために、効 果的な引用を行って いる。	適切な作法で引用し ており、かつ、参考文 献リストの作成がで きている。	引用や参考文献リス トの作法は適切であ るが、引用や参考文 献に不必要な記載が 見られる。	適切な作法で引用し ておらず、参考文 献リストも作成してい ない。

図表Ⅳ-13 ライティング・スキルに関するルーブリック

プレゼンテーション (Presentation) スキルに関するルーブリック ver.1

規 準	観 点	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
課題理解・テーマ設定	●課題がしっかり理解できているか。 ●課題解決に向けて適切なテーマ設定ができているか。	課題（の意図）をしっかりと理解し、課題に付随する問題点等の把握しながら、適切なテーマ設定ができている。	課題（の意図）を概ね理解し、適切なテーマ設定ができている。	課題（の意図）の理解が不十分であり、テーマ設定に不適切なところがある。	課題（の意図）が全く理解できず、適切なテーマ設定ができない。
ストーリー作成	●論理的な構成になっているか。	論理的かつ理解しやすいストーリーを作成できている。	論理的なストーリーを作成できている。	ストーリーの中にやや論理的でない部分がある。	全く論理的なストーリーになっていない。
話し方・態度	●適切な言葉遣いができているか。 ●適切な速さで、目線、身振り、手振りを交えて話ができているか。	言葉遣いが適切であり、聞き手の様子を見ながら速さを調節できている。また、効果的な身振り、手振りを交えながら話すことができている。	言葉遣いが概ね適切であり、聞き取りやすい速さで話している。また、聞き手に目線を向けて話すことができている。	言葉遣いに一部不適切なところがあり、話がやや聞き取りにくい。また、聞き手に目線を向けて話すことが少しできている。	言葉遣いに不適切なところがあり、話が聞き取りにくい。かつ、聞き手を意識した話し方が全くできていない。
発表時間	●時間配分は適切だったか。	制限時間内に発表でき、かつ、質疑応答の時間も確保できている。	制限時間内に発表できている。	発表時間が少し短い、または、少し超過している。	発表時間が大幅に短い、または、大幅に超過している。
資料作成	●文字表現や図表等を工夫しながら、分かりやすい資料が作成できているか。	文字表現や図表等を工夫した資料を作成することができている。	概ね分かりやすい資料を作成することができている。	資料の一部に分かりにくいところがある。	資料が分かりにくい。

図表Ⅳ－14 プレゼンテーション・スキルに関するルーブリック

この他、AL 型授業科目「山口と世界」において、大学教育学会・課題研究「アクティブラーニングの効果検証」（代表者：京都大学 溝上慎一教授）との共同研究により、学生の教室内学修・教室外学修を促す情報探索スキルの明確化を目指し、情報探索スキルに関するルーブリックを以下のとおり開発した。

情報探索（Investigation）スキルに関するルーブリック ver.1

規 準	観 点	レベル 4	レベル 3	レベル 2	レベル 1
課題認識	●課題を認識し、その解決に必要な情報の範囲を定める。	自ら調査・研究テーマを設定し、仮説を立てることができている。	課題に沿ったテーマを設定できている。	課題の意図を正しく理解できている。	課題の意図を理解できていない。
情報探索の計画	●情報の適切・効率的な探索を計画する。	信頼性の高い情報を選択できている。	課題の解決に適した信頼性の高い情報源を推測することができている。	貸出・予約・レファレンスサービス等、文献入手に関する図書館サービスを利用できている。	貸出・予約・レファレンスサービス等、文献入手に関する図書館サービスについて理解していない。
情報の入手	●探索計画に基づき、課題解決に必要な情報を適切・効率的に入手する。	先行論文等の引用文献リストを利用し、計画的に探索できている。	情報ニーズに合う文献やメディアを効率的に選択できている。	図書館における資料や検索ツールを利用しながら、情報探索することができている。	図書館における資料や検索ツールをうまく利用できていない。
情報の分析・評価	●収集した情報を批判的に分析・評価し、情報を整理・管理する。	収集した文献情報を活用できるように組織化できている。	入手した情報の正確性・真正性と、調査テーマとの関連性を評価できている。	情報を取捨選択し、活用できるように整理することができている。	情報の取捨選択ができていない。
情報を批判的に検討し知識を再構造化	●整理した情報を批判的に検討することで自らの知識を再構造化する。	得た情報を一般的概念として構成し、新たに適用することで知識として再構成できている。	選択した情報を自分の文脈で意味付け、自分の言葉で説明できている。	入手した情報を比較・分類し、自らの考えとの類似点や相違点を説明できている。	入手した情報を客観的に捉えることができていない。

出典：『高等教育のための情報リテラシー基準 2015 年度版』（国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会(2015.3)）掲載の活用体系表（例）をもとに作成。

図表Ⅳ－15 情報探索スキルに関するルーブリック

以上の 3 つのスタディ・スキルに関するルーブリックは汎用性が高いものであり、今後、学内において参考にしていただけるように周知を図りながら、当該ルーブリックの普及を進めていく予定である。

Ⅳ－9 YU CoB CuS の有効性の検証に関する調査について

2017 年度において、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業の一環として、学生の学修成果可視化の充実を図るために、YU CoB CuS の有効性の検証の調査に着手した。具体的には、① YU CoB CuS で測定している能力の信頼性・妥当性は担保されているか、② YU CoB CuS を利用した学生のリフレクションや教員によるアドバイジングが学生の学修改善を促すことに有用かどうかや、教員の教育実践にどのような影響を与えるのかということを検討することを目的としている。

このため、先行学部である国際総合科学部を対象に、YU CoB CuS を利用してどのように学生のリフレクションを促したり、アドバイジングをしているのかや、各科目の成績評価と YU CoB CuS の DP 得点との対応に関しての考えを伺うため、質問紙調査を行うこととした。調査の概要は以下のとおりである。

なお、2017 年度においては、教員調査と学生調査の暫定結果について、2018 年 1 月に開催された国際総合科学部・教育改善 FD 研修会において報告及び意見交換を行った。

〔調査概要〕

1. YU CoB CuS の有効性の検証について

- 学生の学修成果可視化の充実と意味付けを図るために、YU CoB CuS の有効性を検証する必要がある。
- 国際総合科学部をフィールドに、教員調査・学生調査を行うことを通して、具体的な検証を行う。
- YU CoB CuS の有効性について、「YU CoB CuS を利用することが教育・学習において有用か」と「YU CoB CuS で測定している能力の信頼性・妥当性は担保されているか」という 2 軸から検討することとするが、まずは、「YU CoB CuS を利用することが教育・学習において有用か」から着手していく。

2. 「YU CoB CuS を利用することが教育・学習において有用かどうかの検討」

【教員調査】

- YU CoB CuS が授業改善や学生指導の役に立っているかどうかについて、教員を対象とした質問紙調査とインタビュー調査によって検討する。

【教員調査・質問紙（自由記述形式）】

《YU CoB CuS をどのように活用して学生のリフレクション（省察）を促しているか》

Q1) YU CoB CuS の結果を学生に提示しながら、どのような指導をしていますか。YU CoB CuS の結果から、これからの学習のアドバイスをどのようにしているか、学生自身にどのように考えさせているかなど、差し支えない範囲でその詳細をお書きください。なお、学生によって対応が異なる点もあるかと思いますが、どの学生にも共通して行っていることをお書きください。[基礎セミナー担当教員（担任教員）のみ回答]

Q2) 学修が順調でない学生に対して、YU CoB CuS を用いて、どのような指導をしていますか。こちらも差し支えない範囲でその詳細をお書きください。

[基礎セミナー担当教員（担任教員）のみ回答]

Q3) YU CoB CuS の活用方法において、実際には行っていないが、このようにしたら教育的指導に役立つのではないかなどのアイデアはございますか。もしございましたらお書きください。[全教員回答]

《妥当性へのイメージ》

Q4) YU CoB CuS で割り当てられた基準スコアは、DP（ディプロマ・ポリシー）に求められている資質・能力をしっかりと反映していると思いますか。もし反映していないと考えるとしたら、どの資質・能力が反映していないのかとその理由を挙げてください。ま

た、反映するためにどのように改善すればよいのか、アイデアがあればお書きください。[全教員回答]

《自身の教育活動への活用》

Q5) YU CoB CuS が、担当学生への指導以外に、自身の授業や教育活動に役に立っているところがありましたらお書きください。[全教員回答]

【学生調査】

➤ 学生が実際に YU CoB CuS によってどのようにリフレクションをしているのかや、それを次の学習にどのように活かしたかなどを問う、学生調査を別途実施し、それらが YU CoB CuS の個人スコアの基準スコアに対する比の変化にどの程度影響を与えていたのかを統計的に検討し、その後の学生へのアドバイジングに有用な情報に関する示唆を得る。

【学生調査・質問紙（4 択式）】

Q1) YU CoB CuS の結果をしっかりと確認している。

①かなりあてはある ②少しあてはまる ③あまりあてはまらない ④全くあてはまらない

Q2) 授業を受講する際やテスト勉強をする際は、DP（ディプロマ・ポリシー）で求められている資質・能力や授業科目に割り当てられた基準スコアを意識している。

①かなりあてはある ②少しあてはまる ③あまりあてはまらない ④全くあてはまらない

Q3) 担任教員による YU CoB CuS に基づいた学習指導（アドバイス）をその後の学習の参考にしている。

①かなりあてはある ②少しあてはまる ③あまりあてはまらない ④全くあてはまらない

Q4) YU CoB CuS の基準スコアや自分が獲得した個人スコアに疑問があれば、授業担当教員や担任教員に質問するようにしている。

①かなりあてはある ②少しあてはまる ③あまりあてはまらない ④全くあてはまらない

Q5) YU CoB CuS の結果をもとに、自分の学習がうまくいっているかどうかを確認し、改善が必要であれば改善しようとしている。

①かなりあてはある ②少しあてはまる ③あまりあてはまらない ④全くあてはまらない

Q6) YU CoB CuS について、意見や要望があれば自由にご記入ください。

学修行動調査（山口大学版）

大学教育センター（YU-AP推進室）

このアンケート調査は、山口大学生の学修行動・学修成果を測定し、今後の改善充実のために実施するものです。結果は統計的に処理し、他の目的に使用することはありません。

【回答にあたってのお願い】

★ 回答にあたっては、あなたの学籍番号を該当欄に記入ください。

★ 各設問では、該当する番号を一つ選んで、○で囲んでください。

Q1 あなたの学籍番号を記入してください。

		—					—				—	
--	--	---	--	--	--	--	---	--	--	--	---	--

Q2 あなたが現在所属する山口大学の学部を受験した際、その学部をどのくらい志望していましたか。あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。

- 1) 強く志望していた 2) 少し志望していた 3) あまり志望していなかった 4) 全く志望していなかった

Q3 あなたは最終学歴としてどこまでいくことを希望していますか。あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。

- 1) 大卒（学士号の取得） 2) 大学院卒（修士号や専門職学位の取得） 3) 大学院卒（博士号の取得） 4) その他

Q4 あなたの高校での成績は同じ集団の中でどのくらいに位置していましたか。時期や科目によって異なると思いますが、平均的にこのくらいの位置であった、という思いで、あてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。

- 1) 上位（偏差値66以上が目安） 2) 中の上（偏差値56～65が目安） 3) 中くらい（偏差値46～55が目安）
4) 中の下（偏差値36～45が目安） 5) 下位（偏差値35以下が目安）

Q5 あなたは高校時代（大学入学前）、次の活動について、どのくらい力を入れていましたか。それぞれの活動について、もっともあてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。時期や場合によって異なると思いますが、平均的にそうであった、という思いでお答えください。

次の1～8項目について「かなり力を入れていた、少し力を入れていた、あまり力を入れていなかった、全く力を入れていなかった」の4段階で該当する位置の数字に○をし、回答してください。

あ	ま	全
り	く	力
力	力	を
な	少	を
り	し	入
力	力	れ
を	を	て
入	入	い
れ	れ	な
て	て	か
い	い	つ
た	た	た

1 学校の行事（体育祭や 学園祭等）	4	3	2	1
2 委員会活動（生徒会・学級委員等）	4	3	2	1
3 部活・クラブ・サークル・同好会活動（体育会系）	4	3	2	1
4 部活・クラブ・サークル・同好会活動（文化系）	4	3	2	1
5 ボランティア活動	4	3	2	1
6 国際交流活動	4	3	2	1
7 研究活動	4	3	2	1
8 アルバイト活動	4	3	2	1

Q6	あなたは高校時代（大学入学前）、次のことがらについて、どのくらい力を入れていましたか。それぞれのことがらについて、 <u>もっともあてはまるものを一つ</u> 選び、○で囲んでください。時期や場合によって異なると思いますが、平均的にそうであった、という思いでお答えください。			あ	
				ま	全
				り	く
		か			
		な	少	あ	あ
		り	し	て	て
		あ	あ	は	は
て	て	ま	ま		
は	は	ら	ら		
ま	ま	な	な		
る	る	い	い		

1	大学入試対策をしっかりとやること	4	3	2	1
2	授業の予習・復習をすること	4	3	2	1
3	授業でわからないところを自分で調べる	4	3	2	1
4	授業以外に興味のあることを自分で勉強すること	4	3	2	1
5	日々の生活を規則正しくすること	4	3	2	1
6	目標を立てて、その達成のために努力すること	4	3	2	1
7	PC・携帯電話等で知人とコミュニケーションをとること	4	3	2	1
8	PC・携帯電話等で顔の知らない誰かとコミュニケーションをとること	4	3	2	1
9	PC・携帯電話等でwebサイトの閲覧をすること	4	3	2	1
10	テレビを見ること	4	3	2	1
11	新聞を読むこと	4	3	2	1
12	読書をする	4	3	2	1
13	趣味に打ち込むこと	4	3	2	1

Q7	あなたの山口大学における学生生活において、次のことがらはどの程度あてはまりますか。それぞれのことがらについて、 <u>もっともあてはまるものを一つ</u> 選び、○で囲んでください。		あ	
			ま	全
		か	り	く
		な	あ	あ
		り	し	て
		あ	あ	は
		て	て	ま
		は	は	ら
		ま	ま	な
		る	る	い
次の1～7項目について「かなりあてはまる、少しあてはまる、あまりあてはまらない、全くあてはまらない」の4段階で該当する位置の数字に○をし、回答してください。				

1	専門分野について深く学びたい	4	3	2	1
2	専門に限らず幅広い知識や教養を身につけたい	4	3	2	1
3	就職につながる学習や活動をしたい	4	3	2	1
4	課外活動（部活・サークル・同好会など）に力を入れたい	4	3	2	1
5	将来の仕事に役立つような能力やスキルを身につけたい	4	3	2	1
6	自分の将来の方向性を見つけたい	4	3	2	1
7	卒業までの自由な時間を満喫したい	4	3	2	1

Q8 大学での授業や学習における次の態度や取り組み方について、あなたはどの程度あてはまりますか。それぞれのことがらについて、 <u>もっともあてはまるものを一つ</u> 選び、○で囲んでください。時期や場合によって異なると思いますが、平均的にそうである、という思いでお答えください。		かなりあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	全くあてはまらない
次の1～12項目について「かなりあてはまる、あてはまる、少しあてはまる、あまりあてはまらない、あてはまらない、全くあてはまらない」の6段階で該当する位置の数字に○をし、回答してください。							
1	課題やレポートは満足がいくように仕上げる	6	5	4	3	2	1
2	課題やレポートはただ提出すればいいという気分で仕上げることが多い	6	5	4	3	2	1
3	授業には意欲的に取り組む	6	5	4	3	2	1
4	グループワークの際、グループにおける自分の役割をしっかりと果たす	6	5	4	3	2	1
5	グループワークの際、グループの活動を前進させるような提案や行動をする	6	5	4	3	2	1
6	グループワークの際、グループのメンバーの提案に対して、積極的に言葉や行動で反応する	6	5	4	3	2	1
7	議論や発表の中で自分の考えをはっきり示す	6	5	4	3	2	1
8	議論や発表の中で根拠を持って自分の意見を言う	6	5	4	3	2	1
9	議論や発表の中で自分の考えをうまく伝えられる方法を考える	6	5	4	3	2	1
10	授業では、新しい概念を理解しようとするときにはよく、それを実際の状況や日常の出来事に関連させる	6	5	4	3	2	1
11	授業では、学んでいるものに対して自分なりの結論を導くために、そのエビデンス(証拠・根拠)を注意深く検討する	6	5	4	3	2	1
12	授業では、議論を理解したり、ものごとの背後にある理由や理屈を理解することが、自分にとっては重要である	6	5	4	3	2	1

Q9 次の資質や能力について、あなたはどの程度身につけていると思いますか。それぞれのことがらについて、 <u>もっともあてはまるものを一つ</u> 選び、○で囲んでください。		かなりあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	全くあてはまらない
次の1～22項目について「かなりあてはまる、あてはまる、少しあてはまる、あまりあてはまらない、あてはまらない、全くあてはまらない」の6段階で該当する位置の数字に○をし、回答してください。							
1	社会生活を営む上で求められるマナーが身についている	6	5	4	3	2	1
2	社会問題への関心が高く、幅広い知識・教養を身につけている	6	5	4	3	2	1
3	自分の考えを他人にわかりやすく話すことができる	6	5	4	3	2	1
4	自分の考えや論理を他人にわかりやすくプレゼンテーションすることができる	6	5	4	3	2	1
5	他人の発言や発表内容を素早く的確に理解することができる	6	5	4	3	2	1
6	物事を筋道立てて論理的に考察することができる	6	5	4	3	2	1
7	細かいことにとらわれず、的確に全体的な判断を下すことができる	6	5	4	3	2	1
8	成果をあせらずに、地道な努力を積み重ねることができる	6	5	4	3	2	1
9	周囲の雑音を気にせずに、研究や仕事に長時間取り組むことができる	6	5	4	3	2	1
10	不明なこと、理解できないことは納得できるまで追求する	6	5	4	3	2	1
11	既存の概念にとらわれず、新しいものを生み出そうとする意識が高い	6	5	4	3	2	1
12	何事にもチャレンジ精神が旺盛である	6	5	4	3	2	1
13	自分の欠点を自覚し、常に改善の努力を続けている	6	5	4	3	2	1
14	他人と努力しながら研究や作業を進めることができる	6	5	4	3	2	1
15	周囲の意見や風評に流されることなく、善悪の判断ができる	6	5	4	3	2	1
16	交友関係が豊かである	6	5	4	3	2	1
17	指示されなくても、自分で判断して行動ができる	6	5	4	3	2	1
18	新しい機器類の操作を学んだり、率先して新しい技術を覚え、必要に応じた活用が十分できる	6	5	4	3	2	1
19	必要とする情報や未知の知識を得るための手段や方法をよく知っている	6	5	4	3	2	1
20	他人の意見・行動に根拠ある批判ができる	6	5	4	3	2	1
21	与えられた前提、条件から結論を推論することができる	6	5	4	3	2	1
22	リーダーになって集団をまとめることができる	6	5	4	3	2	1

Q10 あなたは、大学においてどのようなテーマを設定して探究するのかということに関して、以下のどれにあてはまりますか。もっともあてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。

- 4) 自分の探究したい内容に応じて、十分な下調べにもとづき、適切かつ独創的なテーマ設定ができる。
 - 3) 自分の探究したい内容に応じて、下調べをした上でテーマ設定ができる。
 - 2) 自分の探究したい内容に関連したテーマ設定ができる。
 - 1) そのようなテーマ設定自体できない。
-

Q11 あなたは、探究したテーマの成果を、他人に見せる形で成果物にする際、以下のどれにあてはまりますか。もっともあてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。なお、成果物とは、レポートや論文、プレゼンテーション資料、作品などを指します。

- 4) 収集した情報の分析・考察にもとづき、必要であれば他者との協働作業も通しながら、学術的あるいは社会的に独創性かつ意義があり、その説得力がある成果物を作成できる。
 - 3) 収集した情報の分析・考察にもとづき、必要であれば他者との協働作業も通しながら、学術的あるいは社会的に意義があり、その説得力がある成果物を作成できる。
 - 2) 収集した情報の分析・考察にもとづいて成果物を作成できる。
 - 1) そのような成果物の作成自体できない。
-

Q12 あなたは、探究したテーマの成果物を他者と共有したり発表したりする際、以下のどれにあてはまりますか。もっともあてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。なお、成果物とは、レポートや論文、プレゼンテーション資料、作品などを指します。

- 4) 成果物を説得力のある形で効率的・効果的に他者と共有したり発表したりするために、適切な共有方法や発表方法を選び、必要であればチームワークを発揮して展開し、評価を得ることができる。
 - 3) 成果物を効率的・効果的に他者と共有したり発表したりするために、適切な共有方法や発表方法を選び、必要であればチームワークを発揮して展開し、評価を得ることができる。
 - 2) 成果物を他者と共有したり発表したりすることができる。
 - 1) そのような、他者との共有や発表自体できない。
-

Q13 設定したテーマに関して探究した成果物やその作成プロセスを自分で評価する際、以下のどれにあてはまりますか。もっともあてはまるものを一つ選び、○で囲んでください。なお、成果物とは、レポートや論文、プレゼンテーション資料、作品などを指します。

- 4) 自分（たち）の成果物やその作成プロセスを適切に評価し、限界点を見極めて次に探究すべきより深いテーマを設定したり、反省点や改善が必要な点を浮き彫りにしてそれを克服したりするように評価を活かすことができる。
 - 3) 自分（たち）の成果物やその作成プロセスを適切に評価し、反省点や改善が必要な点を浮き彫りにしてそれを克服するように評価を活かすことができる。
 - 2) 自分（たち）の成果物やその作成プロセスを評価し、反省点や改善が必要な点を浮き彫りにすることができる。
 - 1) そのような評価自体できない。
-

これで質問は終わりです。お手数ですが、記入漏れがないかどうかすべての欄を確認してください。
ご協力ありがとうございました。

V. 事業関連イベント報告

1. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 『アクティブ・ラーニング(AL) ベストティーチャー表彰記念 FD・SD ワークショップ～第1回 AL ベストティーチャーによる模擬授業～』

日 時：2017 年 9 月 26 日 (火) 14:00～16:00

場 所：山口大学共通教育棟 15 番教室 (アクティブ・ラーニング教室)

参加者：52 名 (学内 33 名 (教職員 31 名、学生 2 名)、学外 19 名 (教職員 19 名))

概 要：

14：00～14：10 開会挨拶・趣旨説明

菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長

14：10～14：45《模擬授業 Part1》

「深い学びにつなげるアクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』」

上田 真寿美 山口大学国際総合科学部教授

[小休憩]

14：50～15：25《模擬授業 Part2》

「「英語が嫌い」から「英語が楽しい」に変えるアクティブ・ラーニング」

尊田 望 山口大学非常勤講師

15：25～15：55 質疑応答・対話

15：55～16：00 クロージング・閉会挨拶

[総合進行：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP)

**アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰記念
FD・SDワークショップ
～第1回ALベストティーチャーによる模擬授業～**

【趣 旨】
山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) は、事業4年目を迎え、共通教育・専門教育を通じたアクティブ・ラーニング型授業が確実に広がっています。しかし、一方において、大学教育の現場では、「アクティブ・ラーニングを通して、学生の深い学びに結びついているのか」といった疑問や「自分の授業をアクティブ・ラーニング型授業として認識していない」といった実態が依然として見受けられます。
本学では、アクティブ・ラーニング型授業の優れた取組を讃える「アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰制度」を創設し、平成28年度に最初の受賞者(5科目・10名)を表彰しました。今回のワークショップでは、第1回ALベストティーチャー受賞者による模擬授業を体験し、改めて、「アクティブ・ラーニングとは何か」、「アクティブ・ラーニングを通じた学生の学び・成長」について考えてみたいと思います。

【申込方法・問合せ先】
申込「FD・SDワークショップ申込」とし、「①氏名、②所属・職名(学年)、③E-mail」を記入の上、E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp (担当: YU-AP推進室) 宛てに、**9月22日(金)まで**に送信願います。なお、定員に達し次第、申込を締め切らせていただきます。
山口大学 大学教育機構 大学教育センター (YU-AP推進室)
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp

日時: 2017年9月26日(火)
14:00～16:00

場所: 山口大学吉田キャンパス
共通教育棟15番教室
(アクティブ・ラーニング教室)

対象: 学内外の教職員
(定員 30名)



Active Learning

【概 要】
14:00～14:10 開会挨拶・趣旨説明
14:10～14:45《模擬授業 Part1》
「深い学びにつなげるアクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』」
上田 真寿美 山口大学国際総合科学部 教授
(※振り返りを含む)
[小休憩]
14:50～15:25《模擬授業 Part2》
「「英語が嫌い」から「英語が楽しい」に変えるアクティブ・ラーニング」
尊田 望 山口大学非常勤講師
(※振り返りを含む)
15:25～15:55 質疑応答・対話
15:55～16:00 クロージング・閉会挨拶




アクティブ・ラーニング (AL) ベストティーチャー表彰とは、山口大学の共通教育におけるアクティブ・ラーニング (AL) 実践に顕著な成果をあげた教員について、その功績を表彰するとともに広く周知し、併せて本学教員の意欲向上とALの推進に資することを目的としています。さらに、ALによる教育効果の共通理解やAL授業実践のグッド・プラクティスを共有できる機会 (FD・SDワークショップ) や事例集 (Teaching & Learning Catalog) を提供することで、学内におけるAL実践の向上に資することが期待されています。

内 容：

2017年9月26日（火）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）『アクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰記念 FD・SD ワークショップ～第1回 AL ベストティーチャーによる模擬授業～』が、学内外から合計52名（学内33名（教職員31名、学生2名）、学外19名（教職員19名））の参加者を集めて、本学吉田キャンパス共通教育棟15番教室（アクティブ・ラーニング教室）にて開催された。本ワークショップは山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の一環として実施された。

冒頭、菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長より開会挨拶があり、本学では、アクティブ・ラーニング型授業の優れた取組を表彰する「アクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰制度」を創設し、平成28年度に最初の受賞者（5科目・10名）を表彰し、今回のワークショップでは、第1回 AL ベストティーチャー受賞者による模擬授業を体感し、改めて、「アクティブ・ラーニングとは何か」、「アクティブ・ラーニングを通じた学生の学び・成長」について考えてみたいとの趣旨説明があった。

まず、模擬授業 Part1 では、上田 真寿美 山口大学国際総合科学部教授より、「深い学びにつなげるアクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』」と題して、アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』初回の模擬授業を行っていただいた。授業のオリエンテーション時における学生との関係づくりを大切にし、受講生全員の名前を読み上げて出席を確認した後、グループメンバー同士の自己紹介やチームづくりのポイントを説明された。このほか、授業の到達目標に関連して『山口と世界』コモンルーブリックの観点の説明や、グループごとの活動記録に対するフィードバック、さらには、中間発表や最終発表の評価のあり方などについて紹介があった。受講生役の参加者は、実際の授業での配布資料や成果物サンプルを手にしながら、意見交換を行った。



次に、模擬授業 Part2 では、尊田 望 山口大学非常勤講師より、「「英語が嫌い」から「英語が楽しい」に変えるアクティブ・ラーニング」と題して、アクティブ・ラーニング型授業『English Speaking』導入部分の模擬授業を行っていただいた。冒頭、授業設計の背景の説明があり、学習目標を設定して学ばせることに主眼を置いたシラバスと学習者が自らの学び方に沿って知識やスキルを習得していくことに主眼を置いたシラバスの2種類があることについて解説があった。その後、自己紹介演習、語彙ゲーム、Q&A 演習、コミュニケーションゲームと、タイマーによる制限時間内のワークを小刻みに行いながら、教材を通して知っている単語を増やししながら、実際に英語を使って分かるようになる楽しさを実感させる授業を参加者一同が体感し、教室全体が活気ある雰囲気に包まれていった。最後に、教員は教え込むので



はなく、学生の学修意欲を引き出すことに集中し、学生に気づきを与えるアクティブ・ラーニング型授業設計のポイントを力説された。

後半の質疑応答・対話のセッションでは、林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授のファシリテーションにより、参加者に事前配布したダイアログシートに模擬授業を受講して感じた気づきや疑問点を記入していただいた後、グループごとに、短時間の意見交換を行った。その後、全体の質疑応答に展開し、大人数授業での学生からの意見の引き出し方、グループワークやプレゼンテーションの評価方法、探究型授業におけるテーマ設定や学生によるテーマ検討の指導方法、さらには、英語表現を楽しく学びながら定着に結び付ける指導方法や到達度の目安など、授業実践における具体的かつ詳細な意見交換があった。また、若手教員からはグループワークにおいてうまく行った事例を知りたいという声や高校教員からはルーブリックによる学習評価の適切性に関する意見など、実践に役立てたい、実践での課題解消に結び付けたいという参加者からの真剣な思いが伝わってくるセッションとなった。

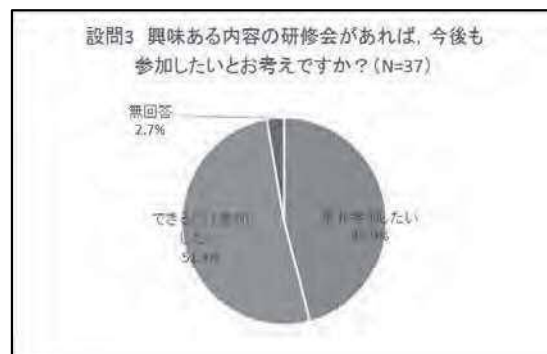
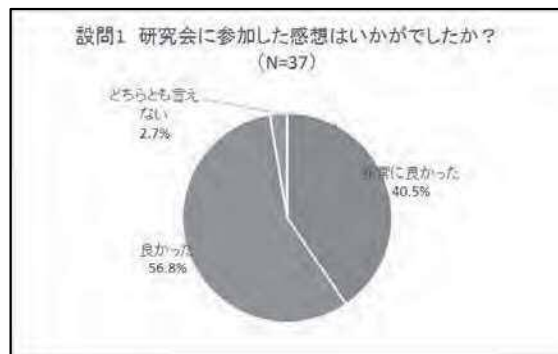


まとめ：

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、過去2年間、アクティブ・ラーニング型授業に関する事例紹介を行ってきたが、事例紹介だけでは伝えられないコツや秘訣を伝える機会を提供したいという思いで、今回の模擬授業型 FD・SD ワークショップを企画した。当該企画を思い立った、そもそものキッカケを与えてくれたのは、AL ベストティーチャーの先生方であった。昨年度末、AL 型授業実践集及びアクティブ・ラーナー記録集である『Teaching & Learning Catalog』作成取材において、AL ベストティーチャーの先生方からお聞きした授業実践の話をインパクトは大きいものであった。その素晴らしく、きめ細かい授業実践を、より多くの教職員の方々に体感していただき、大学全体の共有の財産としたいという思いで今回の FD・SD ワークショップが行われた。

今回の FD・SD ワークショップでは、模擬授業を通して、実際の授業設計や学修評価のコツを学びたいという若手教員や学校教員の参加が多く、当初の定員を大きく上回る参加者となった。参加者アンケートからも非常に好評であったこと（下表参照）が分かり、来年度以降も、AL ベストティーチャーによる模擬授業型 FD・SD ワークショップを継続的に実施していく予定である。





2. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）&医学教育センター共同企画『ループブリックを活用した学修評価ワークショップ～ループブリックの観点と記述に着目して～』

日 時：2017年11月10日（金）16:10～18:00

場 所：山口大学共通教育棟 26 番教室（アクティブ・ラーニング教室）

参加者：41 名（学内 23 名（教職員 21 名、学生 2 名）、学外 18 名（教職員 18 名））

概 要：

16:10～16:20 開会挨拶・趣旨説明

菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長

16:20～17:00《導入レクチャー&事例紹介》

「ループブリックによる学修評価を知る、活かす」

俣野 秀典 高知大学地域協働学部 講師

「医学科チュートリアル教育におけるループブリック活用実践」

藤宮 龍也 山口大学大学院医学系研究科 教授

17:00～17:55《ワークショップ》

「ループブリックの観点や記述を考える」

ファシリテーター：俣野 秀典 高知大学地域協働学部 講師

17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶

白澤 文吾 山口大学 医学教育センター長

〔総合進行：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透〕

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）&医学教育センター共同企画
FD・SDワークショップ

ループブリックを活用した学修評価ワークショップ ～ループブリックの観点と記述に着目して～

【趣 旨】
山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、アクティブ・ラーニングの組織的推進とともに、アクティブ・ラーニングを通じた学修成果の可視化に取り組んでいます。学修成果の可視化の取組として、学生の学修行動や成果物を評価するループブリックの開発・実践・検証の作業を進めてきました。アクティブ・ラーニングの取組が共通教育・専門教育を通じて広がる中で、その学修評価のためのループブリックの活用実践が共通教育だけでなく専門教育に広がっております。また、近年では、フィールドワークの成果測定に活用しようとする取組も進んでいます。
今回のワークショップでは、ループブリックを活用した学修評価に焦点を当て、実際の実践事例を紹介するとともに、ループブリックの観点や記述の調整を含めた諸課題について検討してみたいと思います。



日時：2017年11月10日（金）
16:10～18:00

場所：山口大学吉田キャンパス
共通教育棟2階・26番教室
（アクティブ・ラーニング教室）

対象：学内外の教職員
（定員 30名）

【申込方法・問合せ先】
件名「FD・SDワークショップ申込」とし、①氏名、②所属・職名（学年）、③E-mailを記入の上、E-mail「yuap@yamaguchi-u.ac.jp」（担当：YU-AP推進室）までに、11月9日（木）まで送信願います。なお、定員に達し次第、申込を締め切らせていただきます。
山口大学 大学教育機構 大学教育センター（YU-AP推進室）
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp

Rubric



【概 要】
16:10～16:20 開会挨拶・趣旨説明
16:20～17:00《導入レクチャー&事例紹介》
「ループブリックによる学修評価を知る、活かす」
俣野 秀典 高知大学地域協働学部 講師
「医学科チュートリアル教育におけるループブリック活用実践」
藤宮 龍也 山口大学大学院医学系研究科 教授
17:00～17:55《ワークショップ》
「ループブリックの観点や記述を考える」
ファシリテーター：俣野 秀典 高知大学地域協働学部 講師
17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶

「ループブリック」とは・・・米国で開発された学修評価の基準の作成方法。評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成されています。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難なパフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがあるとされています。ループブリックは、コースや授業科目、課題（レポート）等の単位で設定することができ、国内においても、個別の授業科目における成績評価等で活用されています（文科省2016）。

内 容：

2017年11月10日（金）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）＆医学教育センター共同企画『ルーブリックを活用した学修評価ワークショップ ～ルーブリックの観点と記述に着目して～』が、学内外から合計41名（学内23名（教職員21名、学生2名）、学外18名（教職員18名））の参加者を集めて、本学吉田キャンパス共通教育棟26番教室（アクティブ・ラーニング教室）にて開催された。本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の一環としての実施であるとともに、医学教育センターとの初めての共同企画での実施となった。

冒頭、菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長より開会挨拶があり、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、学修成果の可視化の取組として、学生の学修行動や成果物を評価するルーブリックの開発・実践・検証の作業を進めるとともに、アクティブ・ラーニングの取組が共通教育・専門教育を通じて広がる中で、学修評価のためのルーブリックの活用実践が共通教育だけでなく専門教育に広がりつつあり、今回のワークショップでは、ルーブリックを活用した学修評価に焦点を当て、実践事例紹介のほか、ルーブリックの観点や記述の調整を含めた諸課題について検討したいとの趣旨説明があった。

導入レクチャーでは、俣野 秀典 高知大学地域協働学部講師より、「ルーブリックによる学修評価を知る、活かす」と題して、ルーブリックに関する基礎知識をレクチャーしていただいた。ルーブリックの形式（評価観点・評価尺度・評価基準）について概略説明の後、フロアの参加者に「何のために成績評価は必要か」という問いを投げ掛け、グループテーブルでの参加者同士のアイスブレイクを兼ねた意見交換を行った。



事例紹介では、藤宮 龍也 山口大学大学院医学系研究科教授より、「医学科チュートリアル教育におけるルーブリック活用実践」と題して、2017年3月の医学教育モデルコア・カリキュラムの改訂に伴う医学教育改革や2019年度受審予定の国際基準認証に向けた動向な

どを紹介しながら、医学教育全体に、伝統的なプロセス基盤型教育からアウトカム基盤型教育に移行する必要性に迫られていることが説明された。医師として求められる基本的な資質・能力が明確化される中で、実践力や表現力などを評価するツールとしてルーブリックの導入に着目し、医学科チュートリアル教育においてルーブリックを活用した成績評価を行っている複数科目の実践事例が紹介された。



後半のワークショップ「ルーブリックの観点や記述を考える」では、俣野 秀典 高知大学地域協働学部講師のファシリテーションにより、まず、ルーブリックに関する詳細や作成上の注意点について説明があった。特に、ルー

ブリックについて、学生との共有が大切であり、次の学習の方向性を示す指針となることが説明されたほか、目標規準である「評価規準」と達成基準である「評価基準」の意味について解説があった。その後、幾つかの参考事例を紹介しながら、レポートを評価する際の観点やレベルごとの評価基準の記入を行うワークに取り組んだ。さらに、「ご自身の教授活動や職務の中でルーブリック評価をココに使ってみよう」というテーマで、参加者同士が振り返りを兼ねながら意見交換を行った。クロージングでは、俣野先生から、ルーブリック作成・運用のコツ、ペア・モデレーションに関する補足説明があったほか、ルーブリックというツールが学生の学習の到達状況を測定するだけでなく、授業や大学の質保証を証明する重要な武器になるとのメッセージがあった。



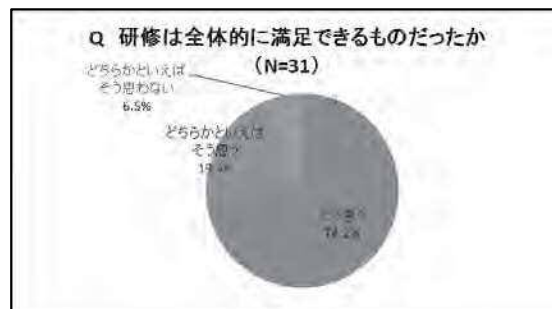
最後に、白澤 医学教育センター長より閉会の挨拶があり、アイスブレイク、ミニワーク、振り返りワークを通して、会場一体に、積極的かつ和やかな雰囲気の中で、シート記入、グループ対話が進み、充実したワークショップとなった。

まとめ：

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、初年次教育科目「山口と世界」コモン・ルーブリック開発を中心に、学内でのルーブリック活用の普及を図ってきたが、専門教育におけるルーブリック活用実践が徐々にではあるが広がりつつあることを契機に、今回の **FD・SD** ワークショップが企画実現した。医学教育センターとの共同企画は今回が初めてのケースであるが、今後とも、成績評価や教育の質保証をテーマに、連携を図っていききたい。学部の先生方の日々の授業実践の中には素晴らしい取組が多く、学部との対話を通してながら情報把握し、大学共有の財産となるような場づくりをさらに進めていきたい。



今回の **FD・SD** ワークショップでは、教育学部、医学部、共同獣医学部の教員、探究型科目の導入が進む高等学校の教員の参加が多く、当初の定員を上回る参加者となった。参加者アンケートからも非常に好評であったこと（下表参照）が分かり、レポートやプレゼンテーションをはじめとした学修活動の評価に活かしていきたいというコメントが多かった。学修評価をテーマとした **FD・SD** ワークショップを継続的に実施していく予定である。



3. 大学マネジメントセミナー2017 in やまぐち『今、改めて考える“教職協働” ～地方大学の魅力発信と大学間連携～』開催報告

日 時：2017 年 12 月 18 日（月）14:00～17:00

場 所：吉田キャンパス・大学会館 2 階会議室

参加者：101 名（うち、学内 68 名、学外 33 名）

主 催：大学リーグやまぐち、山口大学

共 催：大学マネジメント研究会、大学行政管理学会中国・四国地区研究会

概 要：

- (13:00～ 受付・大学リーグやまぐち加盟機関によるポスターツアー
ポスターテーマ：「うちの大学・短大の教職協働を紹介します！」)
- 14:00～14:10 開会挨拶・趣旨説明
山口大学長 岡 正朗
- 14:10～14:40 基調講演（1）
「東の山大でプレイフル！～職種と組織を超えた協働が日本を救う～」
山形大学米沢キャンパス事務部研究支援課・副課長 樋口 浩朗氏
（元・大学コンソーシアムやまがた事務局長）
- 14:40～15:10 基調講演（2）
「教職協働による地域に信頼される大学づくり」
日本文理大学工学部教授・学長室長 吉村 充功氏
- [15:10～15:20 休憩]
- 15:20～16:50 ポスター発表 & ディスカッション
- 16:50～17:00 クロージング & 閉会挨拶
山口大学理事・副学長 田中 和広
[総合司会：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

内 容：

2017 年 12 月 18 日（月）に、大学リーグやまぐち・山口大学主催 大学マネジメントセミナー2017 in やまぐち『今、改めて考える“教職協働” ～地方大学の魅力発信と大学間連携～』を、県内大学はもとより、北は北海道から南は長崎からの参加を含め、100 名を超える参加者を集め、吉田キャンパスにて開催した。本セミナーは、大学リーグやまぐち、山口大学の共同主催、大学マネジメント研究会、大学行政管理学会中国・四国地区研究会の共催で、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）における教学マネジメント強化のための研修の一環として実施された。

冒頭、岡 正朗 山口大学長より開会挨拶があり、2017 年度から SD（スタッフ・ディベロップメント）の義務化に加え、大学経営における教職協働の重要性が謳われる中で、従来の SD セミナーを大学マネジメントセミナーと改称して開催する趣旨が述べられ、例年同様、所属大学を超えた大学関係者の議論や情報交流に期待が寄せられた。

基調講演では、まず、樋口浩朗 山形大学米沢キャンパス事務部研究支援課・副課長より、「東の山大でプレイフル！～職種と組織を超えた協働が日本を救う～」と題して講演があった。近年の山形大学における外部資金獲得の伸び率が2年連続1位や米沢キャンパスにある工学部での研究活動の躍進などの紹介があった後、樋口氏自身が大学職員として取り組んできた取組について説明があった。国立大学法人化以前の山形大学での入試ミス事件を契機に、職員仲間で危機感を抱き、山形大学アクションプランの提起や基本理念の策定に参画するなど、大学執行部や大学教員との協働した成果を挙げ、そのほか、東日本大震災後の復興支援プロジェクト、若手職員育成を視野に入れた大学経営塾の企画など幅広い活動について説明があった。学内外の仲間やネットワークに支えられながら、大学職員の仕事に生き甲斐を感じ、更なる使命感を持って仕事に取り組む樋口氏の言葉と姿勢に、参加者は多くの感銘を受けているようだった。

次に、吉村充功 日本文理大学工学部教授・学長室長より、「教職協働による地域に信頼される大学づくり」と題して講演があった。18歳人口減が始まる大分県において、入学者数のV字回復を遂げた成果を取り上げながら、地元県内から選ばれる大学を目指して、教育理念の再編を図りながら、人間力育成に重点を置いた教育改革を、教職協働により時間をかけて進めてきた経緯について説明があった。FD研修会を通して、幹部と現場、教員と職員、ベテランと若手が教育や学習支援に関する価値観が違うことを互いに認識し合うことこそが大切であり、教職協働そのものが目的になってはいけなさと力説された。第2期中長期施策や文部科学省COC事業が起爆剤となって、地域に学生があふれ出すことで、大学への信頼感が向上し、学生の成長も数値になって表れてきていることを説明された。地方大学の成功事例の紹介とともに、教職協働のポイントを掴んだ大学経営人材としてのリーダーシップに、参加者は多くの学びを得ているようだった。

後半では、展示ロビーにおいて開催されたポスター発表において、発表者と参加者との対話に話が弾んでいるようであった。今回のポスター発表では、大学リーグやまぐち加盟機関すべてからポスター展示があり、県内初の高等教育機関同士のポスター発表は有意義なものとなった。その後のディスカッションでは、林透 大学教育センター准教授の全体進行のもと、基調講演の講師2名に加え、九州工業大学、九州女子大学、長崎短期大学の職員の協力を得て、グループファシリテーターをお願いし、ポスター発表での気づき・感想・意見について「教職協働」「地方大学の魅力発見」「大学間連携」という三つのキーワードに絡みながら、グループ対話を行った。まとめとして、5名のグループファシリテーターからそれぞれ一言コメントがあり、教員と職員の対話の重要性、学生の力をベースとした業務の関連付け、やまぐち地域特有の分散型大学間連携のメリット感などについて言及があった。

クロージングでは、ポスター発表の表彰式があり、「最優秀ポスター賞：徳山大学「徳山大学ダブルアドバイザー制度について」」「樋口賞：山口県「大学リーグやまぐち」の取組」「吉村賞：梅光学院大学「教職協働による学生支援（海外研修編）」」がそれぞれ受賞した。最後に、田中和広 山口大学理事・副学長より閉会挨拶があり、学内外の大学関係者が交流する素晴らしい機会となり、今後もこのような場づくりを行っていくこととした。



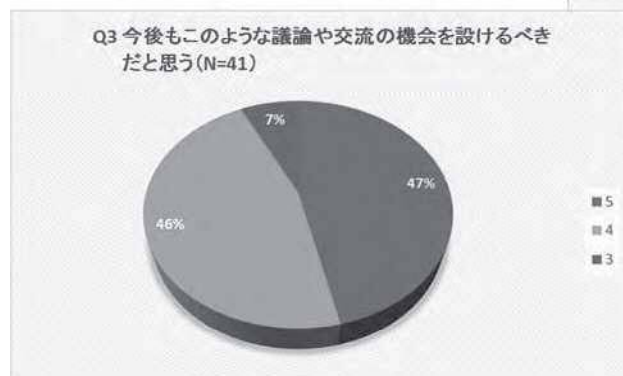
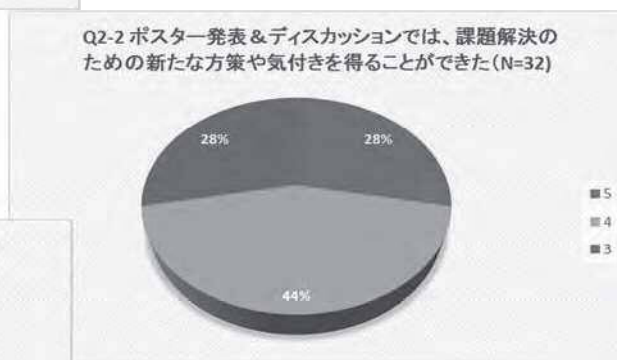
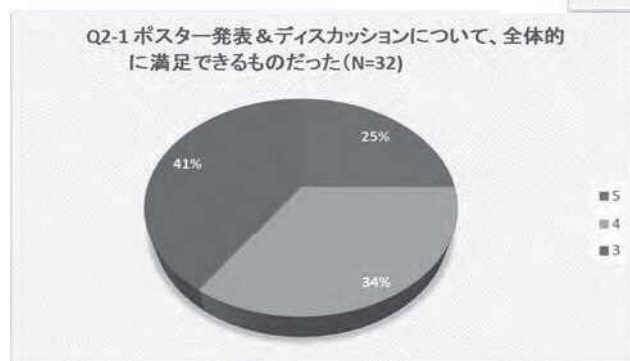
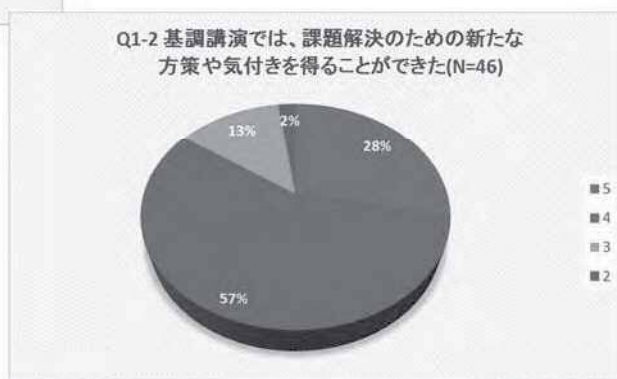
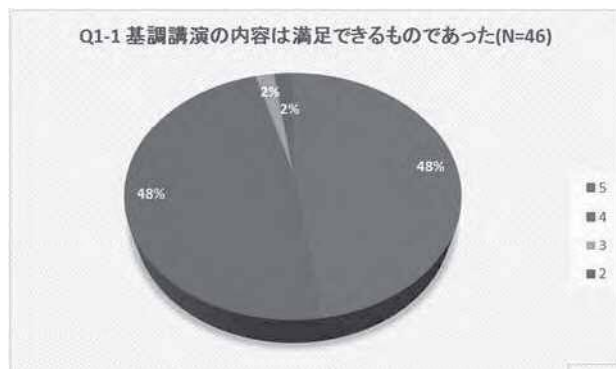
成果及び今後の方向性：

今回の基調講演では、職員の立場、教員の立場から、大学運営の臨む姿勢や意思などについて、2人の講師の豊富な経験と確かな実績に基づきながら、分かりやすく、かつ、説得力あるお話をいただいた。非常に密度の濃い話に、参加者一同、緊張感をもって聴き入る姿が印象的であった。また、後半のポスター発表では、県内の高等教育機関同士で初の取組であったが、熱心な意見交換ができたように思われる。参加者にとって共通のキーワードである「教職協働」「地方大学の魅力発信」「大学間連携」を通じたディスカッションでもお互いの問題意識を共有し、新たな気づきを得ているように感じられた。

参加者アンケートからは、基調講演、ポスター発表&ディスカッションともに、満足度が高く、かつ、継続的な開催を望む回答が多数を占めた（Q1-1～Q3 参照）。特に、基調講演の満足度が非常に高く、来年度以降も、ニーズに合ったテーマと講師選定の充実を図っていきたいと考えている。

「大学リーグやまぐち」が結成されてから1年の月日を経つ中で、各機関の教職協働を中心とした取組をポスター発表し、情報交流する機会を得ることができたこと、さらには、他県の参加者から、山口県庁が大学リーグやまぐちの事務局を担当し支援していることに高い評価をいただいたことを重要視したい。山口県内の高等教育機関同士、さらには、県外の高等教育機関の関係者との交流を得ながら、大学マネジメントセミナーの更なる充実を図

っていきたい。



5 強くそう思う 4 そう思う 3 どちらともいえない
2 どちらかといえばそう思わない 1 全くそう思わない

4. 2017 ラーニング・アドバイザー養成講座（第1～3回）

大学における学生の「自主的な学び」「積極的な学習行動」の支援者は教員だけではない。現に、教育支援・学生支援・就職支援・図書館といった部署では、その役割の一部を担っています。学生の多様化が進んできたこともあり、これまで以上に事務職員による学修支援体制の充実が求められている。

そこで、テーマⅡの数値目標項目「学修成果測定を支える教学マネジメントの強化」のひとつとして本学が独自に定めている指標である「ラーニングアドバイザー及び高度専門職（UEA：University Education Administrator）の配置」に向けた事業の一環として、「学生の学びの好循環」に資することのできる事務職員に活躍してもらうため、新たに「ラーニング・アドバイザー制度」を創設した。

この制度は、大学教育機構が主催する「ラーニング・アドバイザー養成講座（全3回）」を受講・修了することにより、ラーニング・アドバイザー認定証が授与されるというものである。なお、この3回の講座は、プログラムそのものに順次性がある関係で、定められた順番で受講することを求めた。可能な限り同一年度に3回とも受講することが望ましいが、業務との兼ね合いから必ずしも同一年度に全てを受講できないこともありうることから、可能な限り多くの事務職員が参加しやすい制度にしたいという趣旨から、複数年度にわたって受講することを可能とした。

講座の内容は、事務職員一人ひとりがこれまでのキャリアを振り返りつつ、大学人として身に付けておくべき学内の各種情報や制度、学生のニーズなどをしっかり把握・理解したうえで、学生の学びに関する疑問・悩みに応える事務職員になることを目指したものとなっている。

初回の講座は、2017年11月から2018年1月にかけて開催した。計23名から受講申込があり、このうち8名の事務職員の方々が全3回の講座を受講・修了し、大学教育機構長から「ラーニング・アドバイザー認定証」が授与された。初代ラーニング・アドバイザーのみなさんが、それぞれの部署・業務の中で、様々な形で学生の成長を支援して下さることを期待したい。

【2017年度の実施概要】

1. 日 時：①2017年11月30日（木）14:00～17:00
②2017年12月21日（木）13:00～17:00
③2018年1月19日（金）13:00～17:00
2. 会 場：①吉田キャンパス 共通教育棟 2階 会議室
②吉田キャンパス 事務局2号館 4階 第2会議室
③吉田キャンパス 共通教育棟 2階 会議室
3. 内 容：①学習支援者に必要なスキルとは？
②メンタリングとスタッフ・ポートフォリオ（SP）
③山口大学における学習支援者として目指すもの－事務職員として可能な学習支援を考える－
4. 講 師：①清水栄子（愛媛大学教育企画室講師）

②清水栄子（愛媛大学教育企画室講師）・篠田雅人（大学教育センター助教（特命））

③菊政 勲（創成科学研究科・理学部教授）・寺西晴美（学生支援部学生支援課副課長）・篠田雅人（大学教育センター助教（特命））



5. 山口大学 共育ワークショップ 2018「みんなで教育（共育）について語ろう!～大学と高等学校による授業協奏曲～」

山口大学 共育ワークショップ 2018

みんなで教育 共育について語ろう!

～大学と高等学校による授業協奏曲～

平成30年 **3月15日 木** 14:00～17:00 **参加無料**

会場 山口大学共通教育棟(吉田キャンパス) **対象** 大学関係者、学校関係者、大学生、高校生ほか

●主催:山口大学(大学教育再生加速プログラム(YU-AP)) ●共催:徳山大学
●後援:大学リーグやまぐち、山口県教育委員会、山口県私立中学高等学校協会



プログラム

14:00～14:10 開会挨拶 山口大学長 岡 正範

14:10～14:50 【1項目:基調講演】
「生徒・学生が輝く『学び』とは」 認定NPO法人カタリバ代表理事 今村 久美氏

休み時間(教室移動)

15:00～15:45 【2項目:大学×高等学校による模擬授業】 <選択制>

①大学の模擬授業(1) 「目に見えない世界を科学する」 ～微生物バイオテクノロジー概論～ 山口大学創成科学研究科(農学系)准教授 藤井 克彦氏 (山口大学第2回アクティブ・ラーニング(AL)フェスティバル) ③高等学校の模擬授業(1) 「ビジュアル教材でイングリッシュ」 ～子供のときの思い出・選択と幸せの関係～ 山口県立徳山高等学校 英語科教諭 和田 将太氏	②大学の模擬授業(2) 「みんなの世界をビジュアル化」 ～ものづくりのキャッチボール～ 徳山大学経済学部 知財開発コース教授 なかばら かぜ氏 ④高等学校の模擬授業(2) 「三角形の心の探究 ～心の相互関係～」 野田学園高等学校 数学科教諭 河本 順康氏
--	---

休み時間(教室移動)

15:55～16:55 【3項目:ダイアログ・セッション】
「大学の授業と高等学校の授業ってどうなの?」
模擬授業担当教員×大学生×高校生

16:55～17:00 閉会挨拶 山口大学理事・副学長 福田 隆義

※申込締切日 3月14日(木)まで。YU-APホームページの「イベント」より申込みください。
<http://www.yuap.ous.yamaguchi-u.ac.jp/workshop>

【お問い合わせ】



山口大学

大学教育機構 大学教育センター (YU-AP推進室)

TEL: 083-833-8281 E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp

趣旨・目的

2014年12月公表の中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について（第Ⅲ）」を受け、高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革が進み、2016年3月「高大接続システム改革会議「最終報告」」のほか、学習指導要領が大きく変わろうとしています。生徒や学生の確かな学力を育成することを目的に、「主体的・対話的で深い学び」を促すアクティブ・ラーニングの視点による授業改善が学校を巡る共通テーマとなっています。このような状況において、大学関係者と学校関係者が一線になって、教育について考える場が必要不可欠です。

今回のワークショップでは、教育を通じた社会的起業家である認定NPO法人カタリバ代表理事 今村久美氏の基調講演を皮切りに、山口県内部の大学と高等学校が連携する模擬授業セッションを開催し、高大接続による人材育成をテーマに、みんなで語り合いたいと思います。

なお、本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）中間成果発表会として開催いたします。

1 題目：基調講演

「生徒・学生が輝く『学び』とは」

認定NPO法人カタリバ代表理事 今村 久美 氏

プロフィール

1979年生まれ。慶應義塾大学卒。2001年にNPOカタリバを設立し、高校生のためのキャリア学習プログラム「カタリ場」を開始。2011年の東日本大震災以降は被災した子どもたちに学びの場と場所を提供する「コラボ・スクール」を運営するなど、社会の変化に応じてさまざまな教育活動に取り組む。「ナナメの関係」と「本書の対価」を軸に、思春期世代の「学びの意欲」を引き出し、大学生など若者の夢実現の拠出に力を入れる。ハナナ基金代表理事。2015年より文部科学省中央教育審議会 教育課程企画特別部会委員。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 文化・教育委員会委員。



2 題目：大学 × 高等学校による模擬授業 <活板図>

①大学の模擬授業(1)

「目に見えない世界を科学する

～微生物バイオテクノロジー概論～

山口大学創成科学部生物系(生物学)准教授 藤井 克彦 氏
(山口大学第2回アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー)

授業概要

我々人間はさまざまな微生物から恩恵を受けて快適な生活を送っています。時には害(疫病)を齎せられることもあります。また人間は滅んでいまいので「そこそこ良好な関係」を微生物と築いているとまで言えます。しかし、Leeuwenhoek が自作の顕微鏡で微生物を観察して以来、微生物学は300年以上の歴史を誇りますが、実は「自然界に棲息する微生物の99%以上は、まだ顕微鏡で観察すらできていない」ことがわかってきました。そこで、この99%の隠れた世界の中から、我々の生活や産業に積極的に貢献してくれるような新しい微生物種を探索しようとする研究が盛んになっています。今回の模擬授業では、社会で活用されている微生物バイオテクノロジーの一端を解説したいと思います。

②大学の模擬授業(2)

「みんなの世界をビジュアル化

～ものづくりのキャッチボール～

徳山大学経済学部 知財開発コース教授 なかはら かぜ 氏

授業概要

徳山大学の知財開発コースでは、学生たちの知的財産をコンテンツを使って引き出す学びを行っています。動画・イラストレーション・画像制作・アニメーションなどです。それらの「ものづくり」の基本は、作品を第三者に見せることによって、その良否や評価から自分の知的財産を発見し、それをスレッドアップさせていくところにあります。先生から学生、学生から先生といった方向だけではなく、学生同士、または自分から自分へという自己発見が可能です。今回は、そのコア動画というオーソドックスな表現形式を利用して、みなさんの世界観を聞いていただきます。みなさんの胸の中にある宝物屋に挑戦しましょう！

③高等学校の模擬授業(1)

「ビジュアル教材でイングリッシュ

～子供のときの思い出・選択と幸せの関係～

山口県立西条高等学校 英語科教師 和田 将太 氏

授業概要

リポートにあるように、英語の授業もビジュアル教材を使いながら行います。テーマは「子供のときの思い出」と「選択と幸せの関係について」です。このテーマのもと、課題を渡られる皆さんにもたくさん質問を投げかけながら、楽しく授業の内部について考え、理解してもらえたらと思います。皆さんは「子供のときの思い出について教えてください」といわれたとき、皆さんはどんなことが思い出されますか？たくさんある皆さんの思い出からあるテーマに焦点を当てて授業を展開します。もうひとつは「選択について」です。皆さんは「選択」と聞いて、どんなことが思い出されますか？この授業では、選択に関する課題について行います。ぜひ楽しんでみてください。

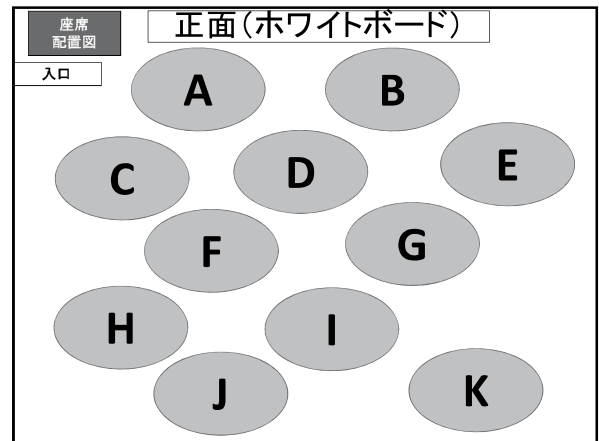
④高等学校の模擬授業(2)

「三角形の心の探究 ～心の相互関係～」

香川県立高松高等学校 数学科教師 河本 順彦 氏

授業概要

本授業では、三角形の重心、内心、外心、垂心の相互関係を予想します。この予想を立てる過程で、図形に対する理解を深めるとともに幾何・関心を高めることを目指します。すべての三角形において成り立つ4点の相互関係の予想を立てることを目指しますが、まずは特殊な三角形(正三角形、二等辺三角形、直角三角形)で4点を確認し、これらの三角形において成り立つことを探究することから始めます。この過程で、すべての三角形に対する予想を立て、それが成り立ちそうかを幾何的数学ソフトウェア「GeoGebra」を用いて視覚的に確認します。また、本授業では予想を立てることに重点を置くため、立てた予想の証明は行いません。



《3限目》 ダイアログ・セッション

【全体のお題】
「大学の授業と
高等学校の授業ってどうなの？」

【ウォーミングアップ】 言語化してみよう！

《お題》※3分

2限目：模擬授業の内容、感想、気づきについて、
ダイアログ・シートに書き込んでみよう！

【ホップ】 説明してみよう！ 共有してみよう！

《お題》※12分

ダイアログ・シートに記入した内容について、各人
2分程度で説明し、グループでシェアしてみよう！

【ステップ】 アイデアを発散しよう！

《お題》※12分

「大学の模擬授業」「高等学校の模擬授業」を受講しての
感想や気づきを話し合いましたね。

そこで、「大学の授業への期待や要望」、「高等学校の
授業への期待や要望」をリストアップしてみよう。
(A3用紙、ポストイット、クロッキーをご活用ください)

【ジャンプ】 アイデアをまとめよう！

《お題》※8分

- ①「大学の授業への期待や要望」について、
- ②「高等学校の授業への期待や要望」について、
グループ内でそれぞれ最も大事だと思ったものを
一つずつあげてください。
そして、スケッチブック1枚に書き込んでください。

【ダイアログ】 全体共有

「大学の授業と 高等学校の授業ってどうなの？」

※各グループ発表 1分をお願いいたします。

クロージング

◆4名の模擬授業の先生方からコメント

◆今村先生からコメント

ご協力ありがとうございました！



ダイアログ・シート

【所属（学年）・氏名

】

①受講した模擬授業の内容を簡単に書き込んでみよう。

②受講した模擬授業の感想を簡単に書き込んでみよう。

③模擬授業を受講して、気づきがあれば、書き込んでみよう。

6. 学生FDサミット2017春 山口大学 学生FD第一世代トーク「とどけ、熱き心！」

日 時：2017年3月2日（木）11:20～12:20

場 所：山口大学 共通教育棟1番教室

パネリスト：山下 貴弘 山口大学COC+事業推進本部コーディネーター

（元・追手門学院大学学生FDスタッフ）

平野 優貴 法政大学キャリアセンター職員

（元・立命館大学学生FDスタッフ）

曾根 健吾 横浜国立大学高大接続・全学教育推進センター特任教員[当時]

（元・東洋大学学生FDスタッフ）

高橋 和 名城大学学務センター職員[当時]

（元・岡山大学学生参画型FDスタッフ）

1. 趣旨説明

（司会） 学生FDサミット最初の企画「学生FD第一世代トーク『とどけ、熱き心！』」に移らせていただきます。まず、私から趣旨説明を始めさせていただきます。本サミットはこのパネルトーク、分科会、2日目のワークの3部構成となっております。2日目のワークでは、学生FDサミットの未来のビジョンをデザインするというワークを行います。初日はそのための布石となっています。このパネルトークで歴代のサミットを振り返り、分科会では現在の学生の学びを振り返り、このような初日を通して、2日目にサミットの未来の姿を考えていただきたいと思います。

では、サミット最初の企画「学生FD第一世代トーク」のスタートです。今回で10回以上の企画を迎えるこのサミットですが、どういう経緯でなぜ始まったのかについて分からない方も多いのではないのでしょうか。今回はそんな皆さんのために、学生FDサミットの黎明期をつくってきた大先輩をお呼びしております。ご登壇いただく皆さんはいずれも多岐にわたるFD活動をご経験され、多数の経験があるのですが、今回は自大学のサミット開催を中心にお話しいただきたいと思っています。最後にこれからのサミットの未来についても少しお話を頂こうと思っていますので、楽しみにしてください。

それでは早速ご登壇いただきましょう。トップバッターは学生FDサミットの言いだしっぺ平野優貴さん、拍手でお願いします。未だ岡山大で恐れられる学生参画型FDの女帝、



高橋和さん。話しだしたら止まらない、話しだすのも止められない、東洋大の拡声器こと曾根健吾さん。くまモンの友達、追手門学院が生んだ和服のゆるキャラ、山下貴弘さん。以上4名のトークセッションです。では皆さん、よろしくお願いいたします。

(山下) それでは第一世代トークということで、パネルセッションを始めたいと思います。今回のパネルセッションのモデレーターを務めさせていただきます山口大学の山下です。よろしくお願いいたします。

さて、パネルトークの位置付けを改めて簡単にご説明します。本パネルディスカッションは、皆さんが大学・地域の枠を超えて、今から新しいサミットを考えるための布石です。今回、初参加の方はどれぐらいいらっしゃいますか。ありがとうございます。7割ぐらいでしょうか。多くの方々に初参加いただいています。これからサミットを考える前に、今までどんなサミットがあったのかを、過去サミットを経験



した、主催したメンバーに語っていただいて、「こんなサミットがあったんだ」という皆さんの学び、気づきになればと思います。サミットに第1回から参加させていただいて、ずっと感じていることがあります。この緑の服を着ている人たちが運営者です。こちらがパネリストの皆さんで、皆さんが参加者です。多くの皆さんはここでホストとゲストというふうに分けるとと思います。アルバイトをしている方は「お客さん第一です」みたいなことを言われたかもしれません。でも、学生FDサミットはその点が大きく違うと思います。私たちは皆さんをおもてなしするのではなく、皆さんをこの企画に参加していただく、一緒につくっていただく仲間だと思っています。ですので、今日は次回、自分だったらこうするという思いを届けていただければと思います。今気付いたことなどがあれば、今少しだけ待ちますので、書くものとメモをご用意ください。

2. 過去のサミットの振り返り

(山下) それでは早速、学生FDサミットの過去の皆さまからサミットの振り返りを行っていただこうと思います。サミットの振り返りは開催順に行っていきますので、まずは立命館大学サミットのきっかけをつくった男、平野さん、お願いできますでしょうか。

ここで気付いたことを明日のしゃべり場で共有して「次、こんなサミットをつくろうよ」という話をするそうですので、ぜひここでインプットしておいてください。

2-1. 立命館大学の場合

(平野) 法政大学職員の平野優貴と申します。私は学生時代、立命館大学で学生FDスタッフとして活動していて、2009年の夏に、立命館大学で第1回の学生FDサミット2009夏を開催しました。そこから学生FDサミットが始まりました。その当時、「おもしろい学生

がおもしろい先生とおもしろい授業を作る」という関西丸出しのスローガンを設定して学生 FD スタッフの活動に取り組んでいました。このスタッフが実行委員として学生 FD サミットを開催しました。そのスローガンが「大学を変える、学生を変える」です。これは、FD というと、先生がやることと思われがちですが、学生も主体的に授業に参加するし、授業の構成員として授業をつくります、そんな新しい当たり前をつくろうじゃないかということと、学生は高校まで生徒といわれていたけれど大学では学生にならなければいけない、みんなで学生になろうというキーワードとを考えてつくったスローガンです。これはこの後のサミットのキーワードになってくると思います。

オープニングでは私が話をさせていただきました。そのとき、学生 FD サミットに込めた思いは、まず参加者一人一人がとにかくしゃべる場にしたいということです。今山下さんから話がありました。一方的に聞いているフォーラムなどもありますが、サミットでは全員にしゃべってもらいましょうということです。さらに定期的を開催することで、サミットのときだけ考えるのではなく、日常的に考えていることや取り組んだことの成果をみんなで交換し合う場を半年に 1 回の学生 FD サミットにしようと考えました。もう一つ重要なのは、「立命館大学のイベント」にしないということです。最初は立命館大学で始めましたが、開催すること自体が学生にとって非常に勉強になりますし、いろいろな大学でいろいろなキャンパスを見て話すことにも意義があると考えていたので、学生 FD 活動に取り組む大学で、持ち回りで開催できるようにしようと思いました。一番重要なのは、学生が主役の場にしたいということです。もちろん学生は勉強している立場なので、未熟なこともあるとは思いますが。教職員と真っ向から議論したら、多分教職員が勝ちます。ただ、学生が生徒から学生になるために、学びについてしっかりと考える機会を持つんだということです。教職員はそれを見守って、そこから学生の声を吸収して日頃の FD 活動、大学改善活動に生かすという場にしようという思いがありました。全員がしゃべる場ですので、オープニングでは、全員自己紹介というのをやりました。これは最初で最後だったと思います。今日みたいな感じで、大勢いる中 1 人 10 秒で、全員が順番に立ってしゃべっていくという非常に大規模なもので、自己紹介だけで 1 時間くらいかかりました。当時 100 名ぐらいの参加でしたのでできました。

木野（茂）先生と考えているネタが大体かぶって、通じ合っているんだなと先ほど感じました。各大学で FD に取り組んでいる学生さん、まだ和服になる前の山下さんにも登壇してもらって、「サミットに期待するもの」を話してもらいました。それから全員でしゃべる場なので、小グループに分けて、しゃべり場と呼んでいましたが、みんなで熱い密な話をしました。さらに、少し大きな教室に移して、その成果、自分のグループであったことを話しました。いろいろな意味で話す場ということになりました。

では、この学生 FD サミットはそもそもなぜこんな構想ができたのかというと、2008 年に山形大学と立命館大学が協定を結んで交流がありました。学長交流から始まり、教員、職員、学生が、山形にわれわれが行ったり、もしくは山形から来ていただいたりという交流を行いました。先ほどと同じように小グループでの話し合いや発表をしたり、山形大学の授業に参加させていただいたりしました。これに参加したわれわれ学生スタッフの感想は、地域、規模、設置形態は全然違って、関西と東北で、立命館は非常に大きな大学ですし、設置形態も国立と私立で違いますが、大学同士で学生・教員・職員が交流したことが

非常に楽しくて刺激的でした。これをもっと大勢で多くの大学を呼んでやったらすごくおもしろいのではないかと考えて、そういうことをやりたいと提案したところ、何とか実現に漕ぎ着けることができました。それが先ほどの学生 FD サミット 2009 夏でした。

最初しばらくは立命館大学でやっていましたが、その後他大学で開催しました。2011 春に、東日本大震災の関係で法政大学は中止になりました。その後 2012 冬は追手門大学です。このときが山下さんです。これが初めて立命館大学以外で開催したサミットです。2013 春は岡山大学、初めて国立大学で開催したときに見事なマイクパフォーマンスで存在感を見せつけたのが高橋さんです。2014 春の東洋大学は初めて関東で実施したサミットで、そのときに活躍されたのが曽根さんです。われわれ第一世代ということで今日トークをさせていただくことになりました。ということで、この後もお三方に順番からそれぞれのサミットでのお話、コメントがありますので、順番にマイクを渡していこうと思います。それでは、私からの発表は以上です。ありがとうございます。

(山下) ありがとうございます。では、続いて、高橋さん、岡山サミットについてお話をお願いできますか。

2-2. 岡山大学の場合

(高橋) 今は名城大学で教務の職員をしています高橋と申します。学生時代は岡山大学で学生・教職員教育改善専門委員会というグループで活躍していました。活躍と自分言っちゃいましたね(笑)。今から 4 年前のサミットの話をしてします。学生 FD サミット 2013 春「岡山サミット」は、「考動せよ！学生 FD」というテーマで行いました。

大きく三つの企画をしました。一つ目が岡山白熱教室、二つ目がしゃべり場①、しゃべり場②です。40 大学 309 人の参加がありました。私が学生 FD サミットに対して持った思いですが、私は学生時代、先ほど紹介があった平野さんの第 1 回以外は全て参加していました。就職後も業務の都合がつく限りは参加しています。いつも行って「すっごく楽しかったな。勉強になるな」というのがあって、先ほど平野さんがおっしゃっていましたが、大学によってやっていることが全然違いますし、皆さんもそうだと思いますが、いろいろな方と交流して、他大学の方が恵まれていること、逆に自分の大学はこんなに恵まれているんだということに気付くきっかけになりました。



でも、ちょっと落ち着いて考えたときに、実際にサミットに参加することが自分の大学での活動に貢献しているのか、胸を張って言えるのかと思うところがありました。「楽しかった」で終わっているのでは駄目ではないかと思いました。もちろん実費で来ている学生もいると思いますが、大学から補助を受けて来ている学生もいます。別にお金をかけているからどうのこうのということを言いたいわけではないです。ただ、交流して、温泉に浸

かって「あーよかった」と帰っているだけだったら、大学にとっては何の還元もないし、それだけでいいのかという思いがありました。

それで、岡山サミットでは、まず学生 FD 活動に関する基本的な知識の確認をしました。これが岡山白熱教室です。FD が何の略か知っている人は手を挙げてください。全員は挙がらないですね。では、FD が何に基づいてやらなければいけないと決まっているか知っている人は手を挙げてください。ほとんど挙がらないですね。もう一つ、良くも悪くもですが、この登壇者は同級生ですが、目立ってきた世代がごっそり卒業してしまうので、次の世代にエールを送りたいと思って、岡山白熱教室をつくりました。

それから、具体的な活動目標と計画の設定、そして検証をするためにしゃべり場と FD タイムカプセルというものをやりました。しゃべり場は二つやりました。しゃべり場①は今皆さんが座っているようにいろいろな大学の人と話をし、しゃべり場②は大学ごとに集まってしゃべり場①で話した内容の共有、そして FD タイムカプセルづくりをしました。

岡山白熱教室の写真をお見せすると、こんな感じで、前にパネラーがいます。先ほど言った、FD が何に基づいてやらなければいけないと決まっているかというのは、大学設置基準というものなのですが、それについてペアワークをして、実際にいろいろテーマは取り上げていました。例えば、「宿題は全ての授業に必要ですか？」とか「そもそも学生 FD は必要ですか？ 不要ですか？」といった意見交換をして、自分たちの活動の基礎を考えた上で議論しました。

FD タイムカプセルでは、「やっただけになっては駄目だ」というのが、私が岡山でサミットをやろうと思った源だったので、いつ何をするのか、その場で計画を各大学の方に立ててもらいました。PDCA サイクルの P をもう実際にサミットでやってしまおうという企画です。立命館大学での学生 FD サミット 2013 夏のときに、実際にタイムカプセルをお返しして、自分たちがどれくらいできているかを見てもらいました。

リフレッシュ企画で行った FD 時計というのは、FD サミットや学生 FD などについて言いたいことを書いたホワイトボードを持ってもらって、写真に撮ったものです。これは YouTube に上がっているので、もし興味があれば見てもらえればと思います。私からは以上です。

(山下) 高橋さん、ありがとうございます。それでは初関東での開催ですね。東洋大学 2014 サミットの曾根さん、お願いします。

2-3. 東洋大学の場合

(曾根) 皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました曾根です。私は 2014 春の学生 FD サミットを初めて関東で開催しました。そのとき中心として全体を統括してきましたので、そのときの話を簡単にさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

私自身のスタートは、2011 年 3 月 12~13 日に法政大学で開催を予定していた関東初の学生 FD サミットです。私は関東連合軍の一員として、全体を統括する立場を学生のときに担ったのですが、前日に東日本大震災が起きました。家に帰れなくて法政大学の床で寝るという経験もしました。それでも関東で学生 FD サミットを開催したいと思ったのは、

学生 FD 活動は、学生の力を活かして主体的により良い学びや教育を実現させるというすごく意義のある活動だとずっと信念を持って自分なりにやってきたからです。学生 FD サミットに私が初めて参加したのは第 2 回の時なのですが、そのときに全国から自分の大学や教育をより良くしたいと思う学生や教職員が集い、相互に刺激を与え合うというのはなかなか素晴らしい場だと思いました。その開催意義はすごく大きいと思って、何とか関東で初めてこういう場を持ちたいと思いながらやってきました。学生 FD サミットの開催を通して、各大学の皆さんが相互刺激を受けて、各大学に帰って、自分の大学の活動を活性化するという循環を回すことも大事だと思ってきました。



その中で関東圏では、折に触れて関東で活動している大学同士で集まるといった形での大学間連携をしていました。関東圏 FD 学生連絡会という学生 FD スタッフの連携活動も一時期してきました。関東初のサミットは、関東圏の大学の連合方式で行いました。関東で活動している主だった大学に参加してもらい、各大学から学生実行委員と教職員応援隊を出してもらって、実行委員会をつくって運営して、サミットを開催しました。関東のサミットでめざしたものは、まず効率的な情報収集です。学生 FD サミットには学生 FD スタッフとして活動している学生もいれば、ピア・サポーターとして活動している学生もいます。そうではない学生もいます。そういう学生が自分の活動目的に応じて効率的に情報収集が行えることが大事なのではないかということで、効率的な情報収集を行えるようにしました。また学生・教員・職員のそれぞれの意識改革が必要だということで、それを実行委員会で話し合っ、サミットは学生と教員と職員の意識をもっと変化させていくということをお願いにしました。各大学での活動を分類することを通して、自大学に生かせるものを持って帰るという、お土産をつくることもお願いにしました。新たなしゃべり場の形も模索しました。フローチャートをつくり、最終的には各大学での活動を活性化させていくということで、情報収集から意識改革へ、自分の大学に持って帰って自分の大学をどうしていくかを話し合うという形でやってきました。

プログラムはこの目的の下に編成しました。特徴的だったのは分科会の部です。大変だったのですが、たくさんセッションをつくりました。例えば、講師を呼んだ学び場のようなもの、学生だけ教職員だけの座談会、ディベート対決セッション、会場校企画というものをやりました。会場校企画は認証評価期間 3 団体の職員の方に来てもらって、認証評価の話や質保証への学生参画の話もしてもらいました。

2 日目は、とても刺激的な取り組みだったのですが、学生・教員・職員合同テーマ別しゃべり場にして、好きなテーマを参加者が自分で選んでしゃべり場を行いました。各参加大学の学生と教職員だけで集まってもらって、自分の大学をどうしていくかというグループワークも行って、最後にファイナルセッションで、今後どうしていくかという議論も行いました。

これは開催風景なのですが、オープニングがあって、大教室に集まってもらって、最初は「学生FD概論Ⅰ」で、先ほど高橋さんから、FDとは何ですか、何の略ですかという話があったと思いますが、「そもそも学生FDとは？」という話を学生・教職員のペアですてもらったり、ペアワークを通してみんなで議論してもらったりしました。

2日目には、大学ごとに集まってのグループワークをしたり、最後にファイナルセッションで学生に上がってもらって、今後どうしていくのがいいか提案を投げかけてもらったりということもしてきました。詳しく知りたいという方は、このサミットの全体的なことは報告書にまとめて東洋大学のFD推進センターのホームページにアップされていますので、ぜひご覧いただければと思います。学生FD活動を盛り上げることでより良い学びが教職員・学生にとっても実現していけばいいなと個人的には思っています。

最後に一つ宣伝です。先ほど関東圏で連携をしているという話がありましたが、今回関東圏の有志の学生がかわいいTシャツをつくりました。ONE 関東圏プロジェクトといって、関東圏で学生FD活動を盛り上げようということで、今一生懸命有志の学生が活動をしています。今日、賛同教職員と学生で着ている人もいますので、見掛けただけひ声をかけてあげてください。最後、宣伝でした。以上、ご清聴ありがとうございました。

2-4. 追手門学院大学の場合

(山下) ありがとうございます。さあ、それぞれの思いがあるサミットが話されました。いよいよ最後です。時間は前後するのですが、2012年追手門学院大学でのサミットについてお話しさせてください。私は当時、大阪にある追手門学院大学の学生FDスタッフをしていて、3年生の頃だったでしょうか。2009年に第1回のサミットがあった後、それから3年、学生FDサミットをいよいようちでやるぞと手を挙げたことから始まったのが2月のサミットです。今は山口大学で、地方創生、皆さん聞いたことがあるでしょうか、いかに地域に人を定着させるか、その地域の魅力、課題を解決するかといったことに関する教育プログラムの開発に携わっています。これでも大学職員です。

追手門学院大学の学生FDサミットは、2012年2月25日、全国56大学から340名の教員・職員・学生、もう一つ言うと高校生、一般の方もご参加いただいた企画になっています。当時は最大規模だったと聞いています。ここに今回出ている方々は、学生FDサミットの代表者の方々と書いてあると思います。皆さんの配布資料の中にも自己紹介的なものがあります。曾根さんと僕が「？」と書いてあり、「これは誤字だろう」とか「間違っているんじゃないか」と思っている方もいるかもしれません。でも、実は正解です。いろいろやっています、この辺にいるのは全部僕なのです。電子機器の操作係をやっていました。さも代表っぽく話しているので、代表だと思ってもらっても結構ですけど、やっていたことは電子機器を操作していたぐらいです。



私たちは、追手門らしいサミットをつくろうということで、自分たちがどんなことをやりたいのかメンバーと話し合いました。2 日間の合宿で、自分たちは何をを目指すのか、どんなことを達成したいのか、逆にどんなことだけはやめてほしいということを話し合っ、自分たちは何をしたいか、どうすべきなのか、どうすれば達成できるのかという課題をまとめました。「こんなサミットは嫌だ」ということで、「常に独り言」という意見もありました。つらいですね。また、「参加者にこうなってほしい」「お土産を持って帰ってほしい」「サミットの位置付けって何だろう」などをメンバーで話し合ったことを覚えています。

これを話し合った結果をまとめると、「中華料理つくろうぜ」、意味が分からないですね。これは追手門のサミットに行っていた人たちは「はあー」となるかもしれません。私たちはいろいろな材料をそろえました。教職員とのパネルトーク、分科会形式、あらゆる方法を使って皆さんにいろいろな情報を持って帰ってもらって、自分たちで料理をつくるんだ、何料理でもいいけど何か中華みたいなのもいいよねと、最後はこの言葉にまとめただけです。特に深い意味はありません。でも、自分たちはこういうものをつくりたいというものを絵で示してみました。

今のままでいくと、中華料理をつくる講座になってしまうので、私たちが言いたかったのは、教員・職員・学生が一体となって初めて大学だということです。大学を構成しているのは、学生が主役で、教員が応援、職員はどこに行ったといったという話になるので、職員も活動に関わっていますということで、より職員にテーマを当てて私たちのプログラムをつくっています。当日のプログラムの一つには分科会というものをつくりました。今回のプログラムにはないのですが、各教室で皆さん授業を選びますよね。あんな形で授業を選んでもらって、この枠はどれでも参加できますが、ただ同じ時間帯で選んでくださいという形でつくりました。学生・教員が何をやっているか。学生の発表はいろいろところで聞けます。教員もこんなことをやっているというの聞けます。では、職員は何をやっているのかということで、職員の話だけに特化したプログラムもつくりました。もう一つ、パネルレーン、学トークなどいろいろ書いてありますが、本当にパネルセッションをただひたすらやるということです。一般の方、文部科学省の方、大学研究科の方、企業の方に来ていただいて、大学に対してぶっちゃけどう思いますかと聞くということをこのプログラムの中に入れました。学生・教員・職員が一緒になって推し進める FD、これは追手門の内なるテーマです。やはり学生だけ、教員だけ、職員だけというのは学生 FD ではないということが追手門のテーマの一つです。このテーマで実施しました。

5 分という限られた時間で話したので、実は追手門学院大学は本を出版しています。学生 FD サミットの裏側でどんなことがあったのかをまとめた資料があります。図書館にあるかもしれません。もし興味のある方は Amazon をクリックしていただければと思います。1 円も入らないですけども、大阪人だから一応売ってみようと思います。こんなこともありますので、興味のある方はこういった過去のサミットをまとめた本もありますので、ご覧ください。

3. モデレーターからの質問

(山下) ということで、今までサミットでどんなことがあったのかは、全て話すには今

から明日の夜までかかりますので、まずはこのあたりで話を終えさせていただこうと思います。ここからの流れですが、今皆さんが気付いたことがあると思います。それを振り返りながら、私から登壇者の方々に 1~2 問質問させていただきます。せっかくだから皆さん、質問してみたいことがあるはずですよ。すごく頷いていますね。はい、大丈夫です。皆さんに質問していただく時間を取っています。ぜひこうやって話を聞きながら、何かこんなことを聞いてみたいなのということがあれば考えておいていただければと思います。

さて、早速ですが、登壇者の皆さんの発表を初めて伺って気付いて、気になったことをぜひ質問させていただきたいと思います。最初に、平野さん、「おもしろい大学、おもしろい教員」というのは、本当に関西っばいこてこてのテーマだと思います。僕も確かにおもしろいのは好きなのですが、「おもしろい」は人によって違うんじゃないかなとも思うわけです。爆笑を取れたらいいという人から、もっと深めたいという人もいて、おもしろさはいくつかあって、「おもしろい大学、おもしろい教員」とはどういう意味なのか、なぜこのテーマにしたのかを教えてほしいと思いました。いかがでしょうか。

(平野) もちろん、「おもしろい」という表現に関しては、いろいろな意見があると思いますが、まあもちろんインタレスティングの方で、では興味深いということはどういう場面で感じているだろうかということです。当時、サミットとは別にスタッフとして活動していたのが、例えば授業インタビューです。学生スタッフが実際に受けておもしろかった授業の先生に、「何を伝えたいと思ってやっているのか、どういうことに気を付けて、どのような学生に分かってもらえる努力をされているのか」などを聞いてまとめようとしていました。「おもしろい」というのを学生はどういうときに感じるだろうか。例えば簡単に単位が取れる授業や座っているだけの授業でのインタレスティングはあまり深くないのではないかという議論になりました。では、深いインタレスティングを感じるのはどんなときか、ちょっと大変かもしれないけれど、難しい問題について自分たちで頭をひねったり考えたりというところが、何かいろいろな意味で大学生をやっている感じがしますし、当然、達成感もあるので、こういう「おもしろい」状態を表現できるのがわれわれ関西人なのではないか、おもしろい状態を目指そうかということとでこういうテーマになりました。



(山下) ありがとうございます。他にもっと聞きたいのですが、次の質問に移らせていただきます。高橋さんには、「すごく楽しかった」というサミットに参加してみた感想を挙げていただいて、初参加の方々は何が楽しいかまだ分かっていないと思いますけれども、これからじわじわくるだろうと思います。その何が楽しかったのかを高橋さんから改めて教えてほしいと思ったのと、一方で、楽しいだけでは駄目だという話をされていたと思います。楽しいというのはすごく良い言葉だと思います。今のおもしろいという話のように、おもしろいのは良いことだと言っている一方で、楽しいだけでは駄目だというのは、何が

駄目だったのかを教えていただきたいと思います。いかがでしょうか。

（高橋） まず何が楽しいかという、単純に友達ができます。私たち、みんな友達だと思っているけど、いい？（笑） というふうに友達ができます。その友達からいろいろなことを教えてもらうことができます。大学によって環境が全く違うので、「自分のところではこうだ」という話を聞いて、自分自身の中では例えば、「この活動をしたいけど無理だ」と思っていることがあるとすると、それは案外思い込みで、他の大学だったらやっているとか、何か課題があったとしても、こういうふうに気を付けたらできたということを知るので、すごく話していても楽しいし、これから自分が活動していこうというときのヒントになるというのが楽しかったという感想です。

（山下） なるほど。でも、今の話を聞くと、「それ、すごくいいな。それだけでいいじゃない」と思うのですが、それでは駄目なんですか。

（高橋） そうですね。そうやってまたいじめてくるんですね（笑）。楽しいだけでもいいかもしれないと思うんですけど、これだけ多くの人数が集まっているいろいろなことができる環境を与えてもらっているのだったら、もっと何か自分の大学を良くするような活動につなげていけたら、もっとうれしいのではないかと、自分の大学生活ももっと楽しくなるのではないかという意味です。

（山下） ありがとうございます。次は曾根さんに質問したいと思います。曾根さんは関東初のお他大学の連合と聞いて、他大学の連合ができるんだと率直な感想で思いました。他大学の連合といっても、一大学でも、裏を知っている人間からすればすごくばたばたして、調整することなどが膨大にあるわけです。一大学だけでも大変なのに他大学でやることは「一見良さそうに見えて何かしんどくねえ？」みたいなことがあると思います。やってみて、「これは他大学と組んだ方がいいよ」という例と、逆に「これはちょっとまずかった、実は失敗した」という話が聞ければいいなと思います。何かありましたか。

（曾根） 関東は交通機関が便利で、地の利がいいので、神奈川、東京圏内の大学であれば電車に乗ってある程度集まります。なぜ大学間の連合でやりたかったかというのは、自分の大学だけでサミットの内容を考えると、やはり自分の大学の課題など自分の大学が主眼になってしまいます。でも、サミットはいろいろな大学が規模の大小を問わず参加してくるので、内容にいろいろな大学の人が関わってくれることで全体的な視野に立った内容になるのではないかと思います。

学生実行委員だけではなく教職員応援隊もお願いしたのも、学生がもちろん中心だけでも、先ほど山下君から三者が一緒になって推し進める FD という言葉がありましたが、私もそのとおりで、教員・職員・学生三者の意見を盛り込みつつ考えたいということがありました。内容的には他大学の皆さんと一緒にやったことで、非常に充実した内容になったと思うし、一大学だけでできないこともみんなで力を合わせればできることもあると思うところはすごく重要な点だと思います。自分自身の視野を広げるきっかけにもなると思い

ます。ただ、正直かなりしんどかったです。大学が違うので簡単に集まることもできないし、離脱してしまう学生も中にはいて、みんなをまとめるという点では、大学が違うとキャンパスで気軽に会うことができないので、それは大変だったと思います。それでも最後まで一緒にやってくれた学生実行委員の皆さんと教職員応援隊の皆さんには心から感謝しています。

(山下) ありがとうございます。

4. 参加者からの質問

(山下) では、早速質問事項を聞きたいと思いますので、登壇者の方は会場に散っていただいて、今から皆さんからの質問時間を設けます。10分ぐらいしかないのですが、この貴重な時間をぜひ使っていただければと思います。では、「質問ある方？」と言ったら、みんな「はい」と手を挙げてくれますよね。大丈夫？ 練習する？ 練習いる？ いない？ 大丈夫？ ではやってみましょうか。それでは、質問のある方挙手をお願いします。

(質問者 A) 山下さんに質問してもよろしいでしょうか。毎回 FD サミットなどに参加して、そこで学んだことや得られるものが結構あると思うのですが、実際生活している中で、FD サミットなどで、「こういうことが学べたな」と感じるのはいつですか。

(山下) 学生 FD サミットに参加してみて、学んだことを生活にどう生かせるかということですか。



(質問者 A) そうです。

(山下) ありがとうございます。学んだことをどう生かせるかということと言うと、僕は高橋さんと同じで、友達ができるということは確かにあります。友達ができただけの結果どうなったかと言うと、一つは仕事になりました。山口大学に呼んでいただいたのは、あそこの林先生という山口大学の先生に「ちょっと来なよ」と声をかけていただいたからです。学生 FD サミットなどいろいろなところのご縁で頂いたきっかけかなと思います。他にもここにいらっしゃる先生方にはだいぶお世話になっていて、いろいろなものを食べさせていただいた思い出があります。先生方ありがとうございます。このあたりの肉には皆さんの血と汗と涙が詰まっています。

他にも、今仕事で気になっているのは、例えば AI が最近人気ですよ。ここには人工知能の研究をしている先生や、眼鏡の変調、色が変わる研究をしている先生、地理学の先生、環境学の先生など、実はわれわれが知らないだけですごいプロフェッショナルがいるわけ

です。僕らがインターネットでググるよりも圧倒的な知識量を持っていて話をしてくれるので、そういった意味での生活とか仕事に結び付いているというのはどちらかというところだと思います。ということでよろしいでしょうか。

(質問者 A) ありがとうございます。

(山下) ありがとうございます。続いての質問です。

(質問者 B) 平野さんに質問です。私は本学の授業の一環として、学生と授業をつくるということをやっています。これがゼロからつくるものなのですが、平野さんもゼロからFDをつくられたということで、先輩として、ゼロからつくり上げる上で心がけていることや、大変だったことをお聞きしたいです。



(平野) サミットをゼロからつくるということですが、多分最初に考えた人間はすごく熱い思いを持っていると思います。でも、いろいろな人、例えば今授業ということでしたが、授業もいろいろな人が履修しないといけなし、当然先生も担当していただくことになると思いますが、最初に考えた人間の思いはもちろん重要ですけれども、一歩引いて見てみると、決して常に完璧なわけではないし、いろいろな人の意見もあるので、丸くなると言う印象は良くないのかもしれませんが、その思いと実現可能性とそれをみんなに受け入れてもらえるかというところのバランスを取るということは本当に学びました。そういう調整能力は、先ほどの山下さん宛ての質問みたいですが、大学で仕事するときに生きてくる部分もあるので、やはり自分の思いを大切にすることと、他の人が見て、参加したときにどうなるかのバランスを取ることかなと思います。

(質問者 B) ありがとうございます。

(山下) では、続いての質問です。

(質問者 C) 先ほど2人で話したときに共通して気になっていたことがありました。曽根さんに質問なのですが、教職員との連携をされていたとのことですが、実際われわれが活動している際に、自分たちがやりたいことを伝えても、教職員に理解されないということがありますが、教職員との連携の取り方で何か参考になる点を教えていただけたらと思います。

(曽根) 難しい質問をありがとうございます。確かに皆さん学生の立場で、こういう企画をやりたいと言っても、予算や場所などいろいろな資源が必要だと思います。私自身も

そういう経験をしてきて、そういう悩みを抱えている人は多いと思います。ただ、教職員も忙しいからという面もあると思いますので、できるだけ分かりやすく伝える工夫として、何のためにやるのか、何でやりたいのかをはっきりさせることがすごく重要だと思います。ただこれをやりたいと言っても、何のためにというその目的と何をやりたいのかが見えないとかなり大変だと思います。何でそれをやって、それによって何をを目指すのかを伝えることはかなり重要だと思います。そこをきちんと伝えることは重点を置いてやってきました。企画書・提案書をきちんとつくることです。私がフォーマットをつくったのですが、企画書・提案書をつくって、「これだけ考えているんだよ」と、一過性のものではなくて、こういう目的を持ってやりたいのだと伝えるための工夫は必要だと思います。また、コミュニケーションといっても、やはりフード・アンド・ドリンクのコミュニケーションを通してお互いのことを知ることもあると思うので、折に触れてそういうコミュニケーションも必要だと思います。

(質問者 C) ありがとうございます。

(山下) さあ、続いての質問に移りましょう。あれだね、走るのもつらいですね。行きましょう。

(質問者 D) 山下さんにお伺いしたいのですが、サミットで、教職学の連携で、職員特化のプログラムを行ったと聞きました。文科省、企業の人を呼んで、大学に対してのぶっちゃけ話を聞くというプログラムがあったと思います。また、高校生も呼ばれたということで、大学の中に社会人とその下の高校生をまとめて呼んで、さらに大学の横にあるというか、また別の軸にある文科省の人も呼んで議論したということでした。大学の前の段階にいる高校生が、それを見て、大学ではこういう学びをしようと感じることで、結果として大学の学びが良くなるのだと理解しました。いろいろ混ぜて良かったこと、いろいろ混ぜたことの意義をどう思っていますか。

(山下) ありがとうございます。今話していただいたことが、実は答えだと思っています。高校生を呼んだのも、結果的に来てくれただけで、あえて高校生を呼びに行ったわけではないのです。追手門学院大学は、認定こども園から幼稚園から大学院まであります。高校は附属で、敷地内で横にあったので、たまたま知っている子に「来てみない？」と言ったら、「行きます」ということでした。多分何をやるか分からないのに来てくれたのです。結果的に良かったのが、先ほど言ってもらったように、大学に何を期待しているのかを高校生の声で聞けたことです。これはすごく大事です。僕らもそうだけれども、大学に何を期待しているかという、「大学ってこんなもんだよね」と、ここに1年生が来ていても、1年間大学で学んだ後に「大学ってどうだったっけ？」と期待感実はもう下がっているのではないかと思います。こういった統計や調査もあります。

それを高校生の目から見て、一体本当に大学に何を求めているのか、本当に就職なのか、本当に専門なのかを高校生から聞けたのが良かったです。逆に社会人から、実はこういうことを思っているという話を聞けたのも良かったと思います。だから、別にあえて多様な

ことをつくろうとしたというよりも、結果的に多様になって、多様になったところから気付いたことがあった、他にもいっぱいありますけれども、それは本を差し上げますので、また読んでください。ありがとうございます。

(質問者 D) ぜひ読ませていただきます。ありがとうございます。

(山下) では、続いての質問です。

(質問者 E) 先ほど、曾根さんと高橋さんの話の中で、サミットの大学への貢献という話と、サミットからのお土産という話がありました。どのようなお土産を持って帰ってほしいと思ってサミットを開かれているのかということと、今日、明日のサミットが終わって、自分たちが大学に帰って大学に貢献するためには、どういうアクションを起こしていけばいいのかを伺いたいです。



(高橋) では、私から。先ほどスライドは一瞬しか出せなかったのですが、FD タイムカプセルというものを岡山大学のサミットではやりました。いつからいつの時期にこういうことをやるということを今来ている大学のメンバーと話し合ってまとめて、ただ言い合うだけではなくて、きちんと文字に落とすということをしました。それが岡山大学のサミットのお土産になると思います。それと同じような話になりますが、いろいろ話してまとめてということをこれからグループでやりますよね。それをもう一回振り返って、「こういうことをやりたい」というのを頭に思うだけでなく、きちんと文字に書くということがまず大事だと思います。各大学でやっているところもあると思いますが、ぜひ報告会などをして、「こういうことを学んだ」ということを周りに広めていってもらったらきっかけになるのではないかと思います。

(曾根) ありがとうございます。お土産づくりを意識したという話ですが、高橋さんが言ったように、参加して楽しかっただけで終わらない、自分の大学にそれを持ち帰ってどう活動に生かすかが学生 FD サミットの目的だと思います。どういうお土産かということ、それぞれ皆さんの活動が違えばらばだと思いますが、まずは自分で何を聞きたいか、どういう情報を得たいのかを考えておくことが重要だと思います。お土産としては、聞いたことを、「ここは自分の大学の活動に生かせそうだな」「ここは自分たちの中に取り入れられそうだな」と、きちんと終わった後に整理する。そういう意味で、高橋さんが言ったように文字化して報告会のようなものを行う。報告会を教職員や他の学生に向けて行くと、教職員も理解して、「この学生たちはこのサミットに参加してこういうことを得たんだ。じゃあ、もうちょっと次も何とかできるように応援しようか」ということになってきます。しっかりフィードバックすることが大事だと思います。ぜひそれを意識されて、この2日

間参加されるとよいのではないかと個人的に思っています。

(質問者 E) ありがとうございました。

(山下) 高橋さん、曾根さん、どなたか。挙手をお願いします。

(質問者 F) 皆さんに聞きたいのですが、4名の方は今職員をされていますね。そして、学生の頃から学生 FD、教育に関わり、良くしようと活動をされてきました。僕は今の大学しか知らないの、昔のことは分からないのであえて聞きます。結局何ができましたか。学生 FD をやって何が変わったのかを聞きたいと思いました。

(高橋) それは大学がですか、それとも自分がですか。

(質問者 F) 大学がです。

(高橋) 自分がいた所属大学についてですか。

(質問者 F) そうですね。昔に比べて、今の大学でもいいのですが、学生 FD をやる中で何が変わったのかがすごく気になっています。

(高橋) ぱっぱと答えるので、1人5秒ずつで自分もしくは大学でいいですか。

(質問者 F) はい。

(高橋) 私から答えます。私自身は、今さらこんなことを言うのもあれなのですが、岡山大学に別に入りたいわけではなかったのです。でも、学生 FD 活動をする中で、岡山大学のことをたくさん知ることができて大学を好きになりました。

(平野) 私は「勉強しようと思えばどんどん勉強できる」という環境が好きで、学生に対してそういう環境を提供したい、そういう環境をつくりたいと思うようになりました。



(曾根) 私は今横浜国立大学にいますけれども、高校生の時入試で横浜国立大学に落ちて東洋大学に仕方なく行って、今は横浜国立大学の教員をやっています。私も学生 FD 活動で大学を好きになりました。大きな変化ではなく少しずつなのだけでも、FD 活動を通して学生の声を活かしていこうという形は少しずつ生まれてきたのではないかと思います。

います。それだけでも大きな成果だと個人的には思っています。

(山下) 後輩の手厳しい質問ですね。うちは成果を挙げろという、具体的な数字はすみません、挙げられません。ただし、学生参画の機運をつくったというのは教職員の中では共有できたかなと思います。僕は2009年に入学して学生FDサミットを立ち上げて、今もこうやって後輩たちが続いてくれていて、手前みそで恐縮ですが、学生参画の機運はつくれたかなと思っています。

(司会) ラストの質問です。

(質問者 G) 皆さんにお聞きしたいのですが、意識改革とはどういうものを目指しているのでしょうか。意識改革といってもいろいろあると思います。例えば、普通の大学生活を送るだけでなく、将来を見据えてどういう学びをするのかとか、意識改革の内容がゴールとしてあるのかなのか、あるのだったらどういうものなのかを聞きたいです。

(曾根) ゴールというか、どういうふうに答えればいいのか難しいですけども、意識改革を目指そうと言ったのは、それぞれが意識改革をしないとイケない。例えば、学生だったら受け身の学びから主体的な学びへというのがまず一つあると思います。それが目標でした。教職員も学生と関わることで、一緒に学生と頑張っていこうというような意識に持っていくという形で、意識を高めていこうということはねらいとしてきました。それをどういうふうにできたかを測るためにアンケートのようなものを最後に行ってまとめています。そういう形での意識改革、変化を目指したところはありません。

(平野) 意識というところで言うと、私の考えとしては、大学というのは答えがないし、私が在学していた立命館大学にしても今いる法政大学にしても、何万人といるので、「みんながこの意識にしよう」なんてことは無理ですし、それだけの人数が一気に変わっても気持ち悪いです。みんながそれぞれ自分の目指したい方向に向けて、目指せる大学、考えられる大学ということがあると思います。努力のリミットを決めないというか、特に学生にとってはやればやるだけできるという場所なので、学生として「これをこうしたい」「こうすることを勉強したい」と思ったらとことんやれる環境づくりを教職員がやるべきだと思います。キャリアセンターに今いるので、それっぽいことを言いますが、自分の学生生活はこれなんだ」というものを何か一つ持って卒業できれば、もちろん自分にとってもプラスですし、その先のキャリアについても大学が学生に対して果たせる役割としては大きいと思います。学生として、とことん「学生をやる」ということになるのではないかと考えています。

(高橋) 逆に質問なのですが、「あなたのことを意識改革します」と言われたら、どう思いますか。嫌だと思わないですか。私はその言葉がすごく嫌いで、「意識改革します」と言われても、「勝手にして」となります。だから私は別に目指したことはないです。ただ、大学はいろいろなことができるので、そのいろいろなことの中の一つが私の場合は学生FD

だったわけです。そんな感じで学生 FD をやっていない学生も部活であったり勉強であったりサークルであったり、いろいろなことがあると思うので、その中から、先ほど平野さんがおっしゃったことにもつながるかもしれないですけども、熱中できるものが見つかればいいと思います。だから、選択肢が増えることを環境として整えていくべきかと思います。

(山下) 意識には二つ、有意識と無意識があると思います。意識していることで言うと、僕も高橋さんと同じで、まず意識なんて変えられると思っていません。思っていないけれども、「単位、何かだりいな」「授業出るのだりいな」「何か授業つまんねえぜ」というのは結構よく聞く話です。あれは有意識として、今みんなが顕在化してくれている話です。一方で、大学に来て何か学びたいと思っているけれども、その話はなかなかしなくて、「結局自分は何のために大学に入ったんだっけ」ということを3年生ぐらいのときに気付きましたと。何が言いたいかというと、意識というのは自分が今認識しているものと認識していないものがあって、認識していないものに、何かもっと大学を良くしたいとか、何かこうなったらいいよねといった思いや希望があるはずなのです。そこを僕らはただつなぎたかったというだけです。僕が学生時代に、「あの先生、どうやったらクビにしてやれるか」と考えたドロドロしたところから始まったわけです。結論から言うと、先生もかわいそうだと思ったときがあったのです。というのも、「先生、これやってください」と別に専門でもないけれども、取りあえずやれと言われて、教壇に立てば教科書を読むしかない。先生にもそういった不幸があって、職員も嫌々やっているわけではなくて、「本当はこういうことをしたい」「3年のキャリアの中で変えないといけない」という人たちがいます。だから、それをつないでいってつないでいって、大学が良くなったらいいよねというのが僕のしたかったことで、別に意識を変えようとは思ってはいませんということです。しゃべり過ぎてしまいましたが、質問ありがとうございました。

すみません、せっかく手を挙げていただいたのに、皆さんのことを当てることができていません。しかし、サミットはここで終わりではありません。この後、昼食会の後に情報交換会があると思います。私と曽根さんは明日までいます。高橋さんは情報交換会に少しだけ出ます。平野さんはこの後お仕事で帰ります。ということで、昼食後の情報交換会でまず聞いてください。もしここでつなげられなかったら、先ほど友達になれると言っていましたよね。僕たちの時代は Facebook が立ち上がったくらいで、珍しかったと思いますが、今は Facebook グループなどがあるそうなので、ここに名前が出ていると思います。この人たちに何か聞いてみたいということがあれば、情報交換会でも Facebook でも何でも聞いてみてください。名刺を持っていなくても「名刺を下さい」と言えば、多分くれる人たちです。くれるはずです。ですので、そういうことを聞いてもらえればいいと思います。せっかく質疑応答で手を挙げていただいた皆さん、失礼しました。そういったことで、許してください。よろしくお願いします。

最後に、学生 FD サミットに対する理念や可能性、学生へのエールみたいなものを話していただいて、このセッションを締めたいと思います。平野さん、よろしくお願いします。

(平野) 学生の皆さん、今日聞いて、もしかしたら難しいと思ったかもしれませんが、

難しく考えなくていいです。学生の皆さんにとっては、存分に勉強して、存分に遊んで、学生時代を存分に使って、大学を学費以上に使い倒せばいい話なのです。そうやって自分の大学生活は本当に楽しかったです。私も本当に大学生活は楽しかったのですけれども、別にやり残したことがないので戻りたいとも思わないという状態です。そうなったら、今後将来長く考えると非常に幸せだと思います。そのスタートが、大学時代をどれだけ主体的に存分に遊べるか、遊ぶというのはもちろん勉強も含めて遊ぶということですが、ということだと思います。まあ、楽しんでいきましょう。サミットも楽しい場にしましょう。私はこの後すぐ帰るように言われましたが、5 時半までいますので、気軽につかまえてもらえればいいと思います。ありがとうございます。

（高橋） こちらがが一つとしゃべるようになってしまったので、いろいろな思いがあると思いますが、私は特にその中の違和感を大切にしてほしいと思っています。私たちがやったことが別に正解ではなくて、皆さんがいろいろ考えていることをこれからどんどん活動で生かして行ってほしいです。サミットの中でも「それ、いいじゃん」だけではなくて、「それは違うと思う」ということもたくさんあると思います。私たちのときは、喧嘩みたいな議論もお昼までやっていたので、そういうのもありかなと私は思っています。

（曾根） 本日はこのような機会を頂いてありがとうございました。私が言いたいのは二つです。簡単に言います。この活動をぜひ学生の皆さんに楽しんでほしいということです。楽しくないと続かないし、楽しいだけでもいけないけれども、楽しみながらやるという形で、笑いも入れながら、ぜひ楽しんでいただきたいと思います。それと、最後まで諦めない、めげないということです。途中で逃げ出したり、嫌になったりすることもあると思いますが、ちゃんと頑張っていた先に自分の違った成長もあるし、新たなおもしろさや発見も生まれてくると思います。学生 FD 活動は教職員と自分の学びを良くできるという、すごく意義のある活動だと思っています。自分自身の学生 FD 活動に対する意義や意味をよく考えて、今後も活動を頑張してほしいと思います。特に関東圏の皆さんには期待していますので、よろしくお願いします。ありがとうございました。

（山下） 私からは「ないものはない」という言葉を贈りたいと思います。「ないものはない」は島根県海士町の町のスローガンです。「ないものはない」ってどういうこと？ 何でもあるの？ そう思う人もいるかもしれません。でも、海士町の「ないものはない」という言葉は、「余分なもの、余計なものはないでもいい」ということです。もう一つ、「ここにはないものはないのですよ」というメッセージだと聞いています。

サミットに来たら何でもあるのか、みんなが求めているものがあるのかどうか、僕たちは約束できません。僕たちがずっと感じていたことは、自分ならどうするかということです。「ないから諦めよう」と言って諦めることはできます。「サミットに出て楽しかった。じゃあ、学生 FD やめよう」、それも皆さんの選択肢かもしれません。でも、今できないことがもしかしたら他大学でできているかもしれないし、自分だったらできるかもしれません。ここに出た学生 FD の先輩方が言っていたことは、先輩の失敗談ですよ。先ほど僕の後輩が質問したように、「何か成果を残せましたか？」と言われると、まだ胸を張って言え

ることはありません。でも、それは僕らがたかだか3～4年取り組んだごく一部の話です。そして、皆さんは今これから始めようとしています。そして、今取り組んでいる真っ最中です。そもそも比べるといったものではありません。今から皆さんが「ないものはない」で何かつくり出していただけることを先輩方は頑張って応援します。

ということで、皆さんが大学の枠を超えて自分たちは何ができるかということを考えていただく時間になればと思いました。ということで、学生FD第一世代トークはこちらで終わりたいと思います。ありがとうございました。

VI. 事業成果報告



山口大学

YAMAGUCHI UNIVERSITY

国立大学法人 山口大学 大学教育再生加速プログラム

「学びの好循環」を目指す山口大学AP事業の軌跡

山口大学 大学教育機構 大学教育センター(YU-AP推進室) 林 透・篠田 雅人

Yamaguchi University, Acceleration Program for University Education Rebuilding



AP事業を通じた総合的教育改革

学びの好循環

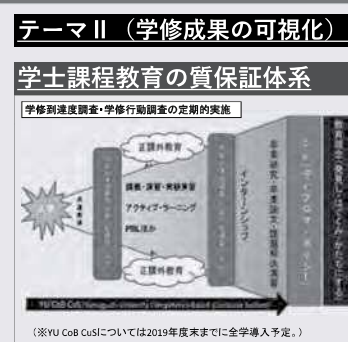


ALポイント認定制度の推進



テーマⅡ (学修成果の可視化)

学士課程教育の質保証体系



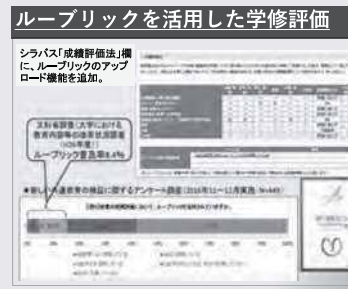
AL型授業設計等に関するFD



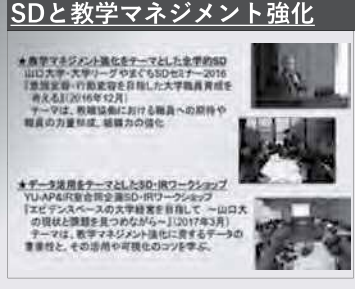
AL型授業を学士課程教育に展開



ループリックを活用した学修評価



SDと教学マネジメント強化

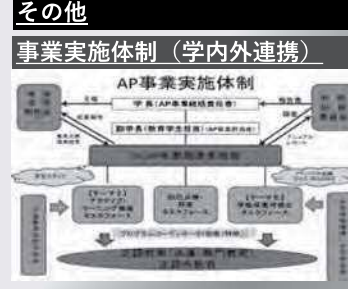


ALベストティーチャー表彰制度



その他

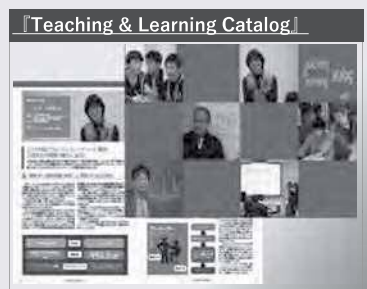
事業実施体制 (学内外連携)



教職協働による組織開発OD



「Teaching & Learning Catalog」



広報資料

『YU-AP News Vol.1~3』(2014年度~)

『YU-AP年次レポート』(2014年度~)

『ALポイント認定制度マニュアル(教員編・学生編)』(2014年度)

『ループリックハンドブック』(2015年度)

『Teaching & Learning Catalog』(2016年度~)

2. 大学教育学会 2017 年度課題研究集会ポスターセッション

アクティブ・ラーニングの推進を通じた組織変容に関する考察 ～ALベストティーチャー表彰制度と『Teaching & Learning Catalog』を中心に～



○林 透¹・○篠田 雅人¹・斎藤 有吾²
(¹山口大学, ²京都大学)



山口大学におけるAL推進

山口大学では、2014年度に採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム(AP)を契機に、学士課程教育におけるアクティブ・ラーニング(AL)の充実を進めてきた。

その取組の中心は、①シラバスにおける学修行動の可視化を通じたALポイント認定制度の全学導入、②FDコーディネータの形成を通じた教育改善・充実、③教員にインセンティブを与えるALベストティーチャー表彰制度の設計であり、2016年度までにその環境を整えた。

本発表では、ALポイント認定制度の導入と、そこから得られる指標の経年変化を示しながら、その変容を考察する。また、ALポイントを活用したAP事業の取組を紹介し、どのような組織変容が期待できるかを論じたい。



AL推進に関する指標

山口大学では、シラバスに当該授業科目におけるALの度合を明記したALポイント認定制度を2015年度から導入し、ALポイント入力を基礎にして、学士課程教育におけるALに関する指標を算出できる環境を整備している。

主な指標の経年変化は下表のとおりである。2015年度から導入したALポイント認定制度を通して、学士課程教育全体でのAL型科目の拡充が順調に進み、2017年度(速報値)で72.4%に達し、70.0%を超える状況にあるほか、より多くの教員がAL型授業に携わり、かつ、より多くの学生がALに関わるようになってきていることが分かる。



指標	2014年度	2015年度	2016年度
AL型授業科目担当専任教員率	35.8%	73.1%	76.2%
学生1人当たりAL型授業受講科目数	2.4科目	10.8科目	13.5科目
学生1人当たりのAL型授業科目に関する授業外学習時間(1週間当たり)	1.69時間	7.19時間	9.10時間

ALベストティーチャー表彰制度

【表彰制度の仕組み】

AP事業の取組では、ALポイント入力率などをただ向上させることを目的とするのではなく、ALを取り入れた実質的な教育・学修環境を組織文化として定着させることが肝要である。

そのために、各授業におけるALポイントというALの度合の指標と、学生授業評価(授業満足度・理解度・達成度)、授業外学修時間、成績評価分布といった指標を組み合わせて、優れたAL型授業を実施している教員を表彰する「ALベストティーチャー表彰制度」を実施している。



【審査対象の具体】

「ALポイント」、「学生授業評価の3要素(授業満足度・理解度・達成度)」、「授業外学修時間」が以下の6区分ごとに、共通教育科目全体の平均値以上かつ同一科目の平均値以上である科目が審査対象となる。

共通教育科目の区分	審査対象	審査対象科目	科目数
①基礎・基盤	2016年度	40	40
②基礎・基盤	2017年度	21	43
③基礎・基盤	2018年度	11	37
④基礎・基盤	2019年度	7	42
⑤基礎・基盤	2020年度	11	38
⑥基礎・基盤	2021年度	12	43
⑦基礎・基盤	2022年度	13	37
⑧基礎・基盤	2023年度	11	21
⑨基礎・基盤	2024年度	20	20
⑩基礎・基盤	2025年度	47	234
⑪基礎・基盤	2026年度	5	46
⑫基礎・基盤	2027年度	9	44
⑬基礎・基盤	2028年度	112	200
⑭基礎・基盤	2029年度	118	200

ALベストティーチャー受賞者

2016年度には第1回受賞者として5科目・10名の教員、2017年度には第2回受賞者として5科目・14名の教員の受賞が決定した。

【2016年度ALベストティーチャー】

区分	授業科目名	所属・職名	氏名
①基礎・基盤	人間文化基礎と応用	国際文化学部 准教授	大野 真実
②基礎・基盤	基礎化学I	基礎化学部 准教授	大野 真実
③基礎・基盤	基礎化学II	基礎化学部 准教授	大野 真実
④基礎・基盤	基礎化学III	基礎化学部 准教授	大野 真実
⑤基礎・基盤	基礎化学IV	基礎化学部 准教授	大野 真実

【2017年度ALベストティーチャー】

区分	授業科目名	所属・職名	氏名
①基礎・基盤	人間文化基礎と応用	国際文化学部 准教授	大野 真実
②基礎・基盤	基礎化学I	基礎化学部 准教授	大野 真実
③基礎・基盤	基礎化学II	基礎化学部 准教授	大野 真実
④基礎・基盤	基礎化学III	基礎化学部 准教授	大野 真実
⑤基礎・基盤	基礎化学IV	基礎化学部 准教授	大野 真実

AL推進を通じた組織変容の機能

ALベストティーチャー表彰制度には、以下の二つの機能があり、【学長表彰】『Teaching & Learning Catalog創刊』『模擬授業型ワークショップ企画』を通して、AL推進を通じた組織変容を促している。

(1)優れたAL型授業を実施している教員個人を評価し、インセンティブを与えること。
(2)学内構成員に波及させることで、新しい組織文化を創り上げること。

【学長表彰】

学長表彰を通して、受賞した教員個人を讃え、インセンティブを与えている。なお、2016年度YU-AP事業の外部評価での指摘(大学構成員により知ってもらう方式での表彰への改善)を受けて、2017年度には部局長会議の場を利用して表彰する。



【Teaching & Learning Catalog】

ALベストティーチャー及びアクティブ・ラーナー学生を対象とした教育・学修実践集『Teaching & Learning Catalog』を創刊し、教職員研修会や学部1年生必修科目「知の広場」での配布・説明を行い、ALのグッドプラクティスを周知・共有に努めている。また、AL型授業の教育効果測定に関連し、学生の「深い学び」との関わりを探究するエビデンスとして活用する。



【模擬授業型ワークショップ】

本年9月、ALベストティーチャーによる模擬授業型ワークショップを初開催し、AL型授業のコツや注意点を体得する機会を提供した。学内外から52名の参加者があり、後半の全体協議では、若手教員や高校教員から実践のための具体的な質問が数多くあった。参加者からは「学習者の興味を呼び起こす」ための教員の関わり方、「真の学び」に結び付ける授業設計、配布資料の創意工夫など、AL型授業に活かす気づきを得たとの感想が多く寄せられた。



参考文献

- [1]山口大学YU-AP推進室(2017)『山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)アニュアルレポート2016』
- [2]山口大学YU-AP推進室(2017)『Teaching & Learning Catalog Vol.1』

3. 宇都宮大学・AP事業中間シンポジウム基調講演

2017.12.12
宇都宮大学 AP事業・中間シンポジウム 基調講演

教職学協働を通じた ラーニング・コミュニティの形成と成果

山口大学 大学教育機構
大学教育センター准教授
林

本日のメニュー

- はじめに
- 山口大学・大学教育再生加速プログラムの
目的・成果・波及効果
- アイスブレーキング
「みんな誰でも、いつでも学習者！」
- 山口大学版・教職学協働の経緯と成果
「実践知を通した4つのポイント！」
- おわりに

山口大学のProfile(1)

- **教育研究組織** (9学部、8研究科、1研究所、3機構)
 - **学生数** 8,702名 (学部)、1,478名 (大学院)
 - **教員数** 986名
 - **職員数** 409名 (医療系を除く)
- 【以上、2017年5月1日現在】
- 

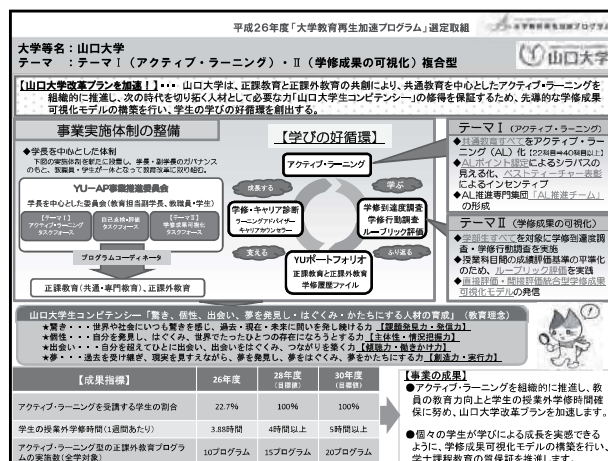


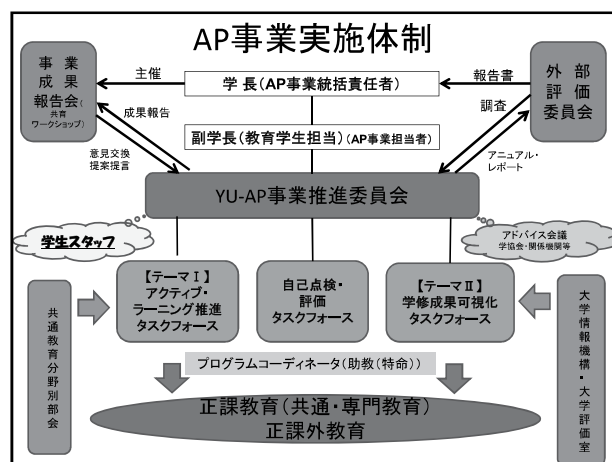
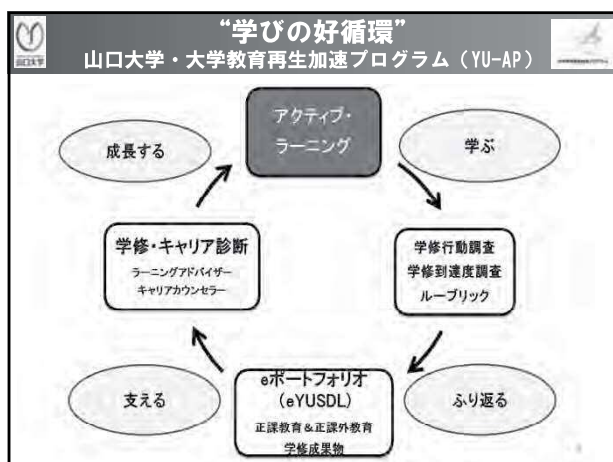
- ・教育理念
「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」
- ・マスコットキャラクター “ヤマミィ” 

山口大学のProfile(2)

- ・ 教員のFD研修参加率 88.2%[2015年度]
- ・ 退学率 1.3%[2016年度]
- ・ 就職率 93%(うち県内就職28%) [2015年度]
- ・ 学生授業評価実施率 86.6%(共通教育) [2015年度]
- ・ 授業満足度 4.3(5件法) [2016年度]
- ・ 知財教育の全学必修化
- ・ 英語のプレゼメントテストの全学実施
- ・ 正課外教育プログラムの拡充

山口大学・大学教育再生加速プログラムの目的・成果・波及効果





アクティブ・ラーニングの授業設計等に関するFD

★**アクティブ・ラーニングをテーマとしたFD・SDワークショップ**
(1) 第1回FD・SDワークショップ (2016年7月)
PBL (Project-Based Learning) の授業設計のツボを学ぶWS

(2) 第2回FD・SDワークショップ (2016年10月)
サービスラーニングの授業設計と学修評価のポイントを学ぶWS

★**学内全部局での教育改善FD研修会 (2016年度)**
テーマは、3つのポリシー改訂及びYU CoB CuS (Yamaguchi University Competency-Based Curricular System) の導入に向けた意見交換

教学マネジメント強化のためのSD・IR

★**教学マネジメント強化をテーマとした全学的SD**
山口大学・大学リーグやまぐちSDセミナー2016
『意識変容・行動変容を目指した大学職員育成を考える』(2016年12月)
テーマは、教職協働における職員への期待や職員の力量形成、組織力の強化

★**データ活用をテーマとしたSD・IRワークショップ**
YU-AP&IR室合同企画SD・IRワークショップ
『エビデンスベースの大学経営を目指して ～山口大の現状と課題を見つめながら～』(2017年3月)
テーマは、教学マネジメント強化に資するデータの重要性と、その活用や可視化のコツを学ぶ。

教職協働による組織的対話

共育ワークショップ2016 (2016年9月)

学生FDサミット2017春 (2017年3月)

学生FDサミット2017春 (2017年3月)

YU-AP事業成果の他機関への波及効果 (インパクト)

- ALポイント認定制度を通したAL指標をシラバスにて可視化【2014年度整備】
⇒シラバスにてAL指標を可視化する事例が普及
- 探究型授業科目「山口と世界」のコモンルーブリック開発【2014年度整備】(2013年度から関連取組を着手)
⇒AL型授業の組織的ルーブリック開発の一つのモデル
- 教職協働によるAP事業実施 (学生参画型FDの展開)【2014年度整備】(2013年度から関連取組を着手)
⇒AP事業における共通の現象である「学生参画」の参考モデル

[illegible][illegible]

アクティブ・ラーニングの日常化

⇒教授学習活動における「学習者中心主義」
⇒みんなが学習者という視点

一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。

能動的な学習には、書く・話す・発表などの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。

(溝上(2014)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、pp.7)

聴く

書く

話す

発表

「分かったつもり」から「分かった」への学びのメタ認知プロセス 【内化】⇒【外化】⇒【内化】

(成田 秀夫(2016)『アクティブラーニングをどう始めるか』東信堂、pp.5)

『ラーニング・カタログ』 by YC.CAM

<http://www.yuap.oue.yamaguchi-u.ac.jp/blog/cat4/>

【ラーニング・カタログFile No.1】山口大学のデキルを届けたい！日々チャレンジする学生、奥田真也さんに迫る！

スナップ (2016年2月2日 19:42)

はじめまして、YC.CAMのはなです。YC.CAM、初めて知りました。ありがとうございます。YC.CAMは「山」の「デキル」をつくりたい！と、山内の可能性をもっと掘り出し、ひとと交流を促している団体です。

今回はその一環として、山口大学の面白く活動やチャレンジしている学生や先生を毎月紹介します。私自身も「デキル・インベンチャー」です！山口大学が「デキル」に力を入れているように、私も「デキル」を大切にしています。

さて、奥田さんがよくおっしゃる通り、今話題にするのは、このYC.CAMの生みの親である1人の学生です。彼のチャレンジ精神に、注目されるのが楽しみです！



名前：奥田真也さん(21歳)

学部：4年

18

『ラーニング・カタログ』 by YC.CAM

<http://www.yuap.oue.yamaguchi-u.ac.jp/blog/cat4/>

【ラーニング・カタログFile No.2】多方面で活躍するチャレンジャー！井上真嗣さんに迫る！

スナップ (2016年2月22日 11:12)

はじめまして、YC.CAMのはな、真里、優です。

真里さんは、先日、山口大学東校前で、熊本県産の黒豚ポークを販売していたのを記憶しています。今回は、そのポークのイベントのリーダーを務めます！



名前：井上 真嗣さん(21歳、男)

学部：4年

所属：山口大学東校前

専攻：経済学

真里さんは、学生の2月10日山口大学からの友達を呼び、ライブイベントを開催予定です。

そのイベントは、学生が活躍の場とする人にも役を担って決意しています。

19

自分の「学び」を見つめ、 他者の「学び」に学ぼう！

My Learning Catalog!によるミニワーク

- ★「自分に合った学び方とは？」
- ★「記憶に残る自らの学びは？」
- ★「今後、学んでみたいことは？」

- (1)セルフワーク
- (2)グループワーク(シェアリング)

20

山口大学版・教職学協働の経緯と成果 「実践知を通した4つのポイント！」

教職学協働の実践知

【ポイント1】・・・教職学協働の根拠は、
大学の教育理念(組織DNA)

【ポイント2】・・・教職学協働のための場づくり

【ポイント3】・・・教員・職員・学生をつなぐ担い手
(コーディネータ役)

【ポイント4】・・・大学組織をデザインする文脈づくり

21

複雑系組織【大学】を 学生とともにデザインするアプローチ



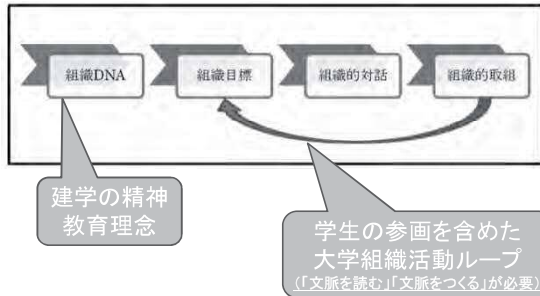
Christensen, Clayton M. & Eyring, Henry J. (2011)
The Innovative University, Changing the DNA of
Higher Education from the Inside Out, Jossey-Bass



香取一昭・大川恒(2011)『ホールシステム・ア
プローチ 1000人以上でもとことん話し合える
方法』日本経済新聞出版社

22

大学における教職学協働の枠組



出典：林透(2017)「『学び』を発見し・はぐくみ・かたちにする大学教育の未来」『ライト・アクティブラーニングのすすめ』ナカニシヤ出版(印刷中)

24

教育理念に基づいた 教職学協働(学生参画型FD)

- 「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」
(現在の山口大の原点は廣中イズムにあり)
(『廣中レポート』を参照した学生参画型FDの潮流)



- 共育(共にはぐくむ)の精神
(前・教育学生担当理事が起草者)
(共育≡共創と解釈)



25

礎としての『廣中レポート』

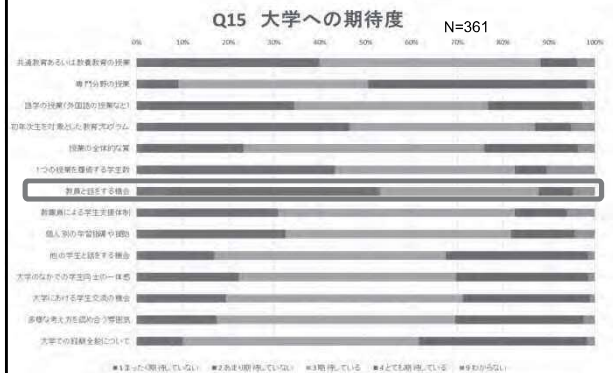
●学生の希望・意見の反映(学生の声Voice) 方法

- 大学として学生からのアンケート調査を行ったり、学生の実態調査を行うことにより、その希望や意見を聴取する方法
- 学生の代表と大学の運営責任者等との懇談会等を実施し、その希望や意見を聴取する方法
- 学生の代表を大学の諸機関に参加させる方法



26

大学生調査(2014年度新入生調査)(抜粋)



27

教職学協働の実践知

【ポイント1】…教職学協働の根拠は、
大学の教育理念(組織DNA)

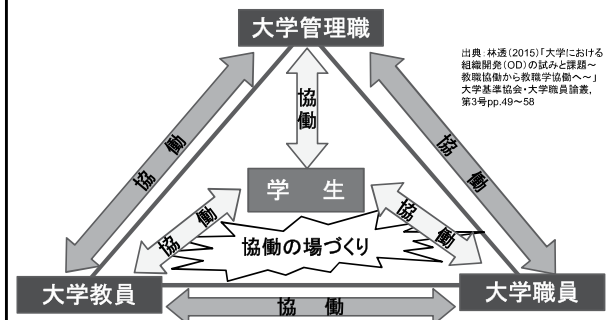
【ポイント2】…教職学協働のための場づくり

【ポイント3】…教員・職員・学生をつなぐ担い手
(コーディネータ役)

【ポイント4】…大学組織をデザインする文脈づくり

28

大学組織における教員・職員・学生 (大学組織デザインの基本フレーム)



出典：林透(2015)「大学における組織開発(OD)の試みと課題～教職協働から教職学協働へ～」大学基準協会・大学職員調査、第3号pp.49～58

29

共育ワークショップという「場」



30

認証評価における 教職学協働の評価

第2サイクル期認証評価 NIAD-UE 大学評価基準B「教育の内部質保証システム」
8-1-② 大学の構成員（学生及び教職員）の意見の聴取が行われており、教育の質の改善・向上に向けて具体的なかつ継続的に適切な形で活かされているか。

【主な優れた点（2014年度受審分）】

◎ 学内の正式な委員会として組織された学生・教職員教育改善専門委員会により、学生が継続的にFD活動に参画する体制を構築している（岡山大）。

◎ 教務委員会の下に各学部の学生代表を構成員とする「学生による教育改善のための協議会」を設け、教育に対して学生たちが議論する場を作り、同協議会の意見を基に、全学FD「学生とともに進める教育改善」で教員との意見交換を行っている（長崎大）。

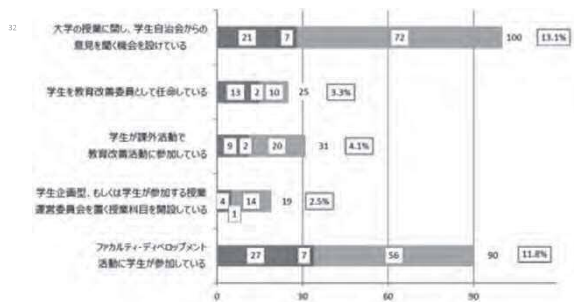
○ 教育改善学生グループを組織し、学生の意見をFD推進活動に取り入れている（横浜国立大）。

【主な優れた点（2015年度受審分）】

◎ 教育（共育）について様々な観点から語り合う教職員・学生参画型の「共育ワークショップ」をOD（Organizational Development）と位置付けて実施している（山口大）。

31

学生の関与を通じた大学教育



出典：文部科学省（2015）「大学における教育内容等の改革状況について（平成25年度）」

32

教職学協働の実践知

【ポイント1】・・・教職学協働の根拠は、
大学の教育理念（組織DNA）

【ポイント2】・・・教職学協働のための場づくり

【ポイント3】・・・教員・職員・学生をつなぐ担い手
（コーディネータ役）

【ポイント4】・・・大学組織をデザインする文脈づくり

33

継続的な教職学協働に欠かせないつなぎ役

「●●協働」「●●連携」では、生活言語（業種・分野）や世代が異なるヒトをつなぐ仕事最大のネック。

適任のつなぎ役（コーディネータ）が不可欠かつ重要！

（参考）学生FDサミット開催校（予定校を含む）における教職学協働の担い手

区分	学生FDサミット開催校（予定校を含む）
教員支援型	立命館大学、追手門学院大学、岡山大学、札幌大学、山口大学、法政大学、京都光華女子短期大学部
職員支援型	東洋大学、京都産業大学、日本大学、金沢星稜大学

34

文科省・大学教育再生加速PG採択を契機に！

●「共育ワークショップ」＝教育活性の場の重視
教育理念共有や学生からの意見聴取の場

●学生スタッフ化の拡充

YC.CAM結成 初期3名⇒メンバー増加

★学生参画型FD支援のためのコーディネータ（教員）の配置

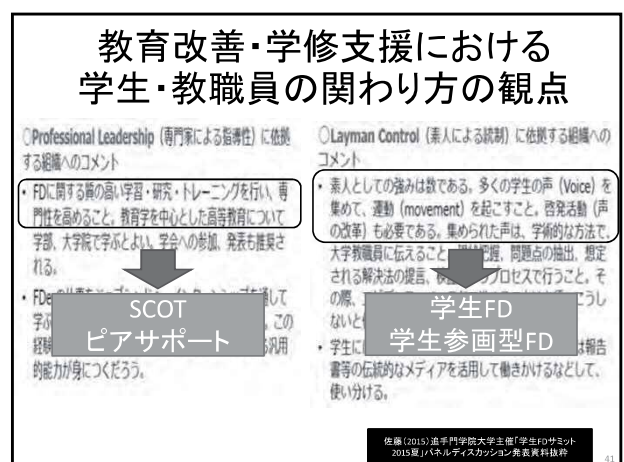
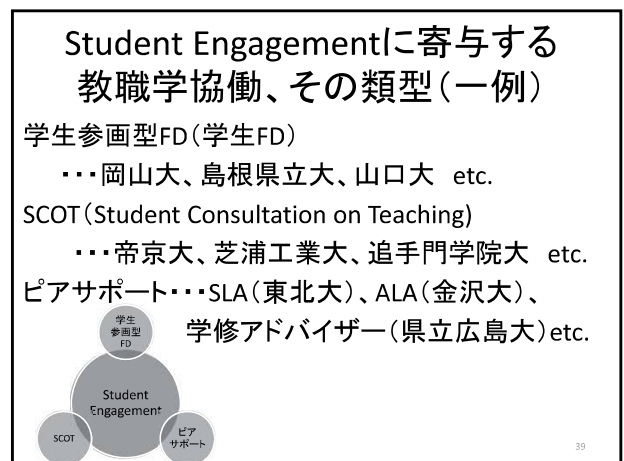


学生とともに作成したルーブリック

YC.CAMの活動を通して育成する汎用的能力のルーブリック

指標	内容	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
コミュニケーション能力	プレゼンテーション・チームワーク・交渉力	自分が選んだ、他者も同意に達する合意形成を目標としたコミュニケーションができる。	他者を説得し、他者も同意に達する合意形成を目標としたコミュニケーションができる。	グループの活動に参加し、どんな立場の人とも話すことができる。意思疎通を図ることができる。	身近な立場の人であれば、意思疎通を図ることができる。
考える力	課題に遇った時、迅速に、適切な判断を下すことができる。また、他人の意見にも耳を傾ける。	課題に遇った時、迅速に、適切な判断を下すことができる。	課題に遇った時、迅速に、適切な判断を下すことができる。	課題に遇った時、迅速に、適切な判断を下すことができる。	課題に遇った時、迅速に、適切な判断を下すことができる。
力/方法性	リーダーシップを発揮し、組織をまとめ、他者の意見にも耳を傾ける。	自分の意見、ビジョンを他人にうまく伝えることができる。また、組織のリーダーシップを発揮できる。	自分の意見、ビジョンを他人にうまく伝えることができる。また、組織のリーダーシップを発揮できる。	自分の意見、ビジョンを他人にうまく伝えることができる。また、組織のリーダーシップを発揮できる。	自分の意見、ビジョンを他人にうまく伝えることができる。また、組織のリーダーシップを発揮できる。
組織運営	活動の進行を把握し、組織の運営を円滑に進めることができる。	活動の進行を把握し、組織の運営を円滑に進めることができる。	活動の進行を把握し、組織の運営を円滑に進めることができる。	活動の進行を把握し、組織の運営を円滑に進めることができる。	活動の進行を把握し、組織の運営を円滑に進めることができる。
記録・評価	活動の内容を記録・整理し、必要な情報を抽出することができる。	活動の内容を記録・整理し、必要な情報を抽出することができる。	活動の内容を記録・整理し、必要な情報を抽出することができる。	活動の内容を記録・整理し、必要な情報を抽出することができる。	活動の内容を記録・整理し、必要な情報を抽出することができる。

出典：山口大学YU-AP推進室(2016)『ルーブリック・ハンドブック』

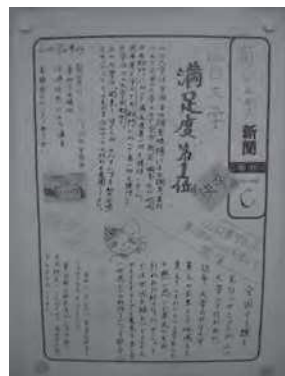


教職学協働の実践知

- 【ポイント1】・・・教職学協働の根拠は、
大学の教育理念（組織DNA）
- 【ポイント2】・・・教職学協働のための場づくり
- 【ポイント3】・・・教員・職員・学生をつなぐ担い手
（コーディネータ役）
- 【ポイント4】・・・大学組織をデザインする文脈づくり

42

共育ワークショップでの提案をカタチに！



43

学生FDサミット2015夏で表彰！

- ・ 学生FDサミット2015夏で優秀アクションプラン
に選出！
- ・ その活躍を学長に報告。



44

学生FDサミット2016春・夏



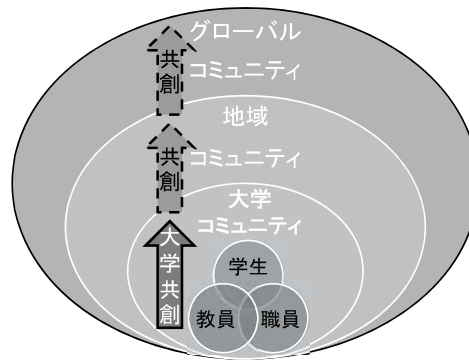
45

学生FDサミット2017春



46

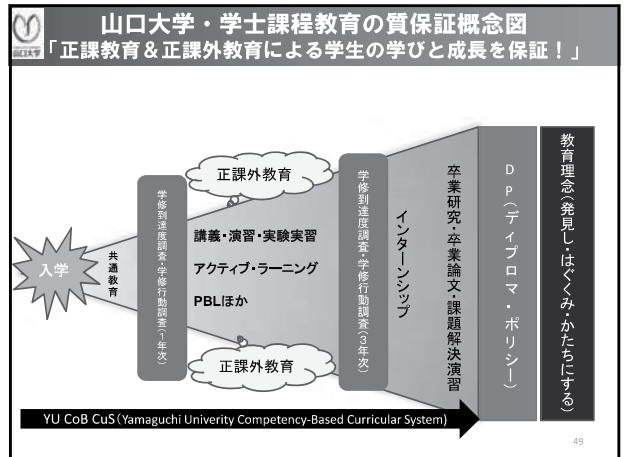
大学共創⇒地域共創⇒グローバル共創



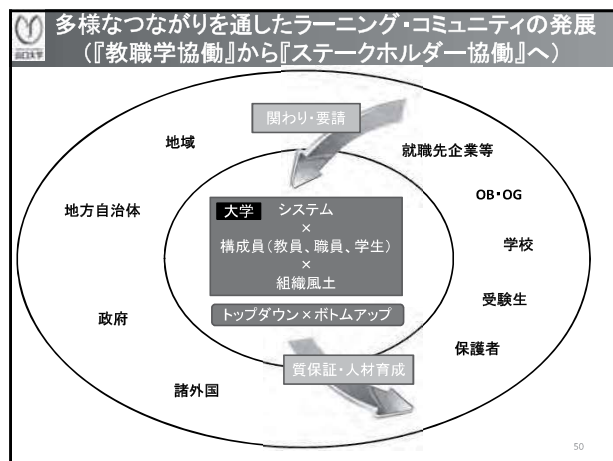
47

おわりに

48



49



50

ご清聴いただきまして
ありがとうございました

「志」つなぎ 伝える
二百年



Contact me : toru-h@yamaguchi-u.ac.jp

4. 宇部工業高等専門学校・徳山工業高等専門学校AP事業合同シンポジウム基調講演

2017.12.25
宇部高専・徳山高専 大学教育再生加速プログラム(AP)
合同シンポジウム 基調講演①

「多様化する教室内外の学び」と 「教育の質保証」

山口大学 大学教育機構

大学教育センター准教授

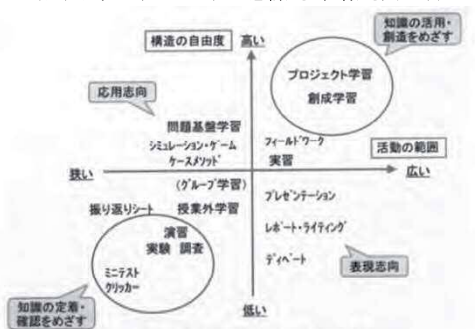
林 透

本日のメニュー

- はじめに
- 山口大学・大学教育再生加速プログラム（AP）
における取組成果
【教室内のアクティブ・ラーニング促進】
- 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業
（COC+）における取組成果
【教室外のアクティブ・ラーニング促進】
- 「教育の質保証」の取組と成果、課題と展望
- おわりに

多様化する教室内外の学び

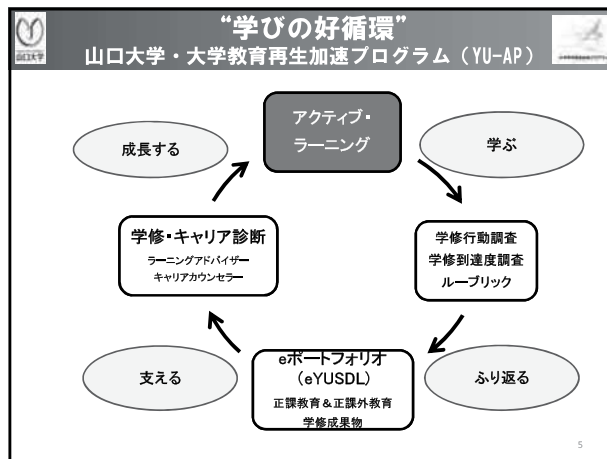
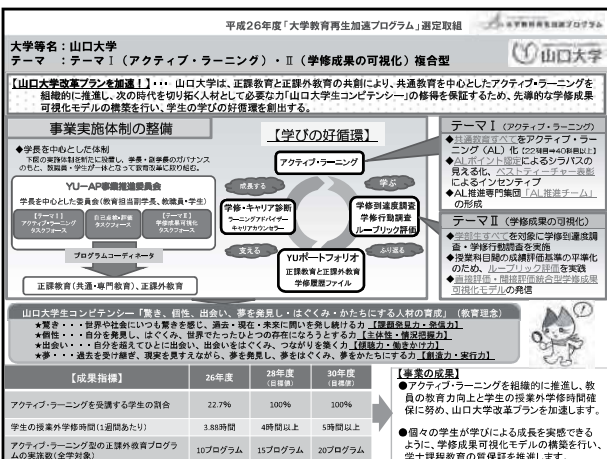
(アクティブ・ラーニングの意識的・組織的広がり)

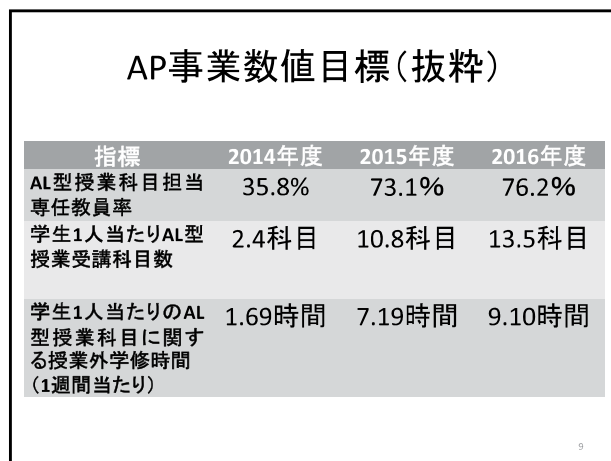
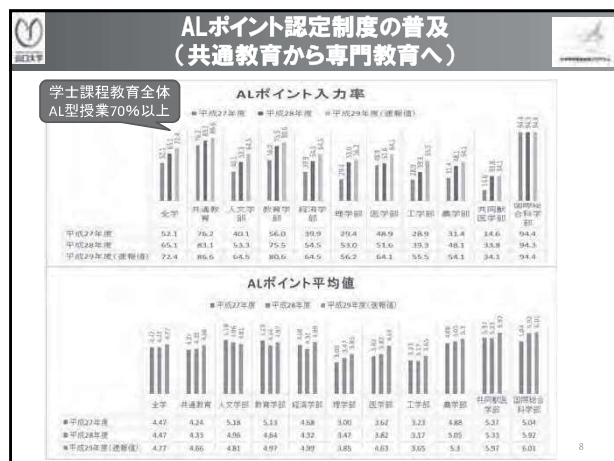


出典：山地弘起，川越明日香（2012）「国内大学におけるアクティブラーニングの組織的実践事例」『長崎大学 大学教育機能開発センター紀要』3, pp.68

山口大学・大学教育再生加速プログラム
(AP)における取組成果

【教室内のアクティブ・ラーニング促進】





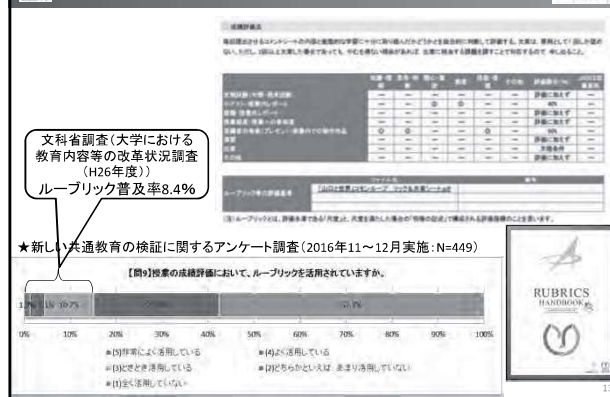
模擬授業型ワークショップ大好評！

2017年9月、ALベストティーチャーによる模擬授業型ワークショップを初開催し、AL型授業のコツや注意点を体得する機会を提供した。学内外から52名の参加者があり、後半の全体協議では、若手教員や高校教員から実践のための具体的な質問が数多くあった。参加者からは「学習者の興味を呼び起こす」ための教員の関わり方、「真の学び」に結び付ける授業設計、配布資料の創意工夫など、AL型授業に活かす気づきを得たとの感想が多く寄せられた。



12

ルーブリックを活用した学修評価の普及



ルーブリック・ワークショップ大好評！

探究型科目における学修評価

形成的評価の重要性



14

高大連携・高大接続

本学AP関係者による講師招へい実績
(本年11月～12月の短期間)

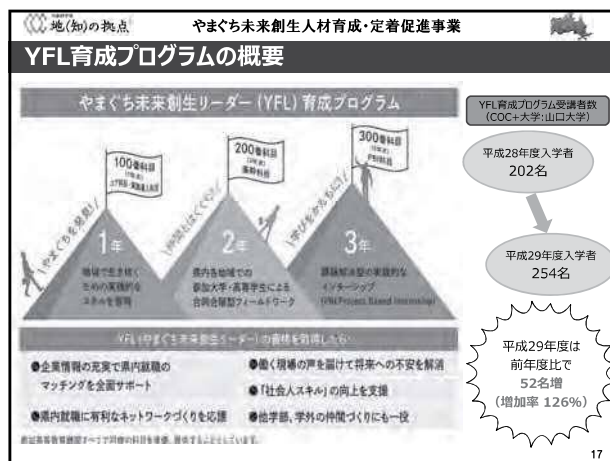
- ・野田学園高等学校(テーマ:AL型授業)
- ・岩国商業高等学校(テーマ:AL型授業)
- ・下関西高等学校(テーマ:ルーブリック)

15

地(知)の拠点大学による 地方創生推進事業(COC+) における取組成果

【教室外のアクティブ・ラーニング促進】

16



地(知)の拠点 やまぐち未来創生人材育成・定着促進事業

YFL育成プログラム（100番科目）【1年次】

“経済と法3”（やまぐちの行政・経済を学ぶ）

山口の経済を知る各界のプロフェッショナルを招き実施し、学生が山口に関する知識を深め、再発見すると同時に様々な業界の方の話を通じて専門分野で身につけたことを社会で発揮することの必要性を感じ取ることを期待する特別講義

※平成29年度の上記講義の講師
 1.山口県知事、2.山口銀行 頭取、3.日本銀行 下関支店長、4.あさり製菓(株) 代表取締役社長、
 5.(株)片岡計測サービス 代表取締役会長（山口経済同友会代表幹事）、6.山口大学副学長（地域連携担当）

科目名	単位	履修年次
キャリアデザイン入門	必修	1年次
やまぐちの行政・経済を学ぶ	必修	1年次
知的財産入門	必修	1年次
山口立世界（やまぐちの歴史・文化を学ぶ）	必修	1年次
サービスラーニング入門	必修	1年次
地域協働型知識創造論	必修	1年次
社会情報入門	必修	1年次

＜学生の声＞
 ・山口の歴史・経済などを学びたい【市内出身者】
 ・YFL育成プログラムを通して山口の魅力をもっと発見したい【市内出身者】
 ・山口県をより魅力ある県にしたい【県外出身者】

山口大学 山口県立大学 徳山大学

12事業協働校間でコンテンツを共有

18

地(知)の拠点 やまぐち未来創生人材育成・定着促進事業

YFL育成プログラム（200番科目）【2年次】

山口県内各地域での合同合宿型フィールドワーク等

県内大学、短期大学、高等専門学校の学生と共に県内施設に合宿など、多様な学びのフィールドで、サービス産業や地域資源の活用、起業について学ぶプログラムであり、本プログラムを通じてイノベーション創出力、協働力、課題発見・解決力を身に付ける

※以下は、地域との交流などの様子

★平成28年度は試行版として6プログラムを実施し、参加者は事業協働校から合計349人が参加した。平成29年度から、200番科目を本格実施（単位化）し、同年度は以下のプログラムを実施予定

開演期（実施日）	YFL科目名	内 容
【前期集中】 8月27日～8月29日	サービスラーニング基礎（やまぐち・まちなかプロジェクト） 【場所：山口県】	山口大学附属の地である山口市（大野地区）におけるフィールドワークワークショップを通して、学生が関わる「まちなかの」について協働し、地域協働型マインドや実践力を養うことを目的としたプログラム
【前期集中】 9月22日～9月24日	サービスラーニング基礎（三好郡大学） 【場所：長門市】	長門市・三好郡地区におけるフィールドワークワークショップを通して、地域住民が抱える課題を学生目線で発見、KJ法により提案を行い、地域協働型マインドや実践力を養うことを目的としたプログラム
【後期集中】 9月29日、10月14日、10月15日、11月23日	アントプレナー基礎（アントプレナー基礎） 【場所：周防大島町】	起業に関する基礎知識を学ぶことを通じて、アントプレナーシップを養うとともに、「起業の島」周防大島で活躍する起業家への取材等により、自らの起業プランづくりに挑むプログラム
【後期集中】 11月18日、11月25日、12月2日、12月16日	アントプレナー基礎（アイデアキャンプ） 【場所：山口市】	企業や団体が抱える課題に対して、社会人とともに課題に対する考え（アイデア）をグループで創出するプログラム

19

地(知)の拠点 やまぐち未来創生人材育成・定着促進事業

YFL育成プログラム（300番科目）【3年次】

就業体験とは違う、地域や企業の課題解決型インターンシップ

地域社会が抱える課題、または企業が直面する課題を自ら発見し、それらを解決する実践的なインターンシップを行い、本インターンシップを通じて、協働力、課題発見・解決力、挑戦・実践力を身に付ける

※事業協働型課題解決型インターンシップ（試行）の様子

★平成28年度は試行版として7プログラムを実施し、参加者は事業協働校から合計67人が参加した。平成30年度からの本格実施（単位化）に向けて、平成29年度は以下のとおりプログラムを試行版として実施

受入先	テーマ	参加学生数（申込者数）
あさり製菓株式会社	お菓子メーカーとコラボ商品開発	19
株式会社西京銀行	「若旅」の企画提案	28
山口産業株式会社	新規出店プロモーション	6
国際貿易株式会社	体験 & 島を舞台にしたプロモーションづくり	14
富士高圧プレキシブルホース株式会社	配管継手の強度計算	2
株式会社アリー	求む、物流を考えるそのイノベーション（業務改善）	3
山口県 健康増進課	若い世代が考える「健康づくり」の提案	8
山口県 選挙管理委員会	山口県知事選の投票率アップ！	8
宇部市 宇部市長期インターンシップ		9
テレビ山口株式会社	学生レポーター	16～20

20

学びをカタチにする

- 第22回アートふる山口（2017年10月8日）
山口市歴史民俗資料館と学生のコラボ
- クリスマスイルミネーション（2017年11月30日）
山口市との連携イベントでの学生企画
- 学都やまぐち・トークライブ
「地域×学生でミライを描こう！」（2018年2月（予定））

21



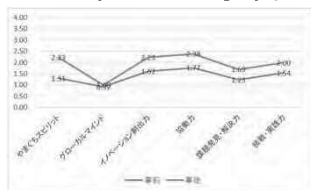
教室外AL型授業の学修評価（プロセス評価＋アウトプット評価）

サービスラーニング基礎（やまぐち・まちなかプロジェクト編）活動日誌（2017.2.11-13）

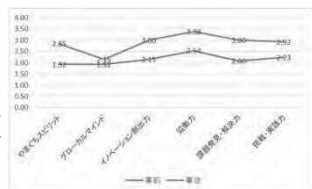
アクションシート（11日）

22

フィールド学習における成長感



「サービスラーニング基礎」(やまぐち・まちなかP.J.) (N=9)
●YFL6つの力に関するルーブリック(4段階)による学生自己評価の変化
「やまぐちスピリット」「協働力」「イノベーション創出力」の意識向上が見られる。



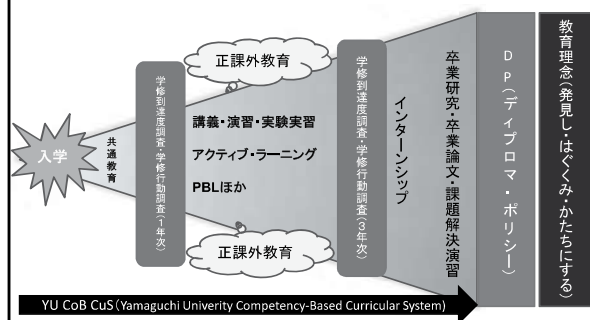
「サービスラーニング基礎」(ミニ移動大学in仙崎) (N=13)
●YFL6つの力に関するルーブリック(4段階)による学生自己評価の変化
「課題発見・解決力」「やまぐちスピリット」「イノベーション創出力」「協働力」の意識向上が見られる。

24

「教育の質保証」における 取組成果・課題・展望

25

山口大学・学士課程教育の質保証概念図



26

山口大学生として期待される汎用的能力 (教育理念に依拠)

出典: 島居(2014)「『共通教育における質保証のマネジメント』の研究目的・計画・進捗状況について」『大学教育学会誌』第36巻第1号, pp.75-77

Diamond(2008, 145, Figure13.2)を参照し、再構成

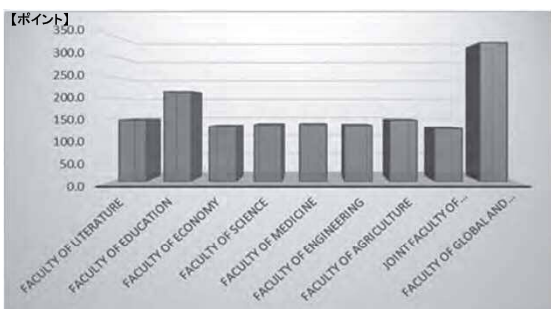
山口大学・教育理念の整理(2015年5月教育研究評議会了承)

目標	成果	アセスメント
「発見・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の意識	教養教育において 育成される力	専門教育において 育成される力
【驚き】 世界や社会にいつも驚きを感じ、 過去・現在・未来に関心を抱き続け ます。	【驚き】: 驚きを大切に、「自ら」が考 え・判断・表現・発言する能力を養いま す。	【チャレンジし、解決する力】: あらた な問題や困難にチャレンジし、解決 する力を養います。
【個性】 他人と競争し、打ち負かすのでなく、 自分を発見し、はぐくみ、世界で たったひとつの存在になります。	【個性】: 個性を大切に、心身ともに 豊かな人間性とくみ・美を養育するこ ろをはぐくみます。	【自分を活かす力】: 専門家としての 知識や能力を身に付け、自分を活か す力を養います。
【出会い】 自分のうちに閉じこもらず、自分を 超えてひとに出会い、出会いをはぐ くみ、つながりを築きます。	【出会いと交流】: 出会いと交流の中で、 歴史と伝統を重んじつつ、異文化を受 け入れるところを養い、地域社会と国 際社会への責任感や義務感を培いま す。	【専門分野を超えて考え行動する 力】: 専門性を活かし、さらに分野を 超えて、人々の幸せや社会・環境全 体のありべき姿について、考え行動 する力を養います。
【夢】 過去を受け継ぎ、現実をみすえな がら、夢を発見し、夢をはぐくみ、夢 をかたちにします。	【夢】: 夢を描き続け、自らが生涯を過 越えての「知の探求者」になる「礎」を 築きます。	【世界にはばたいて活躍する力】: 国 を超えた多くの人と出会い、世界 にはばたいて活躍する力をはぐく みます。

27

学生のALポイント累積値

(学部別、2015年度入学者における2016年度累積値)



28

3つのポリシーの見直し・策定

★各学部・研究科主催「教育改善FD研修会」(2016年度)

・テーマは、3つのポリシー改訂及びYU CoB CuS (Yamaguchi University Competency-Based Curricular System)の導入に向けた意見交換

⇒育成する力を明確化したDP

⇒学修評価方法を明確化したCP

(2017年度)

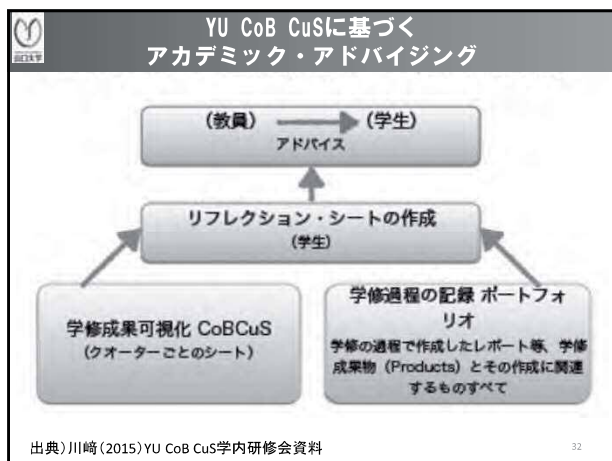
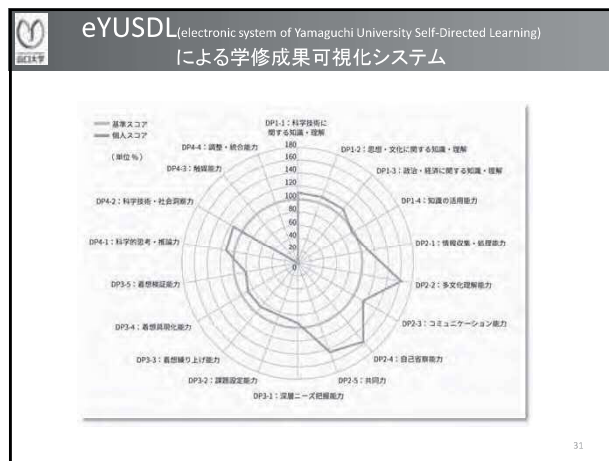
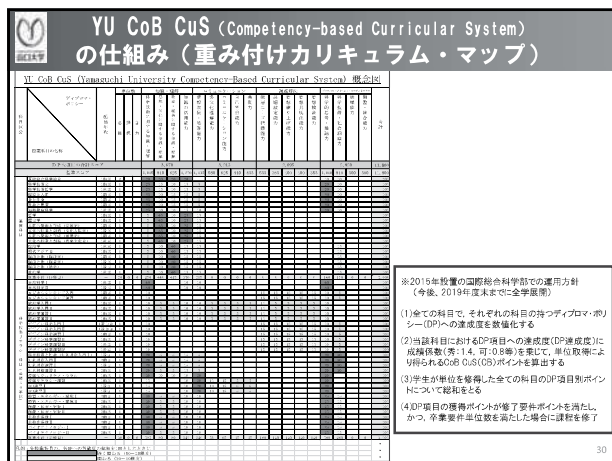
⇒カリキュラムマップの改訂

(2018～2019年度)

⇒YU CoB CuSの全学導入



29



DP達成度の活用状況の実際

【学生調査の質問項目】

Q1 YU CoB CuSの結果をしっかりと確認している。

Q2 授業を受講する際やテスト勉強をする際は、DP(ディプロマ・ポリシー)で求められている資質・能力や授業科目に割り当てられた基準スコアを意識している。

Q3 担任教員によるYU CoB CuSに基づいた学習指導(アドバイス)をその後の学習の参考にしている。

Q4 YU CoB CuSの基準スコアや自分が獲得した個人スコアに疑問があれば、授業担当教員や担任教員に質問するようにしている。

Q5 YU CoB CuSの結果をもとに、自分の学習がうまくいっているかどうかを確認し、改善が必要であれば 改善しようとしている。

課題が残る

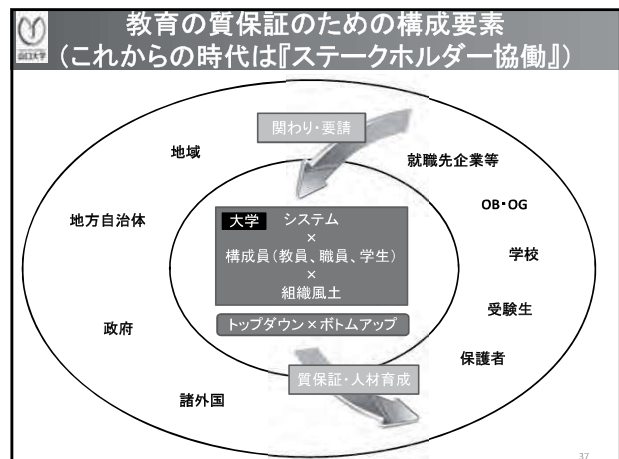
- DPと科目の到達目標の関連付けが十分か？
- カリキュラムマップを調整できるカリキュラムマネジメント力が十分か？
- 個々の科目成績の羅列でなく、統合された資質・能力を認識し、かつ、自律的学修に導けるか？

おわりに

ディプロマ・サプリメント的考え方

- 資質・能力証明(学修成果可視化の蓄積)
(数値化できる環境整備)
- 可視化しても学内外で使わなければ無意味
- 資質・能力証明を企業や社会が理解し、価値付けることができるか？
- 大学側・企業側の相互理解が必要
- そのためには、場づくり+つなぐ人材が不可欠

36



ご清聴いただきまして
ありがとうございました



Contact me : toru-h@yamaguchi-u.ac.jp

VII. アドバイス会議

1. 第10回アドバイス会議

日 時：2017年9月26日（火）13：00～14：00

場 所：大学教育センター長室（共通教育棟2階）

出席者：上田 真寿美 国際総合科学部 教授

尊田 望 山口大学非常勤講師

菊政 勲 大学教育機構 大学教育センター長

林 透 大学教育機構 大学教育センター准教授

内 容：

菊政 勲 大学教育センター長及び林 透 大学教育センター准教授より、今回企画実施する、アクティブ・ラーニング型授業を模擬授業形式で行う趣旨・目的について説明を行った。

その後、主に、以下の2つの事項（（1）（2））について意見交換を行い、AL ベストティーチャー2名の先生が注意しているポイントについてアドバイスを受けることができた。

（1）アクティブ・ラーニング型授業における授業設計、学修評価について

（2）アクティブ・ラーニングを通した学生の学び（学び方、授業内外の学び）や成長（主体性）について

上田 真寿美 先生より、模擬授業型ワークショップで提供される「山口と世界」について、初回の授業の大切さ、教員と学生の相互に知り合うための工夫などについて説明があった。「山口と世界」は必修科目であり、学生をエンカレッジすることに気を配っていること、また、グループ活動が主となるための当該活動における要所要所での評価のあり方の具体について説明があった。

尊田 望 先生より、同じく、模擬授業型ワークショップで提供される「English Speaking」について、英語嫌いな学生のやる気を引き出すのに、約1か月ぐらいかかるが、根気よく対応するようにしている旨の説明があった。ゲーム感覚で、英語の親しみを持たせ、前向きに英語をしゃべるようにし、ポイント制で評価することで、学習の継続性を引き出しているとの説明があった。

2. 第11回アドバイス会議

日 時：2017年11月10日（金）14:30～15:30

場 所：大学教育センター長室（共通教育棟2階）

出席者：俣野 秀典 高知大学 地域協働学部 講師

藤宮 龍也 大学院医学系研究科 教授／医学教育センター 副センター長

菊政 勲 大学教育機構 大学教育センター長

篠田 雅人 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

内 容：

（1）ルーブリックをどのように作成・活用するか ～考え方、方法、新展開～

俣野 秀典 高知大学 地域協働学部 講師より、高知大学地域協働学部での実践事例として、学部として養成を目指している15の能力の達成度チェックをするために実習科目の評価の一部としてルーブリックを活用していること、学生には「自分が何をしたか」という観点で文章化するように指導していること、書き方としては「～できる」よりも「～している」でなるべく表現するほうがよいこと、教員1人あたり学生7～8人分を評価していること等の紹介と説明がなされた。一方、学生を観察して評価することの限界もあり、経験度合いをレベル分けすることでルーブリックとすることも有効であろうという意見が述べられた。その後、高知大学での取組について、質疑応答がなされた。

（2）医学部医学科におけるルーブリック活用と今後の展開など

藤宮 龍也 大学院医学系研究科 教授より、今日の医学教育においては、全国医学部長病院長会議で制定されるコア・カリキュラムやECFMGの通告（2023年以降は国際基準に合致した大学の卒業生に米国医師資格の受験が限定される）、分野別評価基準による認証評価受審といった「黒船の来航」により、教育改革が待ったなしになっているという状況等について説明がなされた。その関係もあり、コンピテンス（包括的な実践力）・コンピテンシー（観察可能な能力）・ディプロマポリシーとの関係性を整理したルーブリックを活用し始めたという説明がなされた。なお、ルーブリックを活用した評価は、藤宮先生が先行的・試行的に行っている段階であり、今後学部教育全体に拡げていく必要があることから、膨大な評価の山になることが予想されることから、これまで以上にMoodleやeYUSDLというシステムを有効利用していきたいと考えている旨意見が述べられた。その後、医学部での取組について、質疑応答がなされた。



3. 第12回アドバイス会議

日 時：2018年1月26日（金）12：00～13：30

場 所：Grand Hyatt Hotel, Washington DC, USA

出席者：Mary D. Sorcinelli, Co-PI, Undergraduate STEM Education Initiative,
Association of American Universities (AAU), Senior Scholar, Bay View
Alliance: Leadership for Learning in Higher Education (BVA)
Senior Fellow, Institute for Teaching Excellence & Faculty Development,
University of Massachusetts Amherst （YU-AP 海外アドバイザー）
Andrea L. Beach, Director, Office of Faculty Development, Western Michigan
University
林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授
山崎慎一 桜美林大学 グローバル・コミュニケーション学群 助教

内 容：

（1）山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の進捗状況に関する報告

昨年度、メアリー、ディーン・ソルチネッリ先生とアンドレア・ビーチ先生を招へいして開催した YU-AP 事業・国際シンポジウムの成果について、改めて謝辞を述べるとともに、山口大学における AP 事業の進捗や成果発信の状況について報告を行った。

（2）日米における FD に関する情報交換

日本の高等教育における関心テーマである、学修成果可視化やディプロマ・サプリメントについて状況説明し、アメリカでの動向を伺った。また、最近、日本でも取り上げられつつある Competency-Based Education (CBE)について、詳細の内容について情報収集した。

また、カリキュラムデザインやカリキュラムマネジメントの重要性が求められる中で、アメリカでの先進事例や専門の研究者（ミシガン大学など）について紹介を受けた。今後の先進事例調査などに活かすこととした。



【参加レポート】

The 104th Annual Meeting of the Association of American Colleges and Universities (AAC&U)

AAC&U は、アメリカのジェネラル・エデュケーションに関する伝統ある学会である。近年では、日本でも広がりつつある、サービslラーニングや市民教育などの教育実践、学修評価方法などの最先端が学べる機会である。

アメリカは建国されて約240年の歴史であり、民衆自らが担い手となって国家を建設し、民主主義を育んできたという経緯から、大学におけるジェネラル・エデュケーションの基本として民主主義教育が常に大きなトピックになっているということを肌身で感じることができた。

また、アメリカ高等教育界では、学修成果測定について、一時、標準テストで対応すべしという風潮がある中で、AAC&U がその動きに反旗を翻し、VALUE RUBRIC を策定した経緯があり、学生の学修成果測定の話題において常にルーブリックの活用が常識化している現状を改めて目の当たりにし、日本との状況の違いを痛感した。

以下、実際に参加したセッション等について簡単にレポートを行っておきたい。

今回の学会参加で、一番、印象に残ったのは、最終日の1月27日(土) Breakfast Roundtable Discussions で参加した”Mapping a University’s Entire Undergraduate Curriculum to General Education Objectives”である。デラウェア大学が2014年度に、General Education の12の学修目標 (Learning Objectives) を新たに策定した。全学に浸透するため、学科ごとに12の学修目標の優先順位を、ワークシートを通して協議させる方法が紹介された。また、各学修目標に応じた VALUE-STYLE RUBRIC を、学内プロジェクトを組織して策定したとのことであった。

このほか、1月26日(金) Discussion Session で参加した”Creating and Using Taxonomies to Support Faculty Staff Implementation of High-Impact Practices”では、インディアナ大学・パデュー大学インディアナポリス校 (IUPUI) が取り組むサービslラーニングコース、インターンシップ、テーマ型ラーニングコミュニティにおける教育・学修活動を効果あるものとするため、High Impact、Higher Impact、Highest Impact の3段階の目標分類 (タキソノミ) を作成し、実践やアセスメントの向上に活かしている事例は参考となった。アメリカでは、特に、課外学習活動において、教育・学修活動の質保証や効果を厳密に担保しようとしていることが窺われる。この点において、日本の高等教育は、かなりの課題を残している印象を強くした。

このほか、教員集団がリフレッシュを行いながら、組織的な教育改善を行っている大学の事例や、Competency-Based Education Programs の質保証フレームを紹介するセッションでは、既存の Discipline-Based Education Programs の差異などについて意見交換が行われた。



VIII. 各種セミナー等参加報告

1. SPOD フォーラム 2017

日 時：2017 年 8 月 23 日（水）～8 月 25 日（金）

場 所：徳島大学常三島キャンパス

参加者：篠田 雅人 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

1. フォーラムの趣旨

SPOD とは、「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク」の通称で、四国地区 32 の国公立大学・短期大学・高等専門学校によって構成される大学間ネットワークである。SPOD フォーラムは SPOD 事業のメインイベントであり、今回は、2009 年度から続く 9 回目の開催で、「Feeling と Thinking を Learning につなげる」という統一テーマのもとに、3 日間で全 40 プログラムと 24 のポスターからなるポスターセッションが提供された。

2. 参加プログラム

SPOD 加盟校の参加申込の終了後に一般申込が行われる関係上、今回は、5 プログラムに参加することとなった。以下に、参加プログラムとポスターセッションの概要を報告する。

- (1) 大人数講義のコツ（とくに授業初心者のための）（講師：小林直人氏（愛媛大学 学長特別補佐、教育・学生支援機構 教育企画室長、医学部 総合医学教育センター長 教授））

大講義室でも学生とコミュニケーションを取る方法、学生を積極的に講義に参加させる方法や授業効果を高める方法など、大人数の学生を聴衆とした「よい」講義をするために気をつけなければならない様々な授業スキルを、実例やワークを通じて習得する、というプログラムであった。具体的には、「①導入→展開→まとめ」、「②説明&発問&指示」「③コンテンツ&スキル&タレント」という「3×3」というキーワードで語ることができる講義法の基本についてレクチャーを受けた。それぞれの説明の中では、①については、学生が集中できる時間は 15 分に過ぎないという事実から、導入に 15 分、まとめ・振り返り（次回への予告を含む）に 15 分配分するとよい、②については、明確な発問や指示が有効である、③については、コンテンツの自由度は意外と低い、スキルは例えば FD で身につくが、最近は教員のタレントによるところが大きいと考えるようになった、という点が特に印象に残った。

- (2) 学生参加型授業の技法（講師：西本佳代氏（香川大学 大学教育基盤センター 講師））

近年アクティブ・ラーニングの導入が求められる機会が多くなっているが、実際に導入するとグループワークが単なるおしゃべりの時間になってしまったり、知識の伝達が不十分に終わったりと、学生参加型授業の難しさに直面することも多々ある。そのような問題から、そもそもアクティブ・ラーニングとは何なのかという定義に始まり、導入の背景、メリット・デメリット等の基礎的な内容に触れつつ、取り入れやすい学生参加型授業の技法を紹介する、というプログラムであった。導入として、グループワークを通じてアイスブレイクの手法を 2 つ習得した後、16 の学生参加型授業技法が紹介され、そのメリット・デメリットをシンク・ペア・シェアという技法を用いて議論した。最後に、いずれか 1 つ以上の技法を使

って学生参加型の授業計画を作成するというワークに取り組んだ。

(3) 学習の学びを促す学習評価の方法（講師：山田剛史氏（京都大学 高等教育研究開発推進センター／大学院教育学研究科 准教授））

学習評価の原則（何を、どのように、いつ評価するのか）、学習評価の方法（どのような方法や特徴があるのか）、よい試験を行うための留意点、学習評価の厳密化と効率化のためのツール（ルーブリック評価やポートフォリオ評価、ICTを活用した評価やピア評価等）といった内容について、参加者の授業実践を元に学習評価を振り返りながら、抱えている問題や解決のための知恵などを参加者同士で共有し、学生の主体的な学びを促進するための学習評価について理解を深める、というプログラムであった。学習評価を「学生の学習を成功に導くために、学習実態を把握し、適切なフィードバックを行い、学習活動の成果を学習目標に照らして評価する教育活動」と定義したうえで、能力の全てを本当に評価できるのか、集団と個人の能力をどう評価するか、評価の厳密性・適切性と効率性をどう両立させるかが課題として示された。また、①診断的評価（授業の開始前や初回授業時におけるプレースメントテスト等を通じての学習者のレディネス（既有知識）把握）、②形成的評価（授業期間中における小テスト等を通じての理解度・目標達成度把握）、③総括的評価（期末試験やレポート、これまでの学習成果を含めた授業終了時における総合的判定）の3地点における評価で自立的学習を促進できることが示されたが、特に、②形成的評価の結果を迅速にフィードバックすることが学習者の動機づけを高めるという点に感銘を受けた。最後に、学習評価の基準には「評価規準（ものさし）」と「評価基準（目盛り）」あることを確認し、レポート採点のルーブリックを作成するグループワークに取り組んだ。

(4) シンポジウム「学生が感じ、考え、それを学びにつなげる教育と学習支援」（パネリスト：秦敬治氏（追手門学院大学 学長補佐）・俣野秀典氏（高知大学 地域協働学部／大学教育創造センター 講師）・佐々木奈三江氏（徳島大学 附属図書館 職員）、指定討論者：小林直人氏（愛媛大学 学長特別補佐、教育・学生支援機構 教育企画室長、医学部 総合医学教育センター長 教授））

秦氏は、大学組織の観点から、学生のためにどのような取組、教育、支援ができるのか、そのためには教職員はどのような能力が必要なのか、その能力を開発するにはどのような方法が考えられるかについて、追手門学院大学における教職協働事例を紹介した。学習支援とは、職員のルーチン業務にまで落とし込めて初めて根付くもの、学生を育てるのに教員・職員・所属部署といった立場は関係ない、全体を俯瞰的に把握することができるGMやスーパーバイザー的な存在が必要であること、「支援」というより「全力で向かい合う」ことが大事、「知る→できる→教えることができる」というステップを踏むことが非常に重要という5点のメッセージが印象的であった。

俣野氏は、学生の教育・学習支援には、「立ち止まって、問いかける」ことが重要であるという内容の発表であった。「体験→観察・指摘→分析→仮説化→体験→・・・」という、体験を学びにつなげる流れ、「気づきの促進→シェア→解釈・意味づけ→一般化・学び→応用・実行」という、問いかけと学生の体験を深めるための言葉の表現を大切にすることにより、学生の学びが深まるという考えに共感を覚えた。

佐々木氏からは、徳島大学附属図書館で取り組んでいるアクティブ・ラーニング促進策としての学生協働と、図書館内で自主的に活動する学生が職員の学習支援に対する好影響を与えたという成功事例の紹介があった。また、学習支援を行うための学生団体を大学として公認したことにより、教員・大学院生による人的学習支援体制が構築できたこと、その結果、図書館内のラーニング・コモンズを単なるハコモノにしないために、図書館職員としての仕事に対して悩みが増えていることなどが紹介された。

以上3氏の発表の後、指定討論者・参加者による質疑応答がなされた。

(5) 「発達の間」としての授業デザイン—パフォーマンス心理学入門—（講師：新原将義氏（徳島大学 総合教育センター教育改革推進部門 助教））

学生が自分から様々なテーマに取り組み、社会とつながるという大きな問題として「学習」を捉えた場合、そこには全人格を巻き込むような「発達」的な視野も自ずから含まれると考え、学習環境デザインが学生の「発達」にいかに関与するのか、という観点が必要になることから、「発達の学習」について考えてみる、というプログラムであった。心理学者ピアジェの発達段階理論を前提とすると、「発達が先、学習が後という考え方だと、発達してできるようになったことを教えるのが教育なのか？」という疑問が生じることになるが、同じ心理学者のヴィゴツキーは、これを「学習は発達に何の影響も与えないし、発達の成果を確認することだけが学習の役割になってしまう」と批判している。このことは、「学習は発達を後追いするだけでなく、発達を促進したり、発達を先導したりする」ものだとして教育を見直すことの必要があることを示している。講師は、インプロ・ゲームを活用して、参加者にこのような新しい発達観を理解するヒントを与えてくれた。

(6) ポスターセッション

24のポスターのうち、大まかに分類すると、FD関係が15件、SD関係が9件と、例年よりもSD関係のポスターが多かったように感じた。1日目のポスターセッション時間に参加者が投票し、2日目の情報交換会でその結果を発表・表彰する、というスタイルも例年通りであった。SD関係が増えた背景は、AP事業等の絡みもさることながら、大学設置基準でSDが義務化されたことが大きいだろう。表彰とは無縁だったが、福岡歯科大学のグループは、DPに沿って、「この科目は、どういう力をどのレベルまで身に付けることを目標としているのか」をシラバス上に明示するという、現在検討中の構想について、「卒業時アウトカムを取り入れた新シラバスによる学修成果の可視化について」というタイトルで発表していた。本学のAP事業における取組と視点が近く、参考になった。

2. 山形大学・大正大学共催シンポジウム「直接評価の第一歩 基盤力テストの実施と活用に向けた取組」

大正大学・山形大学共催「第 11 回 EMIR 勉強会」

日 時：2017 年 9 月 21 日（木）～9 月 22 日（金）

場 所：大正大学

参加者：篠田 雅人 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

1. シンポジウム「直接評価の第一歩 基盤力テストの実施と活用に向けた取組」

山形大学が採択された、平成 28 年度大学教育再生加速プログラム「高大接続改革事業」テーマⅤ「卒業時における質保証の取組の強化」の一環として、平成 29 年度に実施された山形大学独自の「基盤力テスト」の概要と分析結果について、4 人の報告があった。以下、4 人の発表者の発表概要を箇条書きで示す。

(1) 基盤力テストの概要と実施状況（千代勝美氏（山形大学 学術研究院 教授））

- ・山形大学では、4 年間の学士課程教育を、1～3 年次までの「3 年一貫学士課程基盤教育」と 4 年次の「卒業論文研究・先進専門教育」の 2 つに分けたうえで、専門教育と共通教育を再構築した。
- ・「基盤力テスト」は、入学時・1 年次終了時・3 年次終了時の 3 回実施することを想定して計画されている。
- ・「基盤力テスト」で測定するものは、自律的に課題に取り組む専門力である「学問基盤力」、社会でリーダーシップを発揮する人間力である「実践地域基盤力」、実践的な英語で多様性に挑戦する国際力である「国際基盤力」の 3 つであり、これらは全学 DP に関連させている。
- ・1 年次終了時に実施する「学問基盤力テスト」は、数的文章理解（全学部が対象）、数学・物理学・化学・生物学（理系学部のみ対象）、「実践地域基盤力テスト」は入学時の「5 因子調査」、出欠状況・ポートフォリオ（現存のもの）、課外活動等の実績を組み合わせる予定、「国際基盤力テスト」は、現在年 2 回実施している TOEIC、e ラーニング・留学等国际活動実績を組み合わせる予定。
- ・「基盤力テスト」を卒業時の質保証として用いる理由として、①カリキュラムチェックリストはあくまでも自己点検の一部であって、質を保証するわけではない、②GP/GPS/GPA は学位プログラムの修正や授業担当者の変更、インセンティブによって容易に変動し、授業時の評価ではあるが卒業時に維持されているか不明である、暦年や学部学科・大学間で比較不能であることから、質保証・達成度測定の指標ではない、そもそも GPA は間接評価である、③ポートフォリオは、ポリシーを持って収集していても雑多な集積であり、整理が難しく分析が不可能、という 3 点を挙げた。
- ・学位プログラムや TPO に応じて必要とされるキーコンピテンシーはそれぞれ異なるため、心理学的・科学的に確立されている、より基本的な性格・習慣の測定（5 因子（外向性・協調性・勤勉性・情緒安定性・知的好奇心）調査）を導入した。
- ・授業外学修時間については、従来のアンケートや e ラーニングデータから、新たに開発し

たスマートフォンアプリでの教室・図書館等の入退室記録やモニター学生による記録から測定することを計画している。

- ・卒業時の質保証や学生の達成度は、授業のパフォーマンスやテスト、**GPA** だけで測定できるものではない。

(2) 分析結果Ⅰ 学問基盤力（安田淳一郎氏（山形大学 学術研究院 准教授））

- ・「学問基盤力テスト」の開発方針は、「知識だけでなく概念まで定着していることを測定できるものを」。
- ・基盤教育企画部の各専門分野教員 4 名で開発。
- ・数的文章理解・数学・物理学・化学・生物学の各分野で 30～45 問程度を作成。
- ・スマートフォンを利用した自動化テスト、試験時間は 5 科目で 30 分程度を想定、出題数は各分野 5 問ずつ、設問毎の制限時間を 3 分に設定、項目反応理論による受験者の回答に応じた難易度調整。
- ・テストの結果を 4～5 段階程度のレベル分けをして学生にフィードバックすることを検討中。
- ・FD の企画運営やカリキュラム編成への活用、大学間連携での実施も検討している。

(3) 分析結果Ⅱ 実践地域基盤力（藤原宏司氏（山形大学 学術研究院 教授））

- ・5 因子スコアと学業成績に関連があるかを分析。
- ・使用データは、キーコンピテンシー調査（5 因子調査）、2017 年度前期のスタートアップセミナー（2 単位、コモンルーブリックあり）の出席状況と成績。ただし、**GPA** は間接評価であること、教育によって評価そのものが異なることから使用しない。
- ・スタートアップセミナーを対象としたのは、統一シラバス、統一課題、1 クラス 35 人程度（来年度から 25 人）、学部・性別のバランスに背理をしたクラス編成にしていることから、フォーマットが揃っていることによる。
- ・成績状況が良好なグループは、出席率が統計的に優位に高い。
- ・5 因子のうち、勤勉性は、成績・出席状況と（正の）関連性がありそう。また、情緒不安定性と成績の間には負の関連性がありそう。

(4) 分析結果の活用と質保証強化（浅野茂氏（山形大学 学術研究院 教授））

- ・教学マネジメントの **PDCA** サイクルとして、山形大学の特徴として挙げられるのは、①「教育ディレクター制度」、②「教育プログラム」（学位プログラムではなく、例えば、同一学科内に複数のコースがある場合はコースの教育プログラムを単位とする）という捉え方、③「IR」に止まらない、継続的改善の支援体制としての「**IE (Institutional Effectiveness)**」という概念の導入、③「教育プログラム」の認定制度（「教育プログラム」は、教育組織（学部・研究科）が、教育担当副学長に申請し、総括教育ディレクター会議が審議・決定する制度）の存在、の 3 点。
- ・今後の課題は、3 ポリシーの実質化とカリキュラムの整合性担保。特に、基盤力テストの結果を活用したカリキュラムの点検・評価と学生へのフィードバック、**IE** の定着が大事。

2. 第 11 回 EMIR 勉強会

(1) セッション I テーマ「日本の大学における IR の現在地」

このセッションでは、日本国内における 2 つの IR 関連グループの中心的メンバーから話題提供がなされた後、ディスカッションにより、議論を深めた。3 グループの登壇者と発表概要は次のとおり。

①「職員 IR (SIR) フォーラムにおける実践と普及活動」(職員 IR (SIR) フォーラム主催者 上畠洋佑氏 (金沢大学 国際基幹教育院 高等教育開発・支援部門 特任助教))

IR を担当している事務職員を中心とした集まりで、何をしてよいか、何を勉強したらよいか分からない、という職員を対象に、「分析力・協同的マインド・問題解決力」を養成する場として設定。過去 3 回開催し、IR 担当者のジョブローテーション化に伴う組織としての継続性、IR 担当者コミュニティの必要性、IR に関する情報の集約といった点で IR 人材養成上の課題があることを指摘した。

②「大学 IR コンソーシアムの過去・現在・未来」(大学 IR コンソーシアム 代表会員校運営委員 高橋哲也氏 (大阪市立大学 副学長 (教育・入試担当)・高等教育推進機構 教授))

2009 年度からの補助金事業の発展・継承を目指し、2012 年に 4 大学で発足した際の主目的は、「IR を通じての相互評価の主要課題をベンチマーキングのための複数機関間比較を通じての質保証の枠組整備」であった。その後、2012 年度からの新たな補助金事業の申請時には 8 大学に、現在では 53 大学と順調に増え、1 年生調査、上級生調査ともに毎年 3 万人以上が参加する規模になっている。規模の拡大にあわせ、IR 人材育成に向けたセミナーやワークショップの開催にも取り組んでいる。課題として、規模の拡大と社会的責任の増大に対応するための法人化、IR システムのリプレース、8 大学連携事業で取り組んでいた卒業生調査の IR システムへの組み込みと英語力評価の現行調査への活用、IR コミュニティの発展への寄与が挙げられた。

③「大学評価コンソーシアムにおける IR 実践事例の蓄積」(大学評価コンソーシアム 副代表幹事 (企画担当) 浅野茂氏 (山形大学 学術研究院 教授 (企画評価・IR 担当)))

2009 年に法人評価や認証評価担当者の有志団体として設置したが、近年の IR 活動の高まりに対応し、主たる活動として年 1 回開催している「大学評価担当者集会」を今年度から「大学評価・IR 担当者集会」に改称し、2016 年度からは「IR 実務担当者連絡会」を年 3~4 回程度開催している。この他、2015 年度から IR 実践事例の蓄積として「大学評価と IR」を年 4 号発行するなど、活発に活動している。会員数の増加に伴い、要望や関心が多様化してきており、他の機関・団体との連携・タイアップと安定的な原資、人的体制の再検討などが課題となっている。

3 つの話題提供の後、IR 人材の養成ニーズの高まりに対応していくためには、関係機関・団体との連携が大事であるという観点からディスカッションがなされた。

(2) セッションⅡ テーマ「マネジメントと可視化のための IR ソリューション」

このセッションでは、BI ツールを使ったデータの可視化に関して、3 大学の事例が紹介された。事例紹介の 3 大学と登壇者は次のとおり。

- ①「山形大学 OIRE における Power BI を用いた公開データの可視化について」(藤原宏司氏 (山形大学 学術研究院 教授 (IR 担当)))
- ②「大正大学 IR・EM センターの BI システム整備と活用状況の実際」(福島真司氏 (大正大学 学長補佐 (質保証推進担当)・EM・IR センター長)、日下田岳史氏 (大正大学 IR・EM センター 助教))
- ③「上智大学における Tableau Desktop の利活用について～3 年使って変わってきたこと～」(相生芳晴氏 (上智大学 学術情報局 情報システム室兼 IR 推進室))

いずれの発表も、BI ツールの実際に用いての使い方の紹介と、データの「見える化」により、これまで以上に学内での議論の活性化が進むなどの成功事例の紹介がなされた。

(3) セッションⅢ 「米国のエンrollment・マネジメント」

(講師：John Maguire 氏 (Maguire Associates Chairman Emeritus)、Linda Cox Maguire 氏 (Maguire Associates Vice Chair))

エンrollment・マネジメントという言葉は最初に定義し、その基本的な活動を米国で実践してきたジョン・マグワイア氏とその妻であるリンダ・コックス・マグワイア氏による講演であった。エンrollment・マネジメントという言葉は、経営危機に瀕していたボストン・カレッジが 1976 年に発行した同窓会報で初めて使用されたものだそうだ。エンrollment・マネジメントとは、学生募集、奨学金の配分、学生の追跡、在籍率の向上、転学に関係する諸機能を統合するプロセスの総称であるが、この同窓会報で初めて使用されて以降、その概念は米国のほとんどの大学で使われているということである。

ボストン・カレッジは、年間数百万ドルもの継続した債務超過を抱えていたが、アクションプランを立てて経営改善を進めた結果、10 年の間に志願者数 3 倍、新入学生 30% 増、収入増によるレジデンスホールの建設と収容力増、学生の愛校心向上、卒業率の 70% から 90% への向上、国内ランキングの上昇等々の成果を挙げたということである。悪循環から好循環に転じたことがこの成果を生んだわけであるが、その一翼を担ったのが、EM という概念と戦略であった。

近年は、所得格差の拡大や様々な不平等の拡大により、新たな観点からの EM 業務が増加している。今後は、ライフサイクルの観点を取り入れたより複雑な EM の戦略が求められるだろう、ということであった。

また、EM は米国の方が進んでいると思いがちであるが、例えば、学生満足度と在学率の関係の分析については、米国より日本の大学の方がより重視していると思われる部分もあり、米国の大学にとっても参考になるとのことであった。今後の大学経営では、分析結果を活用し、実践に活かしていくことが大きな一歩に繋がっていくだろうとし、EM への期待が述べられた。

3. 高知大学主催 平成 29 年度 大学教育再生加速プログラム（AP）事業シンポジウム 「卒業時における質保証の取組の強化」

日 時：2017 年 10 月 28 日（土）

場 所：東京国際交流館 プラザ平成 3 階 国際交流会議場

参加者： 林 透 大学教育機構 大学教育センター 准教授
篠田 雅人 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

今回のシンポジウムは、大学教育再生加速プログラム（AP）事業・テーマⅤに採択された高知大学、茨城大学、日本福祉大学、山形大学の共催により、大学教育の質保証について、本事業で得られた成果を全国の高等教育機関・高等学校関係者に情報発信するとともに、課題の検証を行うことを目的として開催されたものである。AP 採択校としてポスターセッションに参加した。以下、シンポジウムの概要を示す。

1. AP 採択校によるポスターセッション

シンポジウムの開催に先立ち、AP 採択校 16 校による計 18 件のポスターセッションがあった。本学も『学びの好循環』を目指す山口大学 AP 事業の軌跡』というテーマで、これまで約 3 年間の AP 事業の取組を網羅的に紹介する内容で発表を行った。参加者の興味関心は、「AL ポイント認定制度の推進」「AL ベストティーチャー表彰制度」「ルーブリックを活用した学修評価」に集中しており、多くの大学で、「学修成果の可視化」やテーマⅤで求められている「ディプロマ・サプリメント（学位・資格の学習内容を示した様式）」の具現化は共通した課題となっていることを再認識した。



2. シンポジウム

基調講演 2 件、事例報告 4 件とパネルディスカッションというプログラムであった。以下、基調講演と事例報告それぞれの概要を箇条書きで示す。

(2) 基調講演Ⅰ「近年の高等教育政策と大学教育再生加速プログラム（AP）」（河本達毅氏

(文部科学省 高等教育局 大学振興課 大学改革推進室 改革支援第二係長))

- ・平成 17 年の「将来像答申」、平成 20 年の「学士課程答申」、平成 24 年の「質的転換答申」、平成 26 年の「高大接続答申」の 4 つの中教審答申を横断的に俯瞰すると、大学教育の改善に資してきた GP 事業・AP 事業には一定の成果があった。
- ・AP 事業における必須・任意の各種「学修指標」の一部については、今後大学の質保証論議の中で「大学全体の教育成果の可視化」の取組に活用できるのではないかと。

(2) 基調講演Ⅱ「大学教育改革の近未来を考える～正攻法かイノベーションか～」(川島啓二氏(京都産業大学 共通教育推進機構 教授))

- ・2012 年に民主党政権下で出された「大学改革実行プラン」により、高等教育の構造と機能の再編成が進められることになったが、その内実は、大学それ自体の価値がまずリスペクトされるのではなく、どのような社会的機能を担ってくれるのか、という観点から評価されるようになってしまった。
- ・かつての GP 事業はデザイン思考的なアプローチだったが、AP 事業は仮説検証・分析型アプローチであり、目標管理主義的な面がより強くなってしまっている点には問題意識を持たざるを得ない。

(3) 事例報告Ⅰ テーマⅤ「卒業時における質保証の取組の強化」幹事校挨拶・幹事校事業紹介(中村信次氏(日本福祉大学 全学教育センター長・AP 事業推進委員長 教授))

- ・テーマⅤ及びテーマⅤ幹事校として、2016 年 2 月にテーマⅤ採択校を対象とした「キックオフ・シンポジウム」を開催するとともに、「テーマⅤポータルサイト」の開設を行った。
- ・今後、全国シンポジウムや地域別研究会を充実させていく予定。

(4) 事例報告Ⅱ「茨城大学における教育の質保証の取組」(畠田敏行氏(茨城大学 全学教育機構 准教授))

- ・茨城大学における「卒業時の質保証」(AP 事業)は、学内のみならず学外者を含めた「内部質保証システムの整備」という位置づけにしている。
- ・学内では、「教員⇄学科等⇄学部等⇄全学」のそれぞれの階層からの依頼に対して、IR 部門が必要なデータを提供・報告するという「4 階層質保証システム」を構築し、「学修成果の可視化」に努めている。
- ・パートナー企業、高等学校、自治体、研究機関等の有識者といった地元のステークホルダーからなる助言・評価委員会を学部毎に設置し、「地域との協働による質の向上」にも努めている。

(5) 事例報告Ⅲ「山形大学 AP 事業の概要と現状」(浅野茂氏(山形大学 学術研究院 教授))

- ・「学問基盤力」「実践地域基盤力」「国際基盤力」を定量的に測定する基盤力テストを自主開発し、入学時・1 年終了時・3 年次の 3 時点で測定することとしている。
- ・地位企業・自治体・教育委員会・保護者からなる山形大学アライアンスネットワークを

母体として「教育改善アドバイザーボード」を形成した。

- ・今後の課題は、カリキュラム・チェックリスト＋基盤力テストの結果を用いたプログラム・レビュー、3 ポリシーの実質化、継続的改善の循環プロセス（IE）の定着化と捉えている。

(6) 事業報告「卒業時における質保証の取組の強化」（藤田尚文氏（高知大学 理事（教育・属学校園担当） AP 事業実施本部長））

- ・e-ポートフォリオを導入し、成績や修得単位数、セルフ・アセスメント結果のグラフ化等により、学生へのフィードバックを充実させた。
- ・e-ポートフォリオ上に蓄積される高知大学が養成する 10+1 の能力や成績分布、外国語能力試験等の学修成果に加え、準正課活動や部活動といった正課外活動の振り返りの両方を証明書として発行する「ディプロマ・サプリメント」を検討中である。

4. 大学教育学会 2017 年度 課題研究集会

日 時：2017 年 12 月 2 日（土）～12 月 3 日（日）

場 所：関西国際大学 尼崎キャンパス

参加者： 林 透 大学教育機構 大学教育センター 准教授

篠田 雅人 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

今回の課題研究集会は、「大学教育は“役に立つのか”」という統一テーマとして、「“役に立つ”」ということがどのような意味を持ち、大学教育が果たす役割は何なのかを問い直すことを目指して開催された。以下、ポスターセッション、基調講演・シンポジウム、篠田が参加した課題研究、インタラクティブ・セッションの概要を示す。

1. ポスターセッション

開会に先立ち行われたポスターセッションでは、26 件の発表があり、本学も「アクティブ・ラーニングの推進を通じた組織変容に関する考察～AL ベストティーチャー表彰制度と『Teaching & Learning Catalog』を中心に～」というタイトルで発表を行った。見学者の興味関心は、「AL ポイント制度の制度設計」「AL ベストティーチャーの決定方法」に集中していた。また、AL 型授業の実践事例を紹介した「Teaching & Learning Catalog」は好評であった。



2. 基調講演・シンポジウム

独立行政法人労働政策研究・研修機構の小杉礼子氏の基調講演に続き、3 名のパネリストが各々の立場から大学教育と社会との接続に関するコメントをした後、パネルディスカッション形式のシンポジウムが行われた。ここでは、小杉氏の講演概要を箇条書きで示す。

- (1)「職業キャリアの変化と大学の役割」（小杉礼子氏（独立行政法人 労働政策研究・研修機構 特任フェロー））
- ・この 10 数年で、新卒者の就職状況は好転し、大卒の無業者は半減、若年層の非正規雇用率は 1990 年代に比べて高い水準ではあるが減少傾向、学歴間格差は拡大し、相対的には

大卒者の非正規雇用率は低い、失業率も高卒者より低い。

- ・25～34 歳層では、高卒男性の 6 割がブルーカラー、女性の 6 割が非正規雇用となっており、大卒との差は拡大している。ただし、大卒男性では 2 割弱がブルーカラーで事務職の割合と匹敵している。大卒者は男女とも多様な職業につくようになった。賃金面でも、若年層は高卒との差が拡大しているが、大卒内での差も開いている。
- ・景気改善を受けて早期離職率は低下した一方、離職後の再就職では大卒女性および高卒男女は 3 分の 1 が不本意での非正規雇用となっている。正社員で再就職していれば長時間労働などの問題が改善する可能性もある。
- ・今後の第 4 次産業革命に向け、大学は、STEM、IT リテラシー、コミュニケーション能力を含む汎用的な技能・態度を職業実践的な教育を通じて育成するプログラムの開発や、大卒女性のキャリア開発、特に、エリート女性ではない、多様なキャリアモデルの提示と、キャリア中断型の卒業者に対する再参入のための就業準備プログラムの需要があるのではないか。



シンポジウムの様子

3. 課題研究シンポジウム I 「アクティブラーニングの効果検証 プロジェクト最終年を迎えて」(研究代表者 溝上慎一氏(京都大学))

これまで 3 年間にわたって進められてきた学会としての課題研究「アクティブラーニングの効果検証」の最終報告として、4 名から話題提供があった。

三保紀裕氏(京都学園大学)

アクティブラーニング(AL)型授業のプレ・ポスト調査(26 大学・短大、11,503 名の学生の回答)の結果に基づく知見が報告された。

- ・AL 型授業では、集団レベルとしては「予習の仕方」が「AL 外化」を媒介して効果が得られ、個人レベルとしては「予習の仕方」や「AL 外化」が良ければ効果が得られる。
- ・授業における AL 率の割合によらず、「予習の仕方」「AL 外化」「深い学習アプローチ」の得点が上昇した。ただし、AL 率 70%以上の授業群では、「学習動機」「他者観・仲間(意識)」が低下。とはいえ、「他者観・情報共有」は上昇、授業外学習時間は長く、予習が多くなる傾向、一般的な授業と比較しての評価も多群より高い傾向が認められる。この結果

から、AL としての効果は十分得られているが、学習への動機づけを高める上では適度な AL が有効である可能性がある。

- ・AL タイプ別では、(知識) 習得重視型と探求重視型共に「予習の仕方」「AL 外化」「深い学習アプローチ」の得点が上昇。また、探求重視型は、知識の活用を重視した AL のタイプであり、AL 率 70%以上の授業群と同様、「学習動機」「他者観・仲間（意識）」は低下するものの、「他者観・情報共有」は上昇。授業外学習時間は、(知識) 習得重視型の方が探求重視型より長い（予習＞復習）が、一般的な授業と比較しての評価も高い傾向が認められる。この結果から、AL としての効果は十分得られているが、学習への動機づけが下がる点については検討課題。

山田嘉徳氏（大阪産業大学）

ブレ・ポスト調査の結果から、AL 型授業は、「授業外で深く突き詰める学習」を促進して「外化」を行うようになり、「深い学び」に寄与することが想定されるが、これを検証するために行った授業担当教員への半構造化インタビューによる結果が報告された。

- ・授業全体への能動的な関与という形で学生を授業活動に誘うべく、教員が学生の学習をめぐる情意面と志向に十分配慮することで「授業外で深く突き詰める学習」がうまく進んだ。
- ・教員が多様な学生に配慮した形で「外化の基盤形成」に努めることで「外化」が行われるようになった。
- ・「知を深める構えの形成＝レディネス」を前提に、教員が「学習方略の効果的な多岐化」を図り、多様な学生の学習状況の複雑さに十分に応じようとするにより、「深い学び」がなされた。
- ・「外化そのものの機会の頻度の低さ」や「育成されるべき能力との関係に由来する外化自体の困難さ」、「技能習得の実感の持ちづらさ」、「他者に教えてもらった通りにのみ行う学習の構え」、「外化の機会が割合として過多になった結果として、内化の未達成による内容未理解」、「外化手法の平板化」が、「外化」を抑えてしまう要因となっている。
- ・教員が「学習全体のバランス」を意識することも必要。

山田邦雅氏（北海道大学）

AL におけるフリーライダー（FR）問題に着目したデータ分析の結果が報告された。

- ・「(大学は) 社会に出るまでの自由時間」というモラトリウム大学観を持つ学生が、「遅刻」「分担をやらない」が許される授業において FR として顕在化する。
- ・グループ不適合度を高め、他のメンバーはより密な活動をするようになる傾向が、FR が他者に与える影響として挙げられる。

長澤多代氏（三重大大学）

山口大学の「山口と世界」の履修学生 13 名を対象に行ったフォトボイス調査の結果が報告された。

- ・2015 年度の調査では、「情報源は教員配布資料がほとんど」「意見はほとんど思いつき」「インターネット上の情報依存」「情報の検索方法がわからない」といった課題が明らか

になっている。

- ・2016 年度には、「資料を適切に収集し、的確に分析することができる」を重点的課題として設定し、図書館職員によるガイダンスを授業に組み込む等した結果、教員配布資料以外に、データベースや図書館資料といった情報源が活用されるようになった。また、授業外学習の場として、図書館内のラーニングコモンズの利用と、LINE の活用が確認できた。
- ・学生の学修意欲を喚起したのは、「教員の働きかけ・熱意」「グループメンバーからの影響」「他グループの進捗状況を知る」「提出すべき課題がある」「授業時間内だけでは作業が終わらない」といった条件である。

4. インタラクティブ・セッション

今回の集会では、課題研究シンポジウムの時間帯と同時にインタラクティブ・セッションが初めて開催された。そのうち、篠田が参加した 2 つのセッションの概要を以下に示す。

(1)「教養としてのイノベーション教育の試み 大阪大学「イノベーションのためのパトス・ロゴス・エトス」の紹介と体験（佐藤浩章氏（大阪大学）・佐藤文亮氏（(株)ワークスアプリケーションズ)）」

大阪大学の教養教育のカリキュラム改訂の一環として 2016 年度に開講された「イノベーションのためのパトス・ロゴス・エトス」（2017 年度からは全学生向けの共通教育「基礎セミナー」として開講）を、参加者が学生役となって約 40 分で体験するというものだった。この授業の目的は、「2020～2050 年という激動する時代において、社会をより良いものに刷新するという強い意志を持ち、周囲を鼓舞して変化を導くことのできるリーダーを育成する」ことにある。なお、当日は「2020 年から 2050 年の大学の教養教育（必修）として最も相応しい学問はどれか？」というテーマについて、グループディスカッションを経て、特に弁論によって他者の共感を得た者の説を称える、という評価を行ったうえで、各グループでのディスカッション内容について情報共有する、というものであった。過去の学生によるアンケート結果では、満足度は高く、「どんな問いを立てて、どのように生きていくべきか」「時代の変化にどう対応するか?」、「問いを立てる力を身につける」という点は達成されているとのことであった。

(2)「第三の領域」における教職員のキャリア形成（二宮祐氏（群馬大学）・浜島幸司氏（同志社大学）・小島佐恵子氏（玉川大学)）」

大学改革の進行に伴って、主たる職務を教育研究と一般的な事務との狭間である「第三の領域」とする教員、専門的事務職員の必要性が主張され、現にその配置が進んでいる状況にある。が、この「第三の領域」で働く教員、専門的事務職員について、学習支援に関する専門性の特定や発達障がい学生への支援の現状といった、個々の分野毎に必要な資質やスキルについては明らかになってきた一方、そのキャリアがどのようなものか、どうあるべきかについて分野横断的な十分な検討が行われてきたとは言い難い。以上のような問題意識のもと、「第三の領域」での勤務経験のあるまたは関心のあるセッション参加者の経験を事例として共有しつつ、約 30 分のグループディスカッションを通じて、分野横断的にその特徴を明らかにすることを目指したものである。ただし、今回のセッションはスタートアップ的な要素が強く、今後実施される質問紙調査の結果等を踏まえての研究成果が期待される。

5. 平成 29 年度 東洋大学 IR シンポジウム「大学教育の効果－「働く力」の形成を中心に」

日 時：2017 年 12 月 9 日（土）13:30～17:00

場 所：東洋大学白山キャンパス

参加者：篠田 雅人 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

「大学像答申」（1998 年）、「学士課程答申」（2008 年）、「質的転換答申」（2012 年）の 3 つの答申は、大学教育のアウトカムのモニタリング、職業的レリバンスを求めてきた。大学教育によって学生にどのような知識あるいは能力を身に付けさせ、「働く力」を形成したかについて、理論と実践の両面から 4 名の講演と質疑応答からなるシンポジウムであった。以下、4 人の発表者の発表概要を箇条書きで示す。

(1) 「大学生の学力と仕事の遂行能力」（小方直幸氏（東京大学大学院 教育学研究科 教授））

- ・今流行の「職不問（流動）型＝コンピテンスモデル」は、学問と職業準備教育の関係で見ると、職業に寄与する具体的能力の育成を求めるものであり、それは教育成果としての能力の分解と可視化をするという、一見すると良い話のように見える。しかし、その結果は、ハードな専門知識の軽視、ソフトな汎用スキルの重視という、学問を通じた職業準備教育の不可視化というリスクを孕んでいる。
- ・コンピテンス論への依存は、学問ひいては大学の痩せ細りに繋がるおそれがある一方、現場の知識の存在・価値も明らかで、学生にインパクトを与えるのはこの側面でもある。しかし、正課外学習への依存の高まりは学問の痩せ細りにも繋がる。したがって、現場と融合した学問教育の展開や学問自体の転換が要求されるだろう。
- ・日本の学生の学力問題・学習成果問題は、授業の取り過ぎ取らせ過ぎにある。米国では予復習時間で 1 週間が回る。また、日本の学生は多様な時間を生きているが、米国の学生はキャンパス時間を生きている。様々な文脈で学んでいること自体は評価されてよい。
- ・もともと同一年齢層という点で均質化されているところに、シラバスやナンバリングといった大学教育の規格化が進んだことにより、正課内教育は、世間からの信頼や安心と Made 「of」 ○○Univ. という製品の品質向上を得た。しかし、授業における自律性や多様な他者との関係性が失われ、Made 「from」 ○○Univ. という形勢逆転の不可能性を生み出している。
- ・留学やインターンシップといった正課外教育が充実する一方、正課外教育でも学びの管理が進んでいる。これにより、自由で多様な時間の使い方や自己認識の喪失を招き、多様な能力を身にまとった画一的人材の供給が進んでいる。
- ・IR（Institutional Research）室は、就職力を定義し、在学中の学びとの関係や出口との連関を確認し、大学（Intellectual Relevance）は、世の中のあらゆるものと知的に会話をし、知的な関係性の構築に努めることが必要である。

(2) 「ステークホルダー調査から見た大学教育の効果～大学の外からの視点から～」（小林

浩氏（リクルート進学総研所長、リクルートカレッジマネジメント編集長）

- ・大学選びに際して、高校生・高校教員・指導主事・保護者で視点が異なる。
- ・大学は、大学に進学するメリットを高校生に伝えられていないおそれあり。
- ・社会からは、「どの学部で何を学んでいるのかわからない」「大学卒業時に何が身についているのか」「自ら考え主体的に行動できる人材の枯渇感（指示待ち社員の増加）」「グローバル化に対応できているのか」という疑問を抱かれている。
- ・高校生・保護者・高校教員共に将来必要な力は「主体性」「実行力」「発信力」と認識しているが、実際に持っているのは「傾聴力」「規律性」といった「空気を読む力」。
- ・在学生が「大学で身についた」と思う能力のベスト3は、「専門分野の知識・技術を習得する力」「物事を様々な視点から考える力」「論理的に考える力」。
- ・就職活動時に企業が重視しているのは「企業への熱意」「今後の可能性」「適性検査の結果」「基礎学力」だが、学生がアピールするのは「アルバイト経験」「クラブ・サークル活動」。将来への展望や学力の自身のなさが見受けられる。
- ・“学ぶ”と“働く”を繋ぐポイントは、「なぜ」という問いを立てて自己省察できる「自ら考え行動できる学生」の育成。

(3)「大学の学びが働く力を高めるー大学教育はこのように役立っているー」（藤村博之氏（法政大学 イノベーションマネジメント研究科 教授））

- ・社会が必要としている人材は、①10年後の社会を予測し、それに基づいて今後の進むべき道を指し示す人材、②特定分野に深い造詣を持ち、その分野の問題を発見し構想を打ち出す人材、③すでに明らかになっている課題に取り組み、解決していく人材、④決められたことを決められた手順に従って正確に処理していく人材、の4つが挙げられるが、大学で養成されるべきなのは、そのうち①②である。
- ・大学教育の核心は「論理的思考の訓練」であり、大学は「頭の体幹」の基礎をつくる場所である。就業力を構成する要素を①文書作成力、②情報収集・分析（批判的なものの見方）・発信力、③状況判断・行動力でとらえ、大学教育の内容を高度化していく必要がある。
- ・日本企業の新卒採用は、これまでどおりメンバーシップ型が維持されるだろう。

(4)「大学教育の効果ー卒業生調査からの知見ー」（劉 文君氏（東洋大学 IR 室 准教授））

- ・他機関の調査結果によれば、企業・社会が求めているものは、「コミュニケーション能力」「主体性」「協調性」「チャレンジ精神」と極めて曖昧なもので、専門的学力は求められていない。とはいえ、専門の基礎となる知識や考え方を着実に身につけさせることは求められている。
- ・東洋大学の卒業生調査の結果から、①教員・公務員への就職者の成績は高い、②上場・大・中企業への就職者の成績は普通か低い（上場の有無や企業規模と成績とは関係がない）、③小企業・その他への就職者の成績は少し低いことが判明。
- ・東洋大学の卒業生調査の結果から、①問題解決力やコミュニケーション能力といった「汎用（的）能力」は、授業外で形成されている、②情報スキルは、授業との関連が強いこと

が判明。

- ・授業の方法は、幅広い教養や専門的な知識・技能・態度といった授業によって得られる能力の獲得に重要な意味を持つとともに、授業の予習・復習や大学の授業とは関係のない自主的な学習のための時間に影響を与えている（特に学生参加型授業）。

6. 第2回 大学教育イノベーションフォーラム 「大学教育開発の専門性を探る」

日 時：2017年12月11日（月）14:00～18:00

場 所：Conference Branch 銀座

参加者：篠田 雅人 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

大学教育イノベーション日本（HEIJ）が目標として掲げる、大学の教職員の能力開発、カリキュラムや教育方法の開発、教育マネジメント・組織開発等、これらの総体としての「大学教育開発」を促進すべき時代が到来していると言えるものの、その担い手たる教職員に求められる専門性については、明確な合意があるわけではなく、立場も専門分野も多様である。こうした多様性を活かしつつ、大学教育開発の専門性を育成・確保するため、現状と課題を抽出し、議論を深めることを目指した、4名の報告とパネルディスカッションからなるシンポジウムであった。以下、4人の報告者の発表概要を箇条書きで示す。

(1)「これからの大学に求められるマネジメント・組織開発」（吉武博通氏（公立大学法人 首都大学東京 理事、学長特任補佐、大学教育センター教授））

- ・産業界が高等教育に要請している問題発見力やリベラルアーツ、コミュニケーション能力といったキーワードは、実は大学教育改革の事例で示されたキーワードと一致している。
- ・仕事との関係において大学教育が重視すべきなのは、好奇心×思考力の底面積をどれだけ広げられるか、という視点である。
- ・大学における教育改革の問題は、一部の教育組織、あるいは一部教員レベルでの実践に留まっていることであり、「組織としての教育力」の確立までには、①個々の教員が担う教育の高度化、②構造化・体系化されたカリキュラムに基づく教育の組織的展開、③これらを効果的に後押しする業務・システム基盤といった課題がある。
- ・大学に相応しいマネジメントの確立のためには、理念・ミッション・ビジョンの共有が大事。また、共有する価値・重視すべき考え（計画・戦略）は、作文で終わらせずに、定着させることが大事。

(2)「インストラクショナルデザイン（IDに基づく教育開発）」（鈴木克明氏（熊本大学 教授システム学研究センター長・教授））

- ・「知識は構築するもの」であり、教授・学習過程の革新のためには、これまでのような「経験・勘・度胸」によるものから「何をどのように教えるのか」というインストラクショナルデザイン（ID）の視座が重要である。
- ・学習目標の分類学として最も広く知られているブルームの分類学では、認知的領域の学習目標を「知識・理解・応用・分析・統合・評価」の6階層に分類する枠組みを提唱している。（2001年の改訂版では、6階層を「知識・理解・応用・分析・評価・創造」とされた。）
- ・IDの生みの親とみなされているガニェは、学習成果を「言語情報・知的技能・認知的方略・運動技能・態度」の5分類にまとめた。同時に、いかなる学習成果を目指す教育活動でも採用可能な9教授事象をまとめている。なお、9教授事象のレベルが上がるにつれて、「学習を支援するプロセス」から「自分で学習を進めるプロセス」になっている。

- ・ペリーは、学生視点から「絶対主義段階→相対主義段階→評価主義段階→コミットメント段階」という認知的発達段階説を提唱している。
- ・メルルは、IDの第一原理において、「現実課題・活性化・例示・応用・統合」という5つの要件をまとめている。

(3)「ファカルティーディベロッパー (FDer) に求められる専門性」(佐藤浩章氏 (大阪大学 全学教育推進機構 准教授))

- ・FDerの業務内容と求められる役割は、「研究－研究者」「開発－開発者」「プログラマー・設計者・講師・進行役」「サービス－コンサルタント」に加え、「組織開発－調整者・チェンジエージェント」といえる。
- ・FDerの実践方略は、①つかむ（組織の現状を理解する）、②つくる（全体像を描く）、③つなぐ（人・知識・情報を超域的につなぎ、調和させる）、④つみあげる（エビデンスを積み上げる）、⑤つたえる（実践を発信し普及させる）の5つ。
- ・マクロ・ミドル・マイクロレベルの教育活動と全学・学部学科・教員個人レベルをマトリクスにしたFDの3×3モデルを提唱している。
- ・FDerに求められる専門性は、学習心理学・成人教育論・インストラクショナルデザイン・組織論・調査論・高等教育学という知識、インストラクショナルスキル・コンサルティングスキル・ファシリテーションスキル・教材開発力という技術、ニート・誠実さ・前向きさ・社交性・ストレス耐性・ホスピタリティという態度といえる。
- ・FDerの育成と専門性向上方法として、大学・大学院等における体系的プログラムは存在せず、個別の論文指導や高等教育センター等におけるOJTが一般的。専門家団体としては、日本高等教育開発協会がある。その他、国内外の学会や愛媛大学、コンソーシアム京都等のFDer養成講座、愛媛大学のSPOD研修生制度、民間企業における教育担当者向けセミナーといった研修機会がある。

(4)「大学院教育による大学経営人材の育成の現状と課題」(小方直幸氏 (東京大学大学院 教育学研究科 大学経営・政策コース 教授))

- ・「経営人材」とは、一般には経営リーダー層を指すが、「大学経営人材」という用語は、業務の高度化・専門化の言い換えの場合もあるが、曖昧な使われ方をしている。
- ・近年少しずつではあるが、学問としての制度化（教科書の出版、教育組織の設置、学会の設立）も進みつつある。
- ・東大の大学経営・政策コースでは、職員に特化しているわけではないが、これまでの総入学者数の7割程度は職員であり、そのことが教育プログラムにも反映されている。ただし、必ずしも大学経営に特化した科目構成とはなっていない。また、学生のバックグラウンドや関心が多様なため、アカデミック教員のみでは対応が不十分なこともあり、学生同士の学びを重視している。教える側も、複数教員による授業や非常勤・ゲスト講師の多用といったティーム・ティーチングを試みている。
- ・今後の課題としては、①社会人の経験を生かした教育、②汎用的プログラムの限界、③学位の流通の意義が挙げられる。また、大学経営人材養成の展望としては、①各団体における個別研修の考察と将来的な協同、②例えば学長経験者を招いた授業の導入等の科目レ

ベルでの部分的試行、③短期履修プログラムの開発、④研究の積増による大学院教育の構築が挙げられる。

7. 東京大学高大接続研究開発センター主催シンポジウム「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」

日 時：2018 年 2 月 10 日（土）13:30～17:30

場 所：東京大学本郷キャンパス工学部 2 号館 213 大講堂

参加者：篠田 雅人 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

いま大きな注目を集めている大学入学者選抜改革における英語試験のあり方について理解を深め、各大学における今後の方向性の検討に役立てることを意図したシンポジウムで、6 名の講演と討論からなるシンポジウムであった。以下、6 人の講演告者の発表概要を簡条書きで示す。

(1) 「大学入学共通テストにおける英語試験について」（山田泰造氏（文部科学省高等教育局大学入試室長））

- ・日本の高校生における英語は、スピーキングとライティングにおいて極めて課題が大きい。加えて、「話すこと」及び「書くこと」における「外国語表現の能力」の評価が十分行われていないことも課題。
- ・「話すこと」のスコアが高い生徒程、英語のスピーチやプレゼンテーションを経験した生徒の割合が高い。
- ・学習指導要領を踏まえ、4 技能の、高校入試や大学入試においても英語の資格・検定試験活用が進む。
- ・現行のセンター試験（英語）は、リスニングを実施するなど高校段階での英語教育の成果を適切に評価しようとする工夫が重ねられてきたが、リーディング、リスニングの 2 技能しか評価できていないことが問題。
- ・4 技能を問うべく工夫がなされてきたが、発音・アクセントを問う問題や、会話文において単語を並びかえる問題など、受験生はスピーキング・ライティングの能力を間接的に問う問題への対応が必要となり、4 技能の修得が進んでいない。
- ・高等学校学習指導要領における英語教育の抜本改革を踏まえ、大学入学者選抜においても、4 技能を適切に評価するため、共通テストの枠組みにおいて、現に民間事業者等により広く実施され、一定の評価が定着している資格・検定試験を活用。
- ・検定試験のうち、試験内容・実施体制等が入学者選抜に活用する上で必要な水準及び要件を満たしているものをセンターが認定、その試験結果及び C E F R の段階別成績表示を要請のあった大学に提供。
- ・国は、活用の参考となるよう、CEFR の段階別成績表示による対照表を提示。
- ・学習指導要領との整合性、実施場所の確保、セキュリティや信頼性等を担保するとともに、認定試験の実施団体に対し、検定料の負担軽減方策や障害のある受験生のための環境整備策を講じることなどを促す。

(2) 「国立大学の入学者選抜における英語試験について大学入学共通テストにおける英語試験について」（片峰茂氏（前・長崎大学長 前・国立大学協会入試委員長））

- ・ 高大接続システム改革は、グローバル化の進展と矛盾、異次元の科学技術（情報科学、生命科学）、高等教育のユニバーサル化・少子化、18歳人口減少局面、大学の個性化（差別化）といった社会の変容により、世界観、生命観、幸福観等の新しい価値（観）の創造、新しい資質（能力と態度）といった新たなニーズが生まれたことから必要となった。
- ・ 大学教育の高度化、グローバル化と“個性化”に資する教育改革のドライビングフォースとして公益に資することが国立大学における入学試験の意味。
- ・ 課題は、①平成32年度新共通テストの公正かつ適切・円滑な実施、②平成33年度入試は改革の起点であり、③近未来の大学入学者の資質変容に向け大学教育改革の更なる推進が必要の3点。

(3)「英語民間試験の立場から」(込山智之氏(株式会社ベネッセコーポレーション GTEC 開発部長))

- ・ GTEC は、大学入学共通テストにおいて資格・検定試験に求められている、①学習指導要領との整合性、②CEFRとの対応関係、③大規模受検（離島・僻地含む全国）の対応、④公平性・公正性の担保、⑤受検料・障害のある受検者への配慮の5点に配慮した態勢を整えている。
- ・ GTEC は、技能統合型の指導の広がりに伴い中高生において最も受検者の多いスコア型英語検定となっている。
- ・ GTEC は、成長段階に合ったテスト群を用意しており、同一生徒の英語力推移を経年比較することが可能。英語力の伸びからどの技能の指導をどのようにするか検討のベースにもなる。

(4)「スピーキングテストの開発・運営から見てきたもの」(羽藤由美氏(京都工芸繊維大学教授))

- ・ 京都工芸繊維大学(KIT)におけるコンピュータ方式(CBT)テストと、京都市立京都工芸学院高等学校(KGH)フロンティア理数科におけるテレビ電話(インタビュー方式テスト)の開発・運営の結果から、「やり方次第で大きな正の波及効果を期待できる」という手応えはある。
- ・ しかし、構成概念(何を測るか)が異なるテストの併用、正当なスコア対照ができないこと、合格しやすいテストをめぐる混乱の可能性といった問題点がクリアできないため、選抜試験としての公正性・公平性が担保できないと考える。
- ・ 受験者や国民は、事実を理解し納得しているか? 国や大学は、訴訟でも争う覚悟や準備をしているか? という観点からも、今回の入試英語試験改革はあまりにも拙速で無謀である。
- ・ 「公正・公平を期すなら、テストの一本化、国の管理下の運営が不可欠」、「『入学者のX%は英語4技能のテストを経た者とする』というような枠を設け、具体的な運用は各大学に任せる」、「厳正な査察をする制度やノウハウを構築する」のがオルタナティブの提案。

(5)「スピーキングテストでスピーキング力は上がるか?」(阿部公彦氏(東京大学准教授))

- ・スピーキング困難の大きな原因である心理的抵抗感は、テスト化でむしろ高まる。
- ・発声を伴う試験を一律に課すことの弊害が十分に理解されていない。
- ・「4 技能」看板の問題（「四つ均等」の根拠は？「均等」の意味は？何を「均等」に？授業時間？配点？教科書の頁数？順序や難易度の違いについての無理解、「能力の均等」を目指すことの珍妙さ等）も大きい。
- ・そもそも「4 つ」にわけるのはテストをつくる側の都合もある。
- ・現実の英語では、ひとつの技能が純粹にあらわれることはまずない。むしろ複合的に使われるのが普通。
- ・4 つばらばらは、むしろ「現実の英語」「役に立つ英語」から遠くなる。
- ・学習の際にも、リスニングと作文や、音読と読解を組みあせるなどした方が効率的。
- ・「4 技能」についてきちんと考えている人は、むしろ技能間の連携・連動を考えている。
- ・「英語の音のシステムに慣れ、リズムを体で体得する」ことが大事。
- ・そもそも日本語でも、「スピーキング」の練習は最近行われるようになったばかり。日本では、そうした「オーラルの知」の伝統がないため、プレゼンやディベートが表層的で形式的なものになりがち。内容との有機的な統合の欠如も問題。議論を踏まえ、思考を促し、そのあとではじめて「やり取り」がくる。無内容な「スピーキング技術」を妄想するのはまさに勘違い。したがって、オーラルはまず日本語から。
- ・統一スピーキングテストが導入された場合、一律にスピーキングの試験を課すことはしない、「スピーキングを鍛えたい人にそのための選択肢を提供する」という形にして、スピーキングが苦手であるとか、不必要であるという人はペーパーテストのままでいける方式にする、ペーパーテストの一部にかえて、スピーキング実技テストで受けることを可能にする、スピーキングはあくまでオプション、という形が現実的。

(6)「これからの大学入学者選抜に望むこと」(宮本久也氏（東京都立西高等学校長 全国高等学校協会会長))

- ・大学入試改革における英語の扱いについては、高校で英語 4 技能を育成し、それを大学入試で評価するという全体の方向性への理解は進んでいる。
- ・4 技能評価に民間の資格・検定の活用は、①学習指導要領との整合性、②家庭の経済力による影響、③地域格差による影響、④高等学校における英語教育が変質してしまう懸念、⑤大学入試での活用方法が明確になっていないことから、心配の声は多い。
- ・新制度で活用される民間の資格・検定の内容が平成 30 年 3 月末まで明らかにならないため、各大学が民間の資格・検定をどう活用するかが新年度にならなければ明らかにならないことが大きな問題。
- ・大学入試における英語 4 技能評価に向けた提言として、①高校での学習実態を踏まえたものにする（大学入試は高校での学びの成果を評価するものであるべき）、②まずは英語 4 技能評価を定着させることを最優先にし、民間の資格・検定のハードルは低く、ウェイトは小さくする、③安心して民間の資格・検定試験を活用できる条件整備を行う、④各大学が求める英語の能力、大学での英語能力の育成計画を明示する、⑤民間の資格・検定の実施・活用状況等の検証を十分行うことが必要。

8. 大学教育再生加速プログラム テーマⅡ・Ⅴ共同シンポジウム「高等教育に求められる質保証を考える」

日 時：2018年2月16日（金）10:30～16:30

場 所：品川 THE GRAND HALL

参加者：篠田 雅人 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）

本シンポジウムは、大学教育再生加速プログラム（以下、AP）のテーマⅡ「学修成果の可視化」およびテーマⅤ「卒業時における質保証の取組の強化」の採択校による共同主催となっており、文部科学省、有識者、AP 採択校のそれぞれの視点による発表・意見交換が行われた。午前是有識者2名による基調講演、午後は採択校（4大学）による事例報告および文部科学省職員を加えたパネルディスカッションという内容であった。以下、2名の基調講演と4大学の事例報告の内容を簡条書きで示す。

（1）基調講演Ⅰ「学修成果の可視化と質保障」（濱名篤氏（関西国際大学学長））

- ・中教審高大接続答申（2014）記載のとおり、3つのポリシーに加え、大学全体としての共通の評価方針（アセスメント・ポリシー）の策定が必要である。同方針に基づいて、学位プログラムの Check（評価）を行い、学修成果の把握、評価方法の開発・実践等を進めることが重要である。なお、私立大学における同方針の策定状況は14%程度（私学事業団調査より）。
- ・中教審審議における大学教育の質保証についての現状認識は、大学全体としては「不十分」（積極的に改善努力を行っている大学と努力不十分な大学とに二極化しているとの指摘）。・各大学の DP が達成されたかを測定することが極めて重要。個々の学生の学修成果を把握し、大学の説明責任を確保するために、その概要を公表することが必要であると考えている。
- ・中教審大学分科会将来構想部会の論点整理（課題と改善策）。

①教育課程の改善

課 題：シラバス記載内容（準備学修に必要な学修時間の目安、ナンバリング等の授業科目の教育課程内の位置付けや水準を表す数字や記号、人材養成の目的又は学位授与の方針と当該授業科目の関連）にバラつきがあり、DP・CPに準拠した組織的な教育課程が展開されていない。

改善策：大学設置基準の改正又は一定の指針の提示

②学修に関する評価の厳格な運用

課 題：GPA の運用実態（進級・卒業判定の基準への活用）にバラつきがある。個々の授業や成績評価の標準化が十分に行われていない。

改善策：GPA 活用事例（GPA の分布の共有・公表）の提示

- ・個人の学習成果や大学全体の教育成果の指標として標準化されたものは存在しないため、各大学が自らの大学の特性に応じて自主的に策定・開発を進めていくことが必要である。その際、複数の情報（直接的・間接的）を組み合わせ、多元的に活用することが重要。
⇒米国カールトン大学では、それぞれの目標ごとに多元的・重層的な評価基準と評価

方法が設定されているが、全ての学生が全ての評価基準・方法で実施しているわけではない（実施する必要はない）。複数の基準・方法を設定することが重要である。

・関西国際大学の取組紹介

- ① データを活用した 3 層構造（大学・学位プログラム・学生個人）のアセスメントを明確化。
- ② 産業界とのチューニングも視野に、「KUIS 学修ベンチマーク」を策定。学生は、各学期末にベンチマークセルフチェック（e ポートフォリオに搭載）で自己評価（根拠・理由も記述）を行い、その評価をもとに教員が面談を実施（他者評価）し、データを蓄積。

⇒ルーブリックを用いて 4 段階で評価。全体の 8 割がレベル 3 以上を目標としていたが、現在は 7 割程度。

- ③ 学生の自己評価能力を高めるため、様々な場面でルーブリックを活用。学期末にリフレクション・デイ（経験の外化・振り返り）を実施している。授業科目「評価と実践」を新設。
- ④ 到達確認試験（試験内容は必修科目の内容、学内で作成）を 3 年次に実施。不合格者には再試験を実施。4 年次の卒業研究に足る学力の有無を確認している。
- ⑤ IR 活動を強化するため、他大学と共同でコンソーシアムを構築。加盟大学の学生データを全て紐付けてビッグデータ化。教員は、評価の妥当性についてエビデンスを添えて学生に説明している。

- ・今後の課題は、いかに社会に学修成果を理解してもらい、社会と共有できるかである。各大学の自助努力だけでは限界があるため、社会（特に産業界）への理解促進のため、文科省には頑張ってもらいたい。

(2) 基調講演Ⅱ「学士課程卒業時の質保証：誰のために何を保証するのか」（吉田文氏（早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授））

- ・高等教育の質保証に係る制度化の経緯について、審議会答申の内容等を踏まえて網羅的に説明がなされ、欧米高等教育の質保証の事例紹介があった。

⇒質保証に係る日本と欧米の決定的な違いは、市場（社会）の要請に応えることが各大学の目的に明確に位置付けられていることである。

⇒米国では、スプリングス・レポート（2006）により、汎用的な能力を測定する標準テストの導入が提言されたが、各大学の独自性が重要であるとの AACU の反論があり、バリュールーブリックが策定されるようになった。

- ・外部質保証はある一定の基準を満たせば良いのに対し、内部質保証は更なる改善を求めるものであり、理念として両立が可能であるのかという疑問がある。外部質保証が内部質保証の実質化に連動しているのか検証が必要である。

(3) 事例報告Ⅰ「学生 IR に基づく主体的な学びのデザイン」（市村光之氏（横浜国立大学 高大接続・全学教育推進センター 准教授））

- ・ポートフォリオ内に「学生プロフィール」（学修・生活行動調査等の各種アンケートや自己チェックシート）を作成し、学生 IR（入学者選抜から卒業後まで、学生にフォー

カスした IR) を一元管理している。学生には、同プロフィールの内容を踏まえて、学年末に振り返りシート(自由記述式。学業で頑張ったこと、学業以外で頑張ったこと、自分について考えたこと、将来について考えたことの 4 項目。)を記入してもらい、新学期の履修計画や就職活動に活用させている。

(4) 事例報告Ⅱ「達成度評価の確立と学修成果の可視化」(阿波稔氏(八戸工業大学 学務部次長 教授))

- ・学修成果の指標として、20 の修得因子を策定。各因子は、自学の教育目標、生きる力、学士力、社会人基礎力、JABEE 共通基準を参照しながら抽出。教育課程の可視化を図るため、到達目標および授業科目と修得因子との関連付けを行い、一覧化している。

(5) 事例報告Ⅲ「ミクロな教育改善をマクロな質保証に繋げる」(関沢和泉氏(東日本国際大学教育改革推進室長 准教授))

- ・小規模大学のため、学修成果目標を授業単位で考えることが分かりやすいという計論に達した。
- ・DP に表現されている 21 の能力をルーブリック文例(コンピテンシーバンク)として展開した上で、各教員がシラバスを入力する際にその文例を参考にしてカスタマイズすることで、DP で示された新しい能力を授業の学修成果目標として取り組むことをシステムの支援している。

(6) 事例報告Ⅳ「今年度のテーマⅤ幹事校の取組報告」(中村信次氏(日本福祉大学 AP 事業推進委員長 教授))

- ・テーマⅤ採択校をつなぐ試みとして地域別研究会を、テーマ間をつなぐ試みとして、テーマ共催報告会を実施した。また、AP と社会をつなぐ試みとしてポータルサイトを制作した。

9. 平成 29 年度大学教育再生加速プログラム（AP）全テーマ合同報告会

日 時：2018 年 2 月 20 日（火）12：50～17：50

場 所：京都光華女子大学短期大学部

参加者：林 透 大学教育機構 大学教育センター准教授

内 容：

最初に、相場 浩和 京都光華女子短期大学部教授より、今回の AP 全テーマ合同報告会の趣旨目的について、各テーマの取組を理解するとともに、テーマ相互間の情報交流を図りながら、チーム AP としての連帯感を向上したいとの説明があった。

【第 I 部 12：50～16：20 各校報告】

報告①「選抜型から育成型への大学入試改革～答えは目の前の学生から～」

志村 知美（追手門学院大学 テーマⅢ「入試改革・高大接続」）

⇒大学職員主導のアサーティブプログラム。

⇒アサーティブスタッフである学生が 24 名。ガイダンス対応や座談会企画。

⇒アサーティブ入試で入学してくる学生の効果が徐々に見えてきた状況。

報告②「ギャップイヤーとクォーター制の導入」

中野 明人・牟田 美信（長崎短期大学 テーマⅣ「長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）」）

⇒国際コミュニケーション学科におけるクォーター制学事暦に活かして、1 年次のギャップタームにおいて、留学・中期インターンシップ・サービスラーニングを受講。

⇒2 年次の地域活動である、Awesome Sasebo! Project とつなげる。

⇒ギャップターム後の発展プログラムの開発。

報告③「授業のアクティブ化による授業外学習の促進と支援」

酒井 浩二（京都光華女子大学 テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」）

⇒京都光華の教育方針（「おもいやりの心」「寄り添う教育」）に基づく AP 推進。

⇒ノートテイキングのセルフチェックシート、レポート評価のループリック。

⇒ICT 演習での統一した授業運営、授業外活動に結び付ける授業運営の工夫。

報告④「アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化による教育改革～成果と課題」

小山 理子（京都光華女子大学短期大学部 テーマⅠ・Ⅱ複合型）

⇒1 年次必修科目「プレゼンテーション演習」を通した AL 化の取組。シラバス改善や AL ワークショップの実施など。

⇒プレゼンテーションのテーマのリアルさの追求。

⇒ミドルレベルディプロマポリシーの策定とその達成度の可視化。

⇒重層的な学修成果の可視化システムの構築（直接評価・間接評価）

報告⑤『学修成果の可視化』で目指すもの～取組概要と成果

安達 哲夫・坂井 一貴（富山短期大学 テーマⅡ「学修成果の可視化」）

⇒Web シラバスを機能追加する形で、期末の授業アンケート結果、毎回の授業アンケート結果を可視化するほか、全学 DP において身に付けるべき「5 つの力」の可視化を実現。

⇒「5 つの力」については、就職先や卒業生アンケートによるチューニングを実施。

⇒学修成果別の評価基準（ルーブリック）を明示（実質化には課題あり）。

報告⑥「卒業時の質保証としての『ディプロマ・サプリメント』

糸井 重夫（松本大学松商短期大学部 テーマⅤ「卒業時における質保証の取組の強化」）

⇒短大のため、ディプロマ・サプリメントは 1 年次終了時に準備の体制。

⇒ディプロマ・サプリメントに明示するコア・コンピテンスは 5 つに集約。

⇒学生や企業の反応を見ながら、実装に向けて準備。

【第Ⅱ部 パネルディスカッション「ポスト AP の可能性」】

第Ⅱ部のパネルディスカッションでは、相場 浩和 京都光華女子大学短期大学教授がコーディネーターを務め、第Ⅰ部の 6 名の報告者のほか、河本 達毅 文部科学省 高等教育局大学振興課 大学改革推進室改革支援第二係長がパネリストとして加わった。

最初に、文科省 河本氏から第Ⅰ部の各報告についてコメントがあり、それぞれの取組から学生の姿が伝わってきて、それぞれに教育改革が進んでいる印象を強くしたとの言葉があった。今後は、AP 事業全体としての評価も問われてくるので、AP 事業自体を一層、可視化していくことが大事であろうとの指摘があった。

その後、各報告者間で、他のテーマの取組からの気づきをコメントした。「建学の精神」をベースにしていることの大切、育成型入試の意義、短期大学における学期の見直しのあり方、Web シラバスを活用した学修成果可視化の工夫など、それぞれが参考となった事項を披露し合った。

高大接続改革推進事業に位置づけられる AP 事業の意味について、文科省 河本氏は、当初は、進学率の低下や入試システムの改善に端を発した高大接続改革であるが、AP 事業が果たす役割について、財務省だけでなく、国民社会には、まだまだ理解されていない点がある。大学同士での協働を通して、社会にメッセージを発してほしい。また、ポスト AP という点において、今後は、単なる大学教育改革というテーマでは補助金は得られないと思われるとのコメントがあった。

最後に、各校の取組の今後の方向性について、報告者から以下のとおりコメントがあった。
テーマⅠ・Ⅱ（京都光華女子短期大学部）

⇒どういう学生を受け入れるかという方針

⇒高校現場とのコミュニケーションの活発化。

テーマⅤ（松本大学松商短期大学部）

⇒APでの取組をしっかりと定着させること。

⇒多文化共生社会に耐えられる人材育成。

テーマⅣ（長崎短期大学）

⇒学生同士の相互交流。学びの成果を情報発信・情報交流。

テーマⅢ（追手門学院大学）

⇒保護者向け入試説明会など、保護者に対するきめ細かいサービス。

⇒大学と保護者が連携した学生・生徒支援プログラムの企画。

テーマⅡ（富山短期大学）

⇒評価やアセスメントの方法の追究。

⇒全入時代における学生の力の低下をどのように支えるかという課題。



IX. 活動日誌・編集後記

活動日誌

(2017 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日)

年月日	記事
2017 年 5 月 16 日	第 2 回スチューデント・リーダー・プログラム(SLP) 【キャリア開発】 『ぶち、教えちゃる！大学職員の仕事』 ～大学職員の先輩に聞いてみよう～ 場所：共通教育棟 1 階 15 番教室 概要：【開会挨拶・趣旨説明】 16:10～16:20 【第一部 話題提供】 16:20～17:00 「ぶち、教えちゃる！大学職員の仕事」 金子 晃（学生支援部学生支援課留学生交流係） 前坂 祥子（理学部学務係） 【第二部 ダイアログ】 17:00～17:35 【クロージング・閉会挨拶】 17:35～17:40 (総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授)
2017 年 6 月 13 日	第 1 回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会 (YU-AP 委員会)
2017 年 7 月 5 日 6 日	第 5 回・第 6 回スチューデント・リーダー・プログラム(SLP) 【ラーニングスキル開発】『ライティング入門講座』 ～レポートの書き方の基本的な作法とコツをつかめ！～ 場所：総合図書館アカデミック・フォレスト 共通教育棟 2 階 26 番教室 概要：①レポートの書き方の基本的な作法 ②レポートの書き方のコツの伝授 ③実際のレポートの事例を通じた演習 守本 瞬（金沢大学附属図書館係長） (総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授)
2017 年 7 月 11 日	テーマⅡ(学修成果の可視化) タスクフォース第 13 回会議
2017 年 7 月 20 日	テーマⅠ (アクティブ・ラーニング) タスクフォース第 14 回会議
2017 年 8 月 3 日	第 1 回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会・小委員会
2017 年 9 月 8 日	第 2 回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会 (YU-AP 委員会)
2017 年 9 月 26 日	第 10 回アドバイス会議
2017 年 9 月 26 日	山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 『アクティブ・ラーニング (AL) ベストティーチャー表彰記念 FD・SD ワークショップ』 ～第 1 回 AL ベストティーチャーによる模擬授業～ 場所：共通教育棟 1 階 15 番教室 概要：【開会挨拶・趣旨説明】 14:00～14:10 【模擬授業 Part1】 14:10～14:45

	「深い学びにつなげるアクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』」 上田 真寿美（山口大学国際総合科学部教授） 【模擬授業 Part2】 14:50～15:25 「「英語が嫌い」から「英語が楽しい」に変える アクティブ・ラーニング」 尊田 望（山口大学非常勤講師） 【質疑応答・対話】 15:25～15:55 【クロージング・閉会挨拶】 15:55～16:00 （総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授）
2017 年 10 月 17 日	テーマⅡ（学修成果の可視化）タスクフォース第 14 回会議
2017 年 11 月 1 日 7 日	第 7 回・第 8 回スチューデント・リーダー・プログラム（SLP）【ラーニングスキル開発】『プレゼンテーション入門講座』 ～プレゼンテーションの基本的な作法とコツをつかめ！～ 場所：総合図書館アカデミック・フォレスト 概要：①プレゼンテーションの基本的な作法 ②プレゼンテーションのコツの伝授 ③プレゼンテーション実践ミニワーク 大野 圭司（株式会社ジブンノオト代表取締役） （総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授）
2017 年 11 月 10 日	第 11 回アドバイス会議
2017 年 11 月 10 日	山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）＆医学教育センター共同企画 FD・SD ワークショップ 『ループブリックを活用した学修評価ワークショップ』 ～ループブリックの観点と記述に着目して～ 場所：共通教育棟 2 階 26 番教室 概要：【開会挨拶・趣旨説明】 16:10～16:20 【導入レクチャー＆事例紹介】 16:20～17:00 「ループブリックによる学修評価を知る、活かす」 俣野 秀典（高知大学地域協働学部講師） 「医学科チュートリアル教育におけるループブリック活用実践」 藤宮 龍也（山口大学大学院医学系研究科教授） 【ワークショップ】 17:00～17:55 「ループブリックの観点や記述を考える」 ファシリテーター：俣野 秀典（高知大学地域協働学部講師） 【クロージング・閉会挨拶】 17:55～18:00 （総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授）
2017 年 11 月 15 日	第 3 回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会（YU-AP 委員会）
2017 年 11 月 30 日	ラーニング・アドバイザー養成講座① 場所：共通教育棟 2 階会議室

	概要：「学習支援者に必要なスキルとは？」 清水 栄子（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室講師） 篠田 雅人（大学教育機構大学教育センター助教（特命））
2017 年 12 月 5 日	第 2 回 AL ベストティーチャー表彰式
2017 年 12 月 18 日	大学マネジメントセミナー2017 in やまぐち 『今、改めて考える“教職協働”』 ～地方大学の魅力発信と大学間連携～ 場所：山口大学会館 概要：【受付・ポスターツアー】13:00～ 大学リーグやまぐち加盟機関によるポスターツアー ポスターテーマ：「うちの大学・短大の教職協働を紹介します！」 【開会挨拶・趣旨説明】14:00～14:10 【基調講演】14:10～15:10 ①「東の山大でプレイフル！ ～職種と組織を超えた協働が日本を救う～」 樋口 浩朗（山形大学米沢キャンパス事務部研究支援課副課長） ②「教職協働による地域に信頼される大学づくり」 吉村 充功（日本文理大学工学部教授・学長室長） 【ポスター発表&ディスカッション】15:20～16:50 【クロージング・閉会の挨拶】16:50～17:00 （総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授）
2017 年 12 月 21 日	ラーニング・アドバイザー養成講座② 場所：事務局 2 号館 4 階第 2 会議室 概要：「メンタリングとスタッフ・ポートフォリオ」 清水 栄子（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室講師） 篠田 雅人（大学教育機構大学教育センター助教（特命））
2018 年 1 月 19 日	ラーニング・アドバイザー養成講座③ 場所：共通教育棟 2 階会議室 概要：「山口大学における学習支援者として目指すもの」 菊政 勲（山口大学創成科学研究科（理学部）教授） 寺西 晴美（学生支援部学生支援課副課長） 篠田 雅人（大学教育機構大学教育センター助教（特命））
2018 年 1 月 26 日	第 12 回アドバイス会議
2018 年 3 月 13 日	自己点検・評価タスクフォース第 4 回会議
2018 年 3 月 15 日	山口大学 共育ワークショップ 2018 『みんなで教育（共育）について語ろう！ ～大学と高等学校による授業協奏曲～』 場所：共通教育棟 概要：【開会挨拶】14:00～14:10

	【1 限目：基調講演】14：10～14：50 「生徒・学生が輝く『学び』とは」 今村 久美（認定 NPO 法人カタリバ代表理事） 【2 限目：大学×高等学校による模擬授業】《選択制》15：00～15：45 ①大学の模擬授業（1） 『目に見えない世界を科学する ～微生物バイオテクノロジー概論～』 藤井 克彦（山口大学創成科学研究科（農学系）准教授） ②大学の模擬授業（2） 『みんなの世界をビジュアル化 ～ものづくりのキャッチボール』 なかはら かぜ（徳山大学経済学部知財開発コース教授） ③高等学校の模擬授業（1） 『ビジュアル教材でイングリッシュ ～子供のときの思い出・選択と 幸せの関係～』 和田 将太（山口県立西京高等学校英語科教諭） ④高等学校の模擬授業（2） 『三角形の心の探究 ～心の相互関係～』 河本 順康（野田学園高等学校数学科教諭） 【3 限目：ダイアログ・セッション】15：55～16：55 「大学の授業と高等学校の授業ってどうなの？」 模擬授業担当教員×大学生×高校生 【閉会挨拶】16：55～17：00 （総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授）
2018 年 3 月 22 日	第 4 回外部評価委員会 （外部評価委員：高橋 哲也 大阪府立大学副学長、鳥居 朋子 立命館大学 教育開発推進機構教授、中澤 二郎 高知大学特任教授、秦 敬治 追手門学 院大学学長補佐）

編集後記

2017年度は、文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）（テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）・テーマⅡ（学修成果の可視化）複合型）にとって、中間評価の年度であった。関係者の皆様のご支援をいただき、おかげさまで、「S 評価」という最高の評価をいただく結果となった。これまでの取組が評価されたことに感慨無量であるとともに、あと 2 年間の取組を更に着実にやっていけるよう気を引き締めたところである。

テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）では、学士課程教育における AL ポイント入力率が 72.4%に達し、本事業で最終目標としている 70.0%に既に到達する結果となった。また、AL ベストティーチャー表彰が昨年度に引き続き行われ、5 科目 14 名の教員が第二回表彰を受けた。AL ベストティーチャーによる AL 型授業実践やアクティブラーナー（学生）の学修履歴をインタビュー形式でまとめた『Teaching & Learning Catalog』も第 2 号が発刊され、アクティブ・ラーニングによる教育効果や学修成果の情報が徐々に蓄積されつつある。

テーマⅡ（学修成果の可視化）では、学修到達度調査結果や YU CoB CuS（Yamaguchi University Competency-Based Curricular System）を可視化する環境が整う中で、当該学修成果を学生の自律的学修に活かしていく方策が重要な課題であり、各学部・学科における修学指導調査を行ったほか、事務系職員対象のラーニング・アドバイザー養成講座を創設した。今後は、直接評価と間接評価を活用した学修成果の分析結果等を提示しながら、学生の学修の充実に活かす方策を整えられるよう努めていきたい。

本学の AP 事業は中間評価という一つの節目を迎え、前半期に築き上げてきた成果の基礎に、新たなステップへと進んでいきたい。今後とも各方面からのご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）は 2017 年度に 4 年目を迎えた。着任直後の中間評価に向け、事業の進捗状況を把握することから始まり、数々の関連行事の運営やこのアニュアルレポートに至るまでの広報誌制作等、ほぼ全ての取組がアクティブ・ラーニングの推進と学修成果の可視化に向けた成果とも課題ともとれるということを痛感した年であった。YU-AP が目指すところの「直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの発信」はまだ途半ばであるが、過去 3 年間の蓄積も踏まえつつ、学修成果の可視化に向けた試行的分析に着手することができた。次年度以降は、蓄積されたデータを最大限活用し、学内はもちろんのこと、学外に向けた発信も含め、学生の学びについて本質的かつ活発な議論が様々な形で行われることを期待したい。今後とも関係の皆様からの叱咤激励とご指導ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

大学教育機構 大学教育センター助教（特命） 篠田 雅人

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）アニュアルレポート 2017

発 行 : 山口大学

大学教育機構大学教育センター（YU-AP 推進室）

〒753-8511 山口県山口市吉田 1677-1

TEL. 083-933-5261

2018 年 3 月 発行
